913.52
I157s9
O
00285291
O
複写

テ1X-39

校訂西鶴全集

尾崎紅葉
渡部乙羽 校訂

卷下

東京 博文館藏版

913.52 I15709 ⊙

西鶴全集

下卷總目錄

俗つれ〴〵……一
胸算用……六七
本朝櫻陰比事……一五一
織留……二四七
武家義理物語……三六一
萬の文反古……四五五
諸國はなし……五二三
置土產……五七三

國立國會圖書館藏書
国立国会
28.1.-6
図書館
285291

總目錄

新可笑記……六四五
好色三代男……七三七
附錄
日本新永代藏……八二一
元祿太平記……九二一

西鶴全集下卷

俗つれづれ（元祿八年板）

小池氏所藏

筆をとれば物書かれ、盃をとれば酒を懷ふ、爰にいにし年、俳林西鶴の作しおかれし一つの書あり、取るに捨つることを得ず、部せむことを思ひ、まだ咲かぬ櫻木に詞の花の盛なると、心の月の隈無きを、雨に向ひてかうの思ひをなし、垂籠めし徒然に綴りおかれし心を量りて、梓に縷め、目出度春のもてあそびにもと、下拙が好けるにまかせて世に弘むるになむ、まことに鶴が心の海廣く、筆の林世に繁きことを思ふに、

かの法師の心にをさ〳〵劣るまじと、予が好む方にまかせて、よしや難波のあしかるとも、咎は下拙がせばき心に負ふせて、あらたなる春の慰にもと、かの吉田の題號をかすめとりて、俗つれ〴〵草と名つくるになむありける、

元祿八乙亥年初春吉辰　　書林

叙

花の春、紅葉の秋去て、定め無き時雨月のはじめ、この俗つれづれを長き形見にして、松壽西鶴の限有る今はの時とりまぎれたる冊子の中より、此ごろ見さらへて書林何某にゆづる、題號は、かの月の下、雪の朝いとおもしろく愛あるものなれ、と書ける盃の心にや、

元祿八亥竜集正月のはしめ筆を

浪華俳諧堂西鶴菴

團　水撮

俗つれ〴〵

巻之一

一　過て善きは親の意見　悪きは酒

門に禁酒の札
兼好が公事相手
大鮹初夢
説経も聞く所
隣の酒盛に頭痛

二　上戸丸裸　みだれ髪

今の世の間鍋の綱
ましの大盃
よう御存知の巾着
思寄らざる追剝
不動詣の言立

三　地獄の釜へ
　　さか落し

四　おもはや違ひの
　　酒樽

盃は鬼の面
武藏野吃驚丸
熱燗我等が好物
あはれや水右衞門が果
明日とは待ぬ新尊靈

上郎野郎の二つ紋
てかけが玉子酒
さりとは不才覺な音信
思もよらぬ若後家
あつく過た末期の水

俗つれ〴〵

●過ぎて善は親の意見、惡きは酒

新春の御吉慶何方も御同前の中、今年の正月が仕納の親仁にも、若うならしやりました、と定つた口上を互に謂ひすてゝ通る、方々の御盃飲ぬ樣なれど、目出度申納むる所で押へられ、重ねゞ祝はれ、日頃解飲はといふさへ、はや理も聞えず、肩衣が臂に懸るやら、袴の腰が曲むやら、扇は那邊で遺したか、雪踏を踏替へ、溝に踏かぶり、禮にゆかいでも苦しからぬ所へ行きて、二三年以前の御力落を吊ひ、善からぬ事のみ盡して、今朝の七ッに出て、夕の黃昏まで辿行き跣足なる方に草履はきて、鼻紙まで失ひ、逆鬢になり、博奕に打耄けたる躰して如鷺狸と歸り、正月早々から醉覺の機嫌惡く、冷水四五盃息急しく飲むと、あたりあひの枕引寄せ、大鼾して一日の醉狂夢にや見るらむ、然るに此親仁たる人は格別の思入、常々子どもに言含めらるゝは、我無常時到りて、臨終の時節急なる時には言ふ事も難からむ、別の子細無し、唯酒を禁めて、月忌命日の齋非時にも、固く酒鹽の入りたる料理する事無く、家の内には壺、平皿の蓋も、盃に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて建つべし、此言遺より外なし、昨

日も日暮小太夫が說經を聞けば、あれほど力も強く、利發なる小栗殿も、横山に盛殺され給ふ、何を見ても、聞いても、己のいふ事に違ふ事はあるまじ、されども兼好とやらいふ者が、若き者の諺に、下戸ならぬこそと、異なことを書いていひならはせぬ、未だ生きて居らば、公事をしてなりとも只は置かじと思へど、今は亡き後の紀念の草紙、聞くさへ疎まし、此頃近所に酒宴があるやら、頭痛がしてと蠟めらるゝ顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、身の毛よだちて嫌ながら聽きたるが、今金言となりて、よく聞入れたる驗に、二番目に生れながら確なる親の跡を踏へ、俵の數藏に積みて、金袋を擔げさせ、いふ事に槌のきくも、炮烙頭巾を被りて、異見たら〳〵謂はれし親仁の御蔭、過分至極なり、兄に生れたる者は、世間からも親の眼鏡に外れし者と、心ある人は鼻であいしらはれ、交疎くなりゆけば、類をもつて集る男、酒一杯飲めば其日の榮耀之に過ぎずと面々の務むべき事懈るのみならず、其心からの慰事、一つも瓦からぬ企、手を懐に入れて世を渡る才覺、種々恐き事ども、現世後生ともに取失ひ、たつた今の事見るやうな、

●上戸丸裸みだれ髪

上々吉諸白あり、江戸吳服町を見渡せば、掛看板に名を記し、鴻の池、伊丹、池田、山本、清水、小濱、南部、諸方の銘酒爰に出棚の薫、上戸は門通りても千代を經ぬべし、茣被の四斗樽限りも無く飲盧ぬれど、つひに酒の醉の馬鹿にあはず、之を想ふに、武藏野の內端に飲むと見えたり、義理づめ、意趣の外は鞘咎なかりき、よしや組も若盛の事、大小の神祇組も、天の岩戸の靜なる此御時、伊勢守の御膳酒、其御滴に民草の末葉の菊まで、重陽の祝義變らず、永代堀の邊に町人の若い者集まり、夜まで間鍋絕えず、可さかづきの後みな〳〵氣強くなりて、俠客の噺に强い所を撰抜きて、我劣らじと語りぬ、力躰募つて言出しけるは、此中に胴骨据りし人あらば、只今より目黒原へ行きて、印に此盃をたてゝ歸る人やある、是賭陸にして、子細なく歸らば其人一代三年酒を續くべし、もし約束せしに行かずば、其方より此仲間へ雁三羽出し給へといふ、いづれも思案するに、燒石の九太夫といへる男、我行くべしと無分別に承合、件の印を持つて宿を出づる、此氣力に座中氣を呑まれて、今の世の間鍋の綱と、面々口を開きけるが、此儘に遣りて賭陸に負くべきも口惜し、いざ先へ廻りて九太夫を怖すべしと、飛上の彌吉、算用なしの藤介、身綾の茂左衞門、火ぜゝりの德兵衞、此四人作髭に投頭巾、奴扮裝の凄じく、萬事をすてゝ急ぎ、未だ印も見えねば、榎の樹の蔭に隱れしに、九太夫は吸筒を道の友として、寒いも恐いも忘れ、夢になりてぞ來る、されども本性を違へず、彼盃を建て置く時、彌吉黒闇より出でゝ詞を懸け、汝爰を知らずや、恭くも不動明王の靈地にて、飲酒戒を保つ所

へ吸筒は何事ぞ、下に置けと謂へば、九太夫震出し、重ねては取上げもいたしますまい、眞平御免と詫びける、それならば助くるほどに、着物も羽織も脱置いて裸になつて歸れ、脱がねばこれ、と刀を抜く、なるほど〳〵御意次第、と上下ともに脱げば、汝は常に横褌の革巾着に細金を入れて居るが、それはあるか、いかにも此に一歩七つと銀三十目ばかりもござります、それへ投げて進ぜます、よう巾着の事御存知でござりますと、いひすて〻逃げて行くこそ可笑けれ、其後にて吹筒を開けて又酔出し、野を内にして草枕、やくたいも無き折ふし、宵不仕合の追剝ども爰に來り、酒代おこせと、片端から丸裸にして一色も殘さず、立退きける、四人ながら裸にされ、是非なく立歸れば、何時となく酔覺めて夜は明け、芝にて九太夫に追附き、段々因果を語り、これ皆大酒より起る難義なり、差當つて恥掻きけるは、五人ともに褌褊ばかり、白晝に通町を此姿にてはといへば、九太夫才覺出し、皆々被髪になつて立並びて、同音に目黒の不動へ裸詣、御緣日ならねど難有き夢の告に任かせて、信心の友五人ながら、興も覺めて宿に歸りぬ、

●地獄の釜へさか落し

北野觀音寺の晩景一會の事、先約ある由申來候、龜屋も喧敷候へば、糺の森の下納涼申合せ候、

其許の衆中明日御出、心事貴面に以上、七月十九日、武藏樣、水右衞門より、明れば加茂川に誘ひつれ、世を萍の根をたちての快樂、罪の無い處一休和尚も跣足、瓜や茄子を其儘にと讀み給へるも此夕暮ぞかし、水上は山陰の片里より流れたる精靈棚、片器の飯、一蓮托生の蓮の葉、苧殻の箸も積れば、比叡を隣に眺めすて、御手洗に慮外ながら足差浸し、殘る暑は那邊にあるやら覺えず、殊更雲井に當社の神躰轟給ひて、名殘の驟雨を凌ぎて此松陰に便る僧あり、酒一盞と薦めければ、禁盃とて取擧げず、是は大きなる分別違ひ、是非にといへば、未來の恐ろしければ怨し給はれ、といひすて〻歸るを、子細聞くべしと各留めて、酒客の後生は什麼、御僧答へて曰く委くは大論唯識等にあれども、あらく〳〵語るべし、抑灌口地獄といふは、直徑五十由旬の燗鍋あり、それに湯玉立騰るほどに燗をして、銅の武藏野、潰膽丸といへるに丁と注いで、温なる肉を肴に挾み、牛頭馬頭立重りて腕を取り、興はなけれど最一盃と薦む、强ひられて飲めば、五躰蕩けて斷末魔の苦惱より堪え難く絶入すれば、活々といひて正氣になし、それは娑婆にて名を取りし飲手とも覺えず、銚子の繼目今一杯と薦む、否とはいはせぬ相手、又飲むで絶入る、如此責めらるゝ事、一日に幾度といふ數を知らず、其時鬼等詞を揃へ、必ず我々を恨むこと勿れ、汝が好ける酒の一滴は、井七十粒より出るを瀝捨て飲むで不善の業を作る、皆他より來らずといふにぞ、酔狂思當りて、千萬悔むに甲斐なしと語りけるに、まだ足らぬほ

どの男は、それはさうかと思ふもあり、否々見て來た者なし、樽次、底深も今に歸りて語らねば合點まゐらず、よし〳〵其熱燗が好物なり、後の世には酒は無いかと想ふたれば、と興がりければ、僧は皈る夕の空、顏は入日の朱を奪ふ、紫野の寺々の鐘撞きて萬景見えず、くらぶ山、みぞろ池の大蛇と飲み競べても負けぬ仲間も、弱き方より片附られ、初夜のころほひ上下入亂れて歸足、衞して御池筋まで皈りて見れば、水右衞門見えず、手毎に松明立てゝ、來れる道筋尋ぬれば、其夜の曙紫竹村の堀の流に、實にも姿は水右衞門、轉び落ちて、腰より下は蛭取附きて黒血に和られけるを、戸板に載せて歸りぬ、見ぬ後の世は無い物にもてから、目前に蛭の地獄は是か、

●思はく違ひの酒樽

夢を覺せる鐘が崎、筑前の湊に舟着きて、酒樽一つ相荷にして、博多に隱れもなき練屋の杢左衞門樣は是かと、彼樽を庭に下ろして、送狀は跡よりといひすてゝ、舟人等は歸りぬ、亭主之を見て、大坂の問屋より進物なるべし、北濱にては利發者にして備前屋の何某といはれ、諸國の客を請込、萬事の捌するほどにもなき男なり、何ほどの酒にもせよ、某も銘酒を造る宿へ、さりとては不才覺、此樽に天滿宮の前の大根の細漬をして送りたらば、名物にて珍らしきものを、此心入を大笑する處へ、備前屋が手代門口より袴肩衣を着て、愁を顏に顯はし、居間へあがりて手を下げ、口上いはぬ前に涙ぐみ、世は定めなし、斯樣に申す私から、只今も知れぬは人の身、御歎きなされてから復らぬ昔なり、此方の御子息杢之介樣事、六月七日の午前に頓死あそばし、何れも驚き、先づ氣附醫者、針立、灸など、種々に療治殘る所もなし、兎角はこれまでの御命、御死骸を其儘送るの折節、世間も暖立ちぬれば、酒鹽漬にして送りけると、申しも果てぬに各立懸り、蓋を開くれば然のみ形も變らず、月代を剃りすまして後下りの頭つき、死でも人の目に立ち、身には紋羅に紅裏附けて、女郎と若衆との二ツ紋に、鹿子の紫帶、此美男そもや上方にもあるべきや、未だ二十にして親を殘し先立つかと、母殊更に悔み、馴染なき妻も若後家となし、思ひもよらぬ無常を見る事よと、是非なき涙に沈みぬ、せめて末期水、事過ぎてなりともと申されしに、乳進らせて育上げたる乳母が、常住御好にてありしに、水より酒をと顏に灌ぎける、其後大坂へ從けて上したる小者に、最期のあらましを尋ねけるに、德藏泪を流し、杢之介樣の事今又申すも愚なり、御國よりは格別御酒あがり、寐酒より直に朝酒に飮續けられ、其御機嫌にて芝居へ毎日の御出、狂言の始まるまでは、太左衞門橋筋の茶屋者と遊びて、藝は匆々に見て、それより舞臺子を呼び、酒に亂れて暮方より新町の（以下不明）

俗つれ〴〵巻之一　終

俗つれ〴〵

巻之二

一　只取る物は澤桔梗
　　銀で取るものは傾城

二　作り七賢は
　　竹の一よに亂れ

錢無しに相坂の水
皆町人の下屋敷
富士屋吉田不思議の隱家
松菜を揃へる女あり
御合力の燈心賣

茶漬一杯小判十兩
あひの盃より色にいで
又比類なき奇麗好
四五十人前の膳組
二階には四挺三味線

三　眞のあやは後に知る〳〵

さて結構な錦の心中
阿波に隱れなき祝言
男持たぬは不孝の第一
今の世の中將姫
末世にもあり賢人の寄合

俗つれ〴〵

●只取るものは澤桔梗、銀で取るものは傾城

配札を貰ひ、又太夫が舞を聞果てゝ、皆六十に餘れる親仁三人、濱茶屋に腰懸けて足も休めず、さりとは昔作りのかたい穿鑿、味噌、鹽、燒木、又は利銀の納まる噺して、今日の暑を逢坂の清水にて凌がむと行くほどに、久兵衞が西面の座敷、入日は障なれど、風の爲には折節の晝寢所と、人々の心羨ましかりけるに、いかな〳〵人の家へは入りもせず、玉垣より外なる捨石どもに憩みて、浮藻掻のけ、岸には牛の足形も搆はず、是ぞ日本に七所の名水と、手して掬上げ、腹脹るゝばかり飲みて、野に働く男の火繩煙管を借りて、然も歸途に、佛の花に是よと、其儘萎れる澤桔梗を手毎に折りて、長町の裏道を眺め、今の難波の臺下屋敷に、中二階の簾捲上げ、京から取寄せたる大名行の妾もの、又は舞臺子の洒落て紫の手細取捨て、男なりける面白し、髮切姿は加賀笠の小せんとや、隱れもなき者のあるよし、或は男憎みの法衣比丘尼、世は種々の遊興所、琴の遠音、尺八、名木薫りに、墓の煙も立消えするなり、久しく見ぬうちに是は〳〵、此東側の二三丁目にて、二百目屋敷の時買ふて置かば、今三貫目屋敷に賣りて、

好き商事をするものをと、何につけても算用をいひ行くに、笹垣のほのかに、小倉縮の帷子に段染の疊帶して、緋縮緬の湯具、龍田に紅葉ながら、女には否といはれぬ好きものなり、黒髪何の樣子も無く一ツに集めて、半紙の引裂にてつい取上げて、眉て色作りたる風情は無く、淺黄緒の京草履に、片足は糸竹の男形はきまぜて、四十餘の飯炊らしき女と並びて、葉人參の細なるに松葉などいふものを揃へて、醬油がけにしてよ、茶は我等が燒くぞ、と火燧石に男らしき音なして、揚口に片尻懸けて、着物の裾亂れて、紅のうちより雪をのべたる足首より少し上まで見えける、三人の親仁夢のやうになりて、今一度美しき顔が見度ことの、最前の有樣は、君がため春の野に出でゝ若菜摘むとよみし昔公家の娘も是には、と泥みて竹垣立去らねば人も咎めける、竹の子扱くにはあらず、あの上臈はいかなる御方ぞと問へば、彼は富士屋の吉田殿、仔細ありての隱家と囁きける、さては氣高きも道理よ、諸の神さへ從へ給ふ吉田殿と、是難有く思込み、其中にも一人親仁、彼女郎が心任せになる事ならば、五兩や三兩の銀は惜からじ、と思切つたることを謂へば、扨も大氣なる事よと、二人笑ふて信にせざれば、此男少し急きて、前巾着を搜して、こまがね五粒にて四匁七八分もあるべきを手の上に据ゑて、後とは申さぬ、現銀に如此と悍るうちに、壹分足らずの豆板一個大溝に落取し、是はといふ聲響き渡り、身の汚るゝを構はず、搜しても見えざりければ、二人も見兼ねて、二時餘尋ねしに、ついに行方

知れずなりぬ、此親仁大方は狂亂して、惜や今の銀の行衞、我一代の仕損じと、世間搆はず涙を溢ず、兩人笑止には思ひながら、如何しても銀づくなれば合力ともいはれず、兎角は此方の損と、足の立たぬを無理に手を引き、堺筋より過書町に歸り、仍此銀を歎き、鉢卷して唸き出し、惣領枕近くに呼びて始めの次第を語り、銀遣したる所を密に知らせて、是非に若い目にて見出して參れといひつけられ、男に提灯持たせ、夜道の用意までして、親の氣を背かず其處に行きて、誓文の爲に溝を覗きて、いざ歸れといふ時、かの吉田を瞥と見て、かね〳〵我等が根曳にせんと思ひしに、はや人の所有にして爰は堪忍のならぬ所、井筒か小太夫を摑むで、斯る下屋敷ものにして置かでは一分立たぬと、それより直に色町に立越え、首からばつと出て、太夫請出す談合に夜を更し、愈二人の中一人、さのみ馴染もなけれど、僭上ばかりに請けると言觸れて、女郎もそれほどに滿足がらぬ事に、六百五十兩の內證約束、亭主落着く爲とて、紙入にあり合はせたる小判三十兩渡して、再び返らぬ金子、殘餘は四五日に才覺して、お內儀長町の家見に何を持つて御出と、笑ひ立ちにして立歸り、親仁の手前へ、やう〳〵搜出したと、それほどの豆板一粒、久七と口を合はせて出しけるに、是はと喜び、行燈近く寄せて、眼鏡を懸けて此銀を覗き、いかな〳〵我等が心覺えの銀にあらず、二分ある豆板まで、三星の極印を打ち置きぬ、此銀は吉の字極印、親から讓りの取て置、是は不思議と內藏に入て穿鑿するに、

其戸棚は輕く、大分行方知れず、此親仁目を廻はして、是ぞ因果の百年目と、何かなしに叩出され、些少の事より悪所露はれ、哀や身の置所も無かりき、これほど吝き親の子に斯る者もあるなれば、世の樣ほど可笑きはなし、今は詮方なくて、玉造出離に草の屋借りて、埒もない女を定め、渡世の種もなければ、深編笠に大脇指、日頃扱上げたる額口、今似せ牢人の爲となり、家々に入りて舌をなやして作詞、是は合力買とて、一文づくり燈心のつきつけ賣、さても捌取らぬ世渡、戀の中の〳〵中宿より隱衣裝の物好、山の端染に魚子織の道服着て、北樣といはれしことも去年の五月まで、

作り七賢は竹の一よに亂れ

見ぬ國の親仁ども竹の林に遊んで、浮世を見限りて樂みけるを、倭朝の難波津や八間屋といふ所に、家榮えたる藥坊主、同じ心の友二人住みけるに志深く、人の鑑ともなれり、殊に渡世の業は、宜しく勤める手代に任せ置き、何につけても殘る處なき身仕舞、諸人是を羨みける、明暮川岸に竹の腰懸を直させて、無藝の座頭、流行らぬ針立坊主、彼是心任せの目下なる友を集めにして髭剃らず、朱骨の扇子に風を招き、粽櫚竹の杖つきて、居士衣の紐を高く結び、茶瓶に面々天目を手に觸れ、言葉に子細を籠めて、古文めきたる顏色して、法躰の後十四五年も暮されしに、世の人此志を恥入つて、芝居遊興の談話さへ深く遠慮して、是ぞ倭朝の七賢組とて物堅く見えしに、川舟に紫の帽子懸けたる野郎あまた乘りて、大和屋座の囃方ども大方二階に上り、四挺三味線を彈きかけ、一のやの十郎兵衞節を聲揃へて謠ひ、京歸りの辻といへる大盡を、通夜佐太宮まで送るなど謂ひて、萬は南江の座敷屋砂の加兵衞承り、臺所船に四五十人前の膳組、髭籠の刺身一つで出すと見えて、才覺らしき男が箸をうつて廻る、又少し後より、小御座に幕を下ろして人を忍び顏に、女中の聲のみして、十二三の小女頭は常の島田に取上げたるが、如何しても身振の利根なるは只者とは思はれず、つく〳〵の女までもぬるき風俗なくて、世間に幅廣の帶の折節中幅の前結は憎し、彌七、庄左衞門都の末社交りに、太夫樣より禿遣手を見送りける、西南の二色遊興、榮花是より上のあるべしや、島原よりは三文字屋の男がつきて、太夫左門樣の遣手が御機嫌のほど見舞に下り、京へ連れまして歸るを嬉しさうなる顏色なり、此法師の入間に變る處は無きに、町人ながら銀持ちたる威勢にて、斯る浮世の面白い事に逢ひぬ、前の生で善き種を蒔き置きて今女郎に扱かする髭とは生出でけり、ひとり目の開くまで膝枕して、我一代にせめて一藏空けたしと、公用の外は銀儲の事にも起きず、隨分物の見事に捌きけれども、銀もつかふつもりあるものぞかし、ついに此大盡一歩を人に遣る事を知

らず、過日茨木屋の茶漬飯、勝手の急ぐにや、少し茶のぬるきやうに思はれて、今一杯といふ時、其盆に小判十両入れて内證へ送られしも、此道の粋めきて可笑、やう〳〵此舟八軒屋の濱に着けて、砂の加兵衞驅上り、此邊の荒物屋を捜し、今二三本足らぬ杓子を買求めて供舟に飛の乗れば、好き次手とあがりて、垣根に立ながらするもあり、夕風南の方を避けよと幔幕を絞れば、解語花ども顯はれ、中にも三瀬八十郎が手に觸れし盃を、其中でおあひ頼みますと鄰ぐれば、吹田といへる法師の前に落留りて、とかういふ間に其舟は棹上りて、思ひの外なる紀念とはなりける、是は一杯呑處と、各々同一心になつて、燗鍋で通ふ事とけしなく、後は七輪取寄せ、五升樽も大方に傾く、六月二十日あまりの月、須磨の山の端に今少しと見しまで色噺に亂れ、身を固めし事も浮雲の、中を潜りて誰が人魂か、ぴつかりと筋引きて消えける、いづれも常なりしに、伊丹といへる法師の是を覩て悟り、今も知れぬは人の身、分別するほどわけもなし、明日はどうからく〳〵狂言盡見むと、同じ心の二人法師、今日は移り變りて野郎に遊び、猶又戀に募りて、丹波屋の小琴、小薩摩に逢馴れ、ある時は頭巾なしに格子に立寄り、小琴小琴と七聲呼べばと、人の聞くを搆はず目の上まで情に陷り、恐らく泳ぐ〳〵瓢箪町に身は捨小船、引舟つけて、一萬日なりとも、此君達の年の明く日が廻向じや、此坊主ども二挺鉦叩きあぐる合點じや、と外に變りての物好、揚屋器物では茶も酒も飲まねば、諸事物入に仕懸け、老

木の花は喜ぶほど遣りて、つまる所の算用が、一年に百貫目宛と極めて、大晦日を驚かぬ内證、なか〳〵女男の二ツも思はくの外仕過ごし、人の指す所を思慮りてや、一人の法師家は變らず續きしに、世が面白からずと、時節ならぬ無理死、さても思切りける身や、人の惜みしは人に悪からぬ故なり、一人の法師も此友に離れて、何か甲斐なしと思ひさだめ、其後は世上をやめて人にも逢はず、唯茫然として月日を過ぎし、兎角此世に我心に愜ふ人も無ければ、片時も早く夢路を急ぎ、彼法師ならでは夜が明けずと、燈火の下に無常を觀じ、是非を極めて、心に懸る反古さらへて、既に最後の時、一子七歳になりけるが人並よりは生まれつきて、道識る書物の端くれも早讀習はせて末々樂みなりけるを、思ひの外なる親の所存、近う呼寄せて言聞かせけるは、我子細ありて自害する事なれ、然れば汝後に殘して、人々に沙汰せられ、顔眺めさす事も口惜し、人皆夢なれば、父と同一に死すべし、それも世に永らへたきと思はゞ兎も角もと謂ひければ、多時驚きたる氣色にて泪を流しけるが、其坐は立たず、さしうつむき、私は獨は死兼ぬれば、慮外ながら刺殺して給はれと、胸を開けて座を組めば、男はそれよといひながらも、刺通す手も震ひ、目眩れて前後心の闇なるが、死骸の血汐を洗ひ流し、ゆたかに枕させて、其身は確に吭掻切り、何か殘る處もなし、是さら〳〵亂氣に非ず、覺悟の事とはいへば我子に憂目を見せしは、固これ色道の亂より斯はなりぬ、人の中の人姿の人さへ、これは

まして愚なる人の愼むべき一つぞ、

●眞のあやは後に知る〳〵

三途八難の苦は女人を根本、と南山大師の法語なり、實に女ほどあさましきは無し、外面は菩薩に見えて內心は夜叉の如し、されども世を立つる人の男女なくては成りがたし、今時の風俗如何なる田舍生育も格別になりぬ、嵐も愁きと眺めし櫻が枝を、燒木になせる山人も、花の鏡となる水に鬢櫛を浸し、汐汲む蜑婦もうね足袋はきて、羨しき時世にあへり、備前の國は夕凪靜に、瀨戶の曙の美景は、西行法師が是はと橫手を拍ちし所ぞかし、爰に續きて牛窓の島崎は人家ありて、然も諸人の志優しく、次第に繁昌の津となれり、此所に森村氏の何某、始は世渡の爲に獵船手づからにさしひき賢く、年浪を重ねて後、分限此里に櫓を並ぶる家作なく、棟高うして住みぬ、杉を記に小島酒といふ名物の商賣するに、正直の頭に松の尾大明神も宿らせ給ひ、下戶も上戶も此家に通ひ樽の道狹く、福德の五十年、一代のうちに此濱の人の鑑となりぬ、夫婦貧家の時より互に稼出して、今老樂に節季の寢覺も氣遣無しに、明け行く春を祝ひぬ、殊更一人の娘美形にして、其名を錦といへる事浦人の子にはやさがたに聞こえ侍る、母親の才覺にて、京より御所がたの作法心得たる女の諸禮者を呼びくだして、錦十一歲の頃より是

を附置き、萬事都を移しけるに、少しも鄙びたる事去つて、見し人思ひの種となり、彼是の忍び文一つ二つも千束となり、東路の錦木も斯くあるべき事思ひ合せり、嬰兒總角のほど過ぎて、當流の投島田、女は髮かしらといひ傳へし如く、此息女十五の秋に見れば、山の甲斐なく木々の錦は、此娘に眺めかへて古されける、あまた緣のいひ入ありしに、一人の娘なれば宜しき人を聟にもがなと、世間聞合せけるに、我住める里には無くて、阿波の城下德島の町に思ふまゝなる事ありて、約束極めて吉日に送りける、七月七日の夜星の林も輝き、妻迎ひさゞめきて、丸に花菱の紋提灯鳴門の浪に映ひ、天も醉へるが如し、是ぞ古奈良の都より唐土へ嫁入も斯くありぬべしと思合せり、既に舟着より鴛籠續きて、仲人鼻高うして聟の許に入りて、引合の盃事、數々の祝儀過ぎて、匂ひの玉を大房に飾り附けたる蚊帳の釣手、長枕を取亂す時、人を喚び活る聲々せはしかりき、氣附よ、水よ、灸、針もかなはぬとて、泣聲止め難く、嫁君の事は外になしける、心計無くて尋ねしに、聟殿順死といへば、女の身にしては、馴染ある人よりは悲しさ一入勝りて、人の取沙汰を顧みず、勝手口より驅出で、死骸に取附き歎きぬ、これほど果敢き憂目に逢ふ、前世の因果なるべしと我身の上を悔み、再び里へは歸らじ、姿を變へて夫の爲の後世、菩提の道に入るべし、と一筋に思定めて、下げ髮の中ほどを思ひ切りかゝる所を、各取附き、やう〳〵敎訓して、四十九日目に如何にもならせ給へ、召連れられし女房ども皆々

御發心御供仕るべし、とても道心の御願ひ、何か世の思はくを恥させ給ふぞ、お里に歎きかけ給ふは、これ不孝の第一と諫めて、七日のしあげ過ぎて、涙の海を是非なく歸る浪の、是ぞ火宅の車舟牛窓にあがり、一間の奥に取籠り、外なく念佛に暮しぬ、それ日數積りて、親達また緣附の内談ありしに、離れ切つての出家の望、いろ〳〵止めても聞入れざれば、後には異見の品を替へて、汝孝行の志僞りなくば、後夫を求めて此家を立つべし、親の心を背き、身を助かる佛法ありや、と道理に責められ、過まつて思止まり、其後岡山より歷々人の次男を入緣に取り、萬事を渡して親仁は隱居しまひ、世に思ひ殘せる事も無し、此娘入聟に初の夜心底のほどを語りて、親孝行の爲かく夫婦の語らひなすといへども、さりとは心に染まざりき、全く御主樣を嫌ふにあらず、身を觀ずれば夢なるかな、錦の蓑を襲ねても、人間つひの煙は免れ難し、兎角後世の心入つど〳〵に語り、至極の涙に沈めば、入聟之を感じ、心易かれ、其方の望に任せ、二親一生の中は隨分懇にあたり、死去の後我諸共に出家になるべしと、二世掛けて約束固め、表向は夫婦の語らひして、同じ枕はならべながら夢にも契を籠めずして、十一年過きしうちに父は病死、母は殘りて久しく孫子の無き事、佛神を祈り給へど更に其甲斐も無い理ぞかし、是も寄る年の惜からぬほどにして空しくなり給へば、今は願ひ發心と、夫婦一度に髮を下ろし、財寶親類に分けて、所を去つて備中國、細谷川の奥山居して昔の人に逢はず、二人

とも佛道堅固に勤める、皆不思議の沙汰せしに、子細を京より來りて朝暮附添ひし女の語り て、聞く人感涙肝に銘じ、斯る事世に例無し、親の命を背かず、男は持ちながら、つひに最愛の道を斷ちて、今の世の中將姫ぞかし、殊に夫の心中、末代の語句此等なるべし、

俗つれづれ巻之三終

俗つれづれ

巻之三

一　世には不思議の鯰釜

二　悪性あらはす螢の光

氣根くらべの勸進坊
月に二日は父母の命日
男に代る女の農業
又大佛の御建立
長者の萬金貧女の一鏡

鯊釣の印可
爪を放す傳授
竊扱の秘傳
女郎底たゝき
野郎醉狂

三　一滴の酒　一生を誤る

生きて効無き老母の思
杖にも柱にも我子の出家
玉味噌の破千金にかへず
浮藏主が俄浄瑠璃
日の暮が夜明になる

四　醉醒の酒うらみ

女房は幾人か
夫婦の中に指を切れとは
生姜漬山椒にさへ恐がり
今といふ今實の御下戸
上林にあらぬ赤手拭

俗つれ〴〵

●世には不思議の鯰釜

名利の千金は頂を撫づるよりも易く、善根の半錢は爪を放つよりも難し、昔南都の大佛建立の勸進坊諸國を廻りし時、大坂より泉州に及ぶ、木綿買阿部野街道歸るに、住吉の里離より一錢と進めしに、此商人聞入れずして先に立ち行くを、跡を慕ひて氣根競べに跟けゆけば、隨分吝き者なれども、此御坊に我を折つて、天王寺の石鳥居にて、百緡より一文抜きて投出し、是信心の一錢にはあらず、此まで跟けられし勢力を感じぬ、其志にては大願成就すべしと、世智賢き言をいひながら、出茶屋に休みて、色つくりたる女とまばらく浮世の事どもを語りて立歸る時、二十錢餘置いて行けど、此女は嬉しき顏をもせざりき、其大佛久しく燒野に立たせ給ひ、雨露雪霜に御首の朽るも見るに悲しかりしに、今又一人の沙門、建立の願ひ國々に通じ、奉加の志深し、爰に吉野の片里に、天の川の神主何之進とかやの召使下女、若年の時兩親に離れ、賴むべき一門も無く、此旦那を親にして、奉公に私無くて、主人も一入不便かけて、末は我世を渡る緣の事までも聞立てける、此所のならひにて、惣じて男は家にありて、拍囃に

日を暮し、女は山畠に出で、鋤鍬を握り、或は谷水を擔ひ、柴を戴き、牛を曳き、男の業に代れり、此下女毎々人毎に優しく、月に二日は父母の命日とて、野邊に茶釜仕懸け、嵐の落葉を拾ひ、是を燒火の種となして、働く野女の咽喉の渴をたすけしに、皆々これを喜び、一つに集まり田植歌を同音に山も響き渡りて、いづれ餘念はなかりき、此釜に名譽の德あり、朝に仕掛け、夕まで水をさすといふ事もなくて、數百人して飲得むとも見えず、是重寶の一つなり、此事傳へて、里續きの山寺に盜み行きしに、常に變る事なし、法師腹立して瀧津川の淵に投入しに、沈みて跡なくなりぬ、下女はこれを歎くに、年經し大釜これを擔ぎあげて、再度功德茶を涌しける、いにしへ念佛行者の龜鉦、今又鮹釜と里人の言ひならはせける、此女の世に亡親に孝を盡せるをいたはり耕し、畠うつ事も、大勢の里女營み助けしとなり、傳へ聞きし見ぬ唐土の象、天性の恵にも是ぞ劣るまじき萬人の志深し、其後彼女奈良の佛の寄進に、これ兩親の爲とて、朝夕我面影映せし丸鏡を進げて、長者萬金、貧女の一鏡と、其光を奈良に顯はせし、彼大佛御首其外損し給ふを、鑄物師を以て鑄させ給へども、所々に穴あき、成就の形を見せ給はず、勸進の沙門いかゞと案じ給ふに、一夜の夢に、三笠山より鹿一頭來り、彼鏡を角を以て叩く態を幾度もせしと見給ひ、扨は志の深き鏡なるべしと、是を湯にし、鑄給ふに、忽ち滿德圓滿の釋迦の像と拜まれ給ふ、皆人聞傳へて感涙を催しけるとかや、是偏に孝の深きよりな

す所なり、

●惡性あらはす螢の光

都の辰巳宇治の夏川涼しく、螢の火花、夜の眺望は吉野まさりと、晝より催して、馬はあれども徒行の友、木幡の里に待合せ、休む重荷に小附の樽、京の銘酒を揃へし、先は花橘、井堰、重箱、柳、舞鶴、いづれか惡からず、大宮人の御前酒、爰に住めばこそ地下人の口にも合へり、上戸仲間の長者町の各、河原の役者まじりに立騷ぎ行くに、朝日山も夕暮近くなり、虹は映りて棧橋の詰なる通圓茶屋に、まばらく川音を聽きしに、水の水上の清く、棹下し來る笹舟に乘りて、小涙の早き瀨に行きて蠅がしらの鯊釣、玉狹網に落しかけて、是を手づまの利し人は、間もなく數釣りけるに、素人は一尾も懸からぬ事の口惜し、是に傳授ありとて、祇園町清藏と毎に鍛錬あり、鳴原の局女郎に淺野といへる者、爪を放つに細小刀にして二枚に剝ぎ、痛まぬやうに薄く指に殘しける、此程天神にいたるまで此淺野を賴み、痛いめをせぬにて弱き女も爪放つ事が行ると大笑して、人の身の上を搔捜しける、其中に品こそ變れ、勤は同じ野郎の口から、客の噺を聞覺えて無用の惡事と、何れも聞かぬ顏して酒飲みけるに、此若衆我姿の浮出づ

る大盃に受けて、彼是名の酒數重りて我を忘れ、人も聲高になる時、螢暮待兼て飛出づるを、此野郎扇に打留めて、汝も尻賣に爰まで來たか、未だ飛子さうなほどに、律義千萬に人任せになり、素股の足の捩り樣も知るまい、延紙の仕舞所は肌着の上替、褄先を綻ばせ置きて此へ隱し、素い客に不思議がらす、其外痔の養生、糠味噌の行水、我身の秘傳くすね扱の毛の穴までを、問はず語りの懺悔、後には聞く人うるさし、之を思ふに、宵より過ぎたる手樽が物言へり、

一滴の酒一生を誤る

家造らむには夏を旨とすべしといへり、九月の末方には、合羽に氷柱の下る北國も、暑は凌難し、越前の永平寺は世塵を遠ざかりて、蜀魂も早く聞き、會下の詩人も魂を樹頭に飛ばす、未明の垣根に咲ける花卯木、夏ながら雪の夕暮かと思はれ、遠里の蚊遣火煙絶々なるに、筧の音の幽に、此山に住めば自然と持戒なり、唱へざるに松風自から法の聲、竹窓は衆寮立並び、數百人螢を聚め、壁を穿ち、勤學に暇無く、あるが中に智辨といへる僧の老母、國鄉迢々の所を、此歲ばかりの命のうちに、我子の住める山ながら靈地拜みたき願にて、今此處までの旅路の難儀、抑は賤からぬ人なりしが、思はざる仕合ありて一族皆絶え、杖にも柱にも此僧一人

を賴みに、未來佛の御詞に違はじと、自らも賴母しく、此世は見果てぬ夢、葉末の露の消え易きを、松が枝の根張強く腰の脫殼、其年も暮れしに、此僧極めて孝なる事氷に臥せる比儔、夏は蚊に身を與へし、次の秋より煩ひつきて、思ひも寄らぬ老母を跡に殘して、二十三霜夢一場の偈作り、眠るが如く終りけるを山蔭の霧煙となす、行儔は知らぬ身の果、惜からぬ命は長き老母の愁歎大方ならず在せしを、加賀の玄海といへる僧に、くれ〴〵病中に賴み置きけるに、賴母しくも賴まれ、智辨に代りて孝を盡されける志殊勝にこそ、物じて老たるをば父母の思をなせとあるに今の世間を見るに、眞實の親にさへ終日無禮のみに暮すに、奇特千萬の玄海が心底と、人皆感じ入りぬ、朝夕はいふに及ばず、折々の菓物まで心を着けて、麓の里の片庵に自身持運びていたはりけり、其年も暮れて、明れば春立つ嶺の霞、溪の鶯、法華經の安樂行品讀初め給ふ事、開山の記錄に見へたり、正月は衆寮に集る僧も摸相を許されながら、過し夜學の空腹を忘れず、法衣の餅を鼠と爭ひ、歲旦の詩も淵明と負けず、酒事催して梢に殘る餘寒を防ぎ、春山花は遲けれども、偶都の由的順正が席より東山に遊ぶ心地、樽の口に附木曲げて、賣子碗にて汲むなど、肴は無きかといへば、納所坊主に輕薄いひて、玉味噌の片破も千金に替へず、一つ飮出すより例の浮藏主が唱名聲の淨璃瑠も可笑く、それにつけて常は座禪眼の玄海も、好もしく飮懸かるより、獨して拍子取り、方丈へは遠しと、稀なる思出、夜の明くるも

知らず、片端より片附られ、玄海獨殘りて、書院へ衙足して行くと見えしが、敷居を涙枕、月舟和尙の墨跡に得ならぬ物を吐懸け、前後を知らず、宿醉過ぎて三日の暮方に日は西に入るを旭の出ると心得て起上り、我寮に歸れど猶ふらつく頭を惱み、隣なる僧を賴みて老母を見舞はせけるが、常さへ危き三輪組玉の緒の絕々なるに、三日食を斷たれ、固より膝行もならず、早ことぎれ給ひたる、と歸りて語れば玄海驚き、思へば三日訪問はず、年來忽ち不孝になりぬ、大きなる過失これ一杯より起れり、悔みてもとらず、

●醉ざめの酒うらみ

昔唐人の細工に十分盃とて、人の心を積りものにして之を渡しぬ、月も盈れば虧るの道理、萬を見るに、目八分に搆へて一つも違ひなし、中にも酒といふもの、九分に受けても溢れ易し、其上戶相應に六分に飮むべしと、御三寸大明神の御詫宣なり、これで納めた日本一の機嫌、千秋樂には民百姓までも、よいといふ程を知るべし、神代の大蛇も十分を控へ、九つの壺を飮虛けてさへ其身を失ひける、東坡が竹は新酒の驗のために書き、劉伯倫瓶車の後に鋤を持たせて、我何處を定めず飮死せば、馬頭山の麓に埋むべし、土器の細工人の手に懸り、二度酒德利の土にもなるべき願、是等は酒を好みて、強ち心の溺るゝにあらず、花山湖月の風景に遊びて、

詩文を作れる種なり、今又世の人の故も無く酒に長じ、それ〳〵の家業を忘れぬ、古の奈良の都の諸白、所ろがら樽の香を覺えて、兎にも角にも捻上戶、百萬の厨子といふ町に生駒屋の傳六とて、下女に上機織らせ、麻布の細元手を漸々に仕出し、折節は鱶の刺身も食ひ、春日野の千本の櫻も觀に行くほどの心になり、謠も自然に聞習ひ、水屋能の見物に罷りしに、猩々の亂れ是一番、外は此酒の糟禰宜と、吭を鳴して謳めける聲のをかし、其中に面識る人の社人ありて見着けられ、逢ふた所で編笠脫げは、飮次第の杉柄杓、神の物にて饗なされ、歸り三笠山十四五もあるやうに見えて、足元定めかね、我宿は不思議に覺えて門口より噪がしく、何の子細も馴染の女房を、嫌と思ふから今宵を待たずと、去狀書いて投出だし、親里の佐保川へ歸れといふ、女たび〳〵の醉狂に飽果て、渡に舟の心地して尻に帆掛けて出て行く、其後幾人か招びて暇を遣り、此費用に身代薄くなり、冬も袷襲の見苦しかりしに、又緣ありて三輪の里より招込みしに、此女神姿かと疑ふほどに美しく、然も夫大事に懸けて、世の稼に暇無く、五歲あまりに家榮えて、晒布の仲買となり、樂を悅び、此家の寶は、手足の動く女房どもなり、靈國より渡したる三種寶にも換へじと自慢をするも、かゝる妻を持てる男の仕合と、人皆羨しく取沙汰しける、なほ相生の松飾りて春の初の蓬萊、茲の都にし肴、各屠蘇を酌交はし、木辻の正月買の噂、禿無しの十五も里の例にて面白く、意氣地立つる女の事此年まで見ずして、聞

くさへ酒も飲めたるものぞと、俄に勘六氣を移して、人より先に内に戻り、例の四の五の言出し、内儀を遊女の如く、宵の斷を今更、我を憎からぬ心中ならば小指を切れといへば、内儀驚き、夫婦となれる身躰何れか此方のものにあらずや、快く春の初枕、吉い夢に當年の仕合を見給へといへば、勘六顏色變り、扨は此男をふると知れたり、是非切れ、さもなくば親の許へ身揚とやらをせよと、我を立てゝ言募るにぞ、女心に悲しく、さもあらば爪放ちて、それにて堪忍あそばせと、涙に沈みて詫びけれども、なか／＼合點せず、せめて髮を切れと、押附けて髻拂ひければ、女目も眩れ、心も亂れ、惜むに効無くて、命つれなく長らへけるこそ憂たてけれ、男は鼾に前後覺えず、常の夜も明けて、女の變りし形を見て歎○○○○○○○○○○○○○○世間の外聞、親類の手前、そなたの○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○是命あつてはと思ひ切るを、内儀○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○止められ向後飲止まるべきは、是に○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○錫德利、肴鉢、酒に出合ふ程の○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○て、今までは元日より大晦日○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○い間はなかりしにけふ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○姜漬山椒にさへ恐れ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

の髮の延るまでは○○（以上不明）

俗つれづれ　巻之三　終

俗つれづれ

巻之四

一　孝と不孝の中に立つ武士
二　嵯峨の隠家好色庵

世界に廣る名物のまぼ紙
足で直す莨盆
肴には茄子の淺漬
傘は一夜の瓦葺
今は世の人のほめぐさ
不斷小判を手慰
皆人似右衛門
金子千兩かねの草鞋
腰元女を天狗頼母子
遣手の万が耳の根まで

三　御所染の袖
色ふかし

四　これぞ妹背の
姿山

情は懸る御簾の染出し
手土産は鬼の面
雛形にいきうつし
千本念佛に見た女
結ぶの神の寶物
神鳴十兵衞うけたまはり
紅鹿子も好や大振袖
吉野の櫻に見た女
逢笠に鍍金の環
藏王權現も片足あげて

俗つれづれ

●孝と不孝の中に立つ武士

清貧は恒に樂み、濁富は恒に愁ふ、と光明皇后の御殿の屏風に書置かせ給ひしとや、いづれ世の人心ほど種々なるものはなし、駿河の富士さへ煙は雲に變り、雪となり、風となり、雨の時は眺絶えて、折節五月闇、道中姿の合羽も物侘しく、袖の湊の故郷思ふ筑前の侍東武の勤務に下られしが、日數定つての旅急ぎ、安部川の夜渡、瀨に變り行く石道の難儀、やう〳〵宿に差懸り、供廻にも言葉をかけ、聞いたか今の蜀魂、昔おもふ草の庵に灯火見ゆる所にて、消えたる挑灯を點せと、小家がちなる戸ざし氣を着けて行くに、西側の人家に聲高なる所あり、火を一と所望すれど、なか〳〵聞入れずして、親子爭論うるさし、母の聲言分と聞こえて疊を叩きたて、今此樣に錢銀持つて、人も大勢つかふは誰が蔭と思ふぞ、御方のわせてから汝が志が變つて、朝茶さへ飲ませぬ不自由を見せける、これ御方、人には應報のあるものぞ、嫁の古いのが此樣婆になるものじや、千年も顏に皺のよらぬものでは無いぞの、今朝も眼が疎いと思ふて、何處の國にかあらうぞ、蔓盆足で踏出して呑めとは、餘り酷い仕方なれども、あゝ今日

も知れぬ老年のとじやと、思ひ流して堪忍したとよい、是此左の手にて差出したといふ、扨はありさまの手は、紫の革踏皮はいて、緋縅縅の脚布めしてゐるか、これは好い手が見ゆるわいの、この婆が眼が見えぬと想やるか、針のみゝずなりとも通して見せむ、尻も結ばぬ糸を謂やるな、其は後へ扱事といへば、息子は暴けなき聲して、先づあり樣の無用なる長命、娑婆塞に一も益の無い事なり、其呼吸の通ふ首縊つて死れたが、浮世の隙があくといふ、見を聞棄てゝ行くに、其並に是ぞ雨夜の物語、品々言葉の花を咲かし、酒汲交はす樂、然も廢屋にて內も見え透きけるをいさめ、雨も溜らぬ板廂、漏桶も限あれば、亭主は菅笠被ぎ、破れし傘を彼親仁にさしかけ、其が女房は鍋蓋被ぎ、雨を凌ぎ、鉄徳利に仂酒、肴に茄子の淺漬、燒味噌ならで無くて、孝行の志を酌交はしける、此親是を滿足して、世にある人の玉の臺も、我竹簀も樂更に變るとなし、汝は子なれば恩を知る道理もあり、妻はもと他人なるに、連添ふよしみとて我に孝を盡し、家貧しき渡世を搆はず年月の經營、さりとは何の世に此恩をおくるべき、夫婦手業の紙子の揉賃、骨を僅少の事に砕く、せめては其手を扶けんと思ふに、足起たざれば是非なしと、涙泄る雨を爭ふ、筑前の侍此あらましを立聞して、同じ所の人心、最前の不孝者と是格別の違あるを感じ、挑灯の火を借りて、主人は乘掛より下りて其宿に入つて、我久しく涙人せしうちに、世

を渡る種とて種々工夫仕出して、式の如く紙細工を得たり、就中紙絹に絞を附くる事、さのみ力をも入れずして、物の見事なる縮緬になす秘密、矢の竹に巻掛る仕出し、懇に傳へて通られける、是はとはじめて色品變つて見せけるに、此所の名物となつて諸國に廣まり、次第に分限となり、財寶不足なく、一人の親を心の隨意にもてなし、彼女房も昔の木綿京小袖に着替て、あまたの婢、腰元、其身は乘物の窓より、世間の移變れるを眺め、活計の種は盡きず、人のほめ草となりぬ、

●嵯峨の隱家好色庵

序

紅粉は白皮を彩る花、男女に限らず、身の嗜深きを人の風俗鑑といへり、昔日倭國は諸人の衣裳も定りなく、神代の末を摸しけるに、應神天皇十四年に衣服の裁縫始り、其後推古天皇十九年に男紋、女の形など、染色を好ませられ、又元正天皇養老三年に萬別あり、少年の時は脇明の袖下長く、男子は十七の春定つて丸袖になし、女子は緣に附くも附ざるも、十九の秋塞ぐこと、律義千萬なる代もあつて過ぎける、今時の芝居子三十六七までも大振袖は、是渡世の種ぞかし、又緣遠き娘、幾春か櫻に姿を曝し、近所の人に憎まれもせぬ身なれども、下方は確に見

て招ぶならひなれば、仲人も頼まれず、月下氷人も祈るに甲斐はなかりき、二人の親の迷惑なれば、形は生まずとも、釆態を當世女に育つべし、作れば作りなせる例もあり、一は其地其水に因れり、爰に嵯峨の山、歴々の隠家、都は人の附合もむづかしく、親仁のゆづりの小判を友とし、樂を此山陰に窮めて、菊酒は加賀屋よりの通樽、海肴は錦の棚に人機を掛け、勢田鰻、近江鮒、茶壺は宇治にて詰させ、梅尾に預け、菓子は二口屋より門前に出店、水物は留山の梢、四季折々の枝批、八木は近き里より鳥の羽よりにして運び、薪は鳥羽より車を轟かし、小野の焼炭山を累ね、寒いも暑いも知らず明し暮し、雨の日は河原の太夫元隊なる野郎召連れ、御見舞申しも果てぬに、色里の末社は島原毎日の珍説を書附にして、遣手の萬が耳の根を蟻の這ふまでを言上申し、世間沙汰は出入の醫師申來り、精進日には諸山の出家衆駕籠所狭く、片里の住居ながら萬の事自由にするは、世に銀使ふて遊ぶより外に面白き事なし、毎夜手替の美形を撰り寄せ、遊興をするに事を缺きぬ、此人似右衛門といひ、ある名はいはざりき、松に聲なきほど春も雪降りて、午後より一入寂寞まさり、愛宕の天狗頼母子とて、あまたの御機嫌取の男ども立騒ぎ、御手前に抱置かれし素人女に、銘々の仕合次第に取當りし、何れか物に馴れたる人の見極め、金銀に釣替へしものなれば、あだに見ゆるは一人もなかりき、是ぞまた稀物とて、思ひ所のなき女もなし、兎角は美女ありて無きものぞと呟くを聞かれ、我年久き願、筋目を正

し、時に埋れし人には限らず、美なる娘あらば其を乞受け、我一生の妻と定め、望は此通と、姿の手本出され、是に生寫しなるを尋ね出したる人には其褒美として金子千兩、汝等廣き世界・なれば捜出せとあれば、我先と請合ひ、既に尋廻る國分せし、まづ五畿内は某が目に及ぶまで穿鑿すべし、東海道十五ヶ國は針立の休齋之を尋ぬべし、東山道八ヶ國は浪人の尉右衛門に頼むなり、扨又北陸道七ヶ國を伽羅屋の林吉承り、山陰道八ヶ國を按摩の文助に仰せられ、山陽道八ヶ國人置の又藏、南海道六ヶ國は丹波口の傳兵衛、西海道九ヶ國を卸の仁左衛門、日頃忝なき御意には泄れじと、何れも路銀を内證手代の德右衛門より請取て、此度の御望我手筋より調へさせ給はれと、おもひ〳〵に諸願をかけ、北野殿を祈るもあり、又は貴船に頼を懸け、或は七野社に砂車、我等が爲と跣參詣、種々の願書を籠置き、京都を同じ日旅立ち、此秋名月橋のもとへ一度に立歸る約束して、諸國を當所もなく美人見に廻すと、世にはまた變りたる物好、千人の女千人の男の目に入ればこそ、一人も餘らずそれ〳〵の語らひをなしぬ、今又萬人の眼に好と定むる女の、鐵の草鞋はきて尋ねたればとて、何處の國にあらうぞと、是を首途の言葉にして、各慾の道を急ぎける、

今宵は月も更に都めきて、雲吹拂ふ嵐山の景色、我宿の思出、心は京になして目の置所は爰ぞと酒も半ばに、二千里の外より長旅の銘々一度に立歸りて、是ぞ美人見の品物語聞くに戀深し、

何れも諸國見極めたる姿繪をさしあげいる、御機嫌日本一の女もありぬべしと披かせ給ふ、先づ我等が見立てたる五畿内五ヶ國の寫繪を見すべし、是大事の吟味なれば、微塵も用捨なしに、其天成の當流の風儀を定むべし、今時は衣裝の飾好く、ことさら好く着こなして、あらけなき顔をも色作りて、笠の下など見ては必ずかつぐものなり、なほまた御所被、人の采躰隱して知れ難し、被襠の居姿是はと思へど、立たせて格別の相違あり、兎角は道あるかせて其身振を撿め、顔は日に向はせて陰より見透し、ふき鬢の沈み樣にして地髪の少きは知れるものぞかし、口の開過ぎたる女必ず言語宜しからず、足首しまりて裏空きて指先反ぬは惡女なり、美女は手の指自ら外へ反りて、胴間常の女に勝れて長く、備つて腰据りて押立曲まず、上の女は少し俯向くものなり、中の女仰向くもの、下の女道急ぐものなり、さりとは心に稱ひたる女は無いに極まりぬ、さはいへ汝等が世界を搜し、其一國一人の艶女殘らず見るべしと、山城よりはじめて女の姿繪を一人々々詮義するに、其身の難にはならざる思ひ所あり、皆堪忍のなる事ながら、僅の障もゆるし給はず、目前の鏡に懸けて、此内何れか御氣に入るべく、此形を借れて外なし、是今の世の女の手本なり、

●御所染の袖色ふかし

山城の國都の北なる千本念佛に、女は物見高くて出でける、毎年の狂言何が一つ變つた事なし。下向の手土産に鬼の面に杖添えて賣るなど、角はありても珍しからず、目にとまるものには今時の仕出女房、諸山の花もよしなき京に咲きて、美女に春を奪はれ、無口惜かるべし、今日もまた後生大事に眺めしに、母親と見えし人は墨衣着て前に立ち、娘盛を恐らくはと想はるゝ顔色、いづれ遠目に美くし、近くになるほど〳〵素顔にして微塵も繕なし、未だ十四なるべし、自然と玉を延べたる天成、これ結ぶの神の御寶物にもなるべき女なり、衣裝ゆたかに、下には藤色に碁盤の紅縞つけ、中には瑠璃紺に同し紅縞の裏つけ、上に薄玉子色に同し紅縞の裏つけ、肩より一尺ほど青々と御簾の摸様、唐織の縁、紅の房を下げ、さりとは〳〵臻りたる物好、裾は亂萩、眞の男鹿もこれには焦れ鳴くべき、帶は黒き天鵞絨に大紋の石甃、後に廻して御所結の端に、銀にて鶴菱の四紋、返褄、衽先を少し揚げて帶の下に挟み、抱帶なしに細き忍帶を締め、素き合湯具の裾に鉛の鎭を掛け、惣淺黄金剛を踏きて擦足に歩み、志めつけ島田髪、前も後も長み同じことにして、中ほどに平鬢を懸け、挿櫛白檀の木地に珊瑚樹の切入、梅の古木に氣を盡し、前髪に鯨の鰭の曲りたる物を入れ、髪の狂はぬやうに仕懸け、わづか俯向き、首筋あり〳〵と見せて、突肱に左の手先にて袖口を揚げ、右の肩より袖亘まとやかに流し、是々又何處の國にかあるべきと思ひながら、戀に慾ありて尋ねける、世は廣し、もしあるともや、

●是ぞ妹背の姿山

大和の國吉野の花は本朝の姿の山、妹背の川の中に落る神鳴十兵衞といへる大皷持、やかましきを道の友として、櫻や盛を見る人を見に罷りしに、名所の里ながら、さりとては女の悪き所ぞかし、まんざら山家育の形の小野、葛の根の土氣離れず、釣瓶鮓の横平たく、何れを見ても是ぞ勝れての花、月も雪も此處の事を、亦も世に無く歌人の咏遺されしが、女の事は其とは格別違ひたる風俗、藏王權現も片足揚げて在すは、美女なき里を住憂く、好き所を見立てゝ飛給はむ御氣色に拜まれさせ給ふ、千本咲けばとて山の梢も面白からず、麓に下れば、宇多の城下より花見乘物、つき〳〵の女もぬからぬ取廻し、屋敷方とは見透きぬ、綟張の窓より仄に面影、これ床しく、出茶屋に腰懸けて暫く眺めやるに、物靜に身捌して、歩行路も御慰と乳母がいふ聲嬉し、四十四五なる奥の、昔を今の兵庫髷可笑げに、淺黄に鬱金裏の下着、上に飛紋の緋紗綾に白裏附けて、繻珍の通し襟を掛け、稻妻織の金入の帶、紫の革踏皮に萠黄の紐を付け、塗笠に鍍金の環をうたせ、項なしに赤い締緒、萬嫌なる采躰、後に立てたる新駕籠も、彼人の娘ならば見るまでもなしと立ち行くに、ばら緒の藁草履直すを洒落たるやうに思はれ、戸を開くるを待兼しに、それ見たり、年のほど十四か五にもせよ、いまだ若木の莟、櫻色とは是ぞ、此

丸額の當世顔、鼻筋次第に高く、眼ざし細きもよくや、耳小さからず長みあつて、首筋立伸び、落し懸の大島田、忍髻の上に中疊平結、先は一文字にして、庵形の挿櫛に切金の折菊、伽羅の角樒枝に青貝の折菊、水鹿子の下着、中紫鹿子、上には紅鹿子の兩面、二尺三寸の袖下、帶は樺繻子に小鳥盡を繊縫に散らし、白糸の網を掛けて、吉彌仕出しの後結、括目の角に鎭を掛けて、白綸子の二重湯具、紅裏の絹踏皮に河原の野郎紐を付け、水口の八兵衛ざしの木地のつゞら笠に、鼠地小摸様なる菊の金入を裏打たせ、千筋紙縷の紙紐を付けて、後なる下女に持たせ、姿自慢の蹴出し歩行、是よしや吉野の里人、男女に限らず立出で、數年の花見に諸國人をあまた見し中にも、是惣一古今の稀物、此所に都のありし昔も、かゝる女は傳へ聞かずといふこそ道理なれ、今の京の者の目にも、是はと熟々見とめけるに、いづれに一つの思所なく、如何なる御方と、お里を下々に尋ねよりしに、御鼻の穴其格好より少し大きに見えける、吟味の上からは是も堪忍なり難しといへり、

俗つれづれ　卷之四　終

俗つれづれ

卷之五

一　金の土用干
　伽羅の口乞
二　佛の爲の常燈
　遊女の爲の髪の油
　内藏に名譽の聲
　國光は正銘
　天神の前の酒中花
　口惜や猫の糞
　定めて百目大名
　新町の女郎千三百
　踊は裸の金箔
　三浦に御高尾
　淺草久慶が物語
　燄魔鳥の見世物

三　卅七番目の分限
第一番の貧者

よう知つて京の袖鑑
兄弟三人忍役者
それ〴〵の道は道
意見も聞く時ありけり
女郎買の身哀なるかな

俗つれ〴〵

●金の土用干、伽羅の口乞

和朝に遊女の色作つて金銀に賣る身と定めての以來、此美與に銀つかひ頭の大臣、今の都にあり、其所は上長者町に住馴れ、御所に近ければ宜しき事ばかりを見及び、姿は武士めきて心は心家に移しぬ、是渡世を念ふ人のなるべき事にはあらず、祖父より三代商賣は仕舞屋にして、二十人餘の男女心に任せて年中を暮しぬ、此親父死去の時門跡樣へ百貫目進げての外は、釜下の灰までも讓狀一つに濟みて、誰か七つの内藏に指のさしてもなかりき、此銀何程といふ其算知つたものなし、腰元役の若葉といへる女、親御樣の時見及びしを語りけるは、毎年六月中は小判の土用干を遊ばしけるに、新左衞門の澁紙一枚に百兩宛針金括にして、未だ人の手に渡らざるを、空所もなう並べ置き、鳥籌にて埃を拂ひ、箱に納めて封を付け、一日に此程宛、幾限もなく風にあてられて、此家久しき小判ども夜々唸くと大方ならず、偶諸人の欲がるものに出世して、ついに揚屋の手にも渡らず、まして野郎宿の花にもならず、一生男を持たずに朽果つる娘の如く、是は口惜やと聲を立つる事、我等寐耳に入つて、かくと旦那殿に申上ぐれ

ば、其は大膽なる小判めやと、箱を釘付遊ばして、其後は土用干にも出でず、何時が大節季の拂やら、大名貸になる事も知らず、年久しく埋もれしが、若代の物となり、此金子時に會ふて、島原太夫職そも〳〵の野秋に懸かり、名殘惜さは朱雀の細道と唱ふたる戀草の朝露踏みて、直に芝居に行きて玉村吉彌に壺入、夕暮よりは又丹波口に押懸け、小時も我宿を見ず、夢覺めて夢に又現の如く、五歳餘の大騒ぎ、年々唸きし小判箱、明暮の附屆に何時ともなう殘餘少く、今三千兩になる時やう〳〵我と合點して、さてもつかへば金銀ほど捗の行くものはなし、十五年以來に二万八千兩、銀に直して千六百八十貫目なり、此銀外の事には、いかな〳〵一匁もつかはず、是皆色道に捨てける、さるに因つて日本類無しの悪所銀つかひ頭、と名譽の名を取りける、之をおもふに、一日に千貫目にても遣ひ果して、知れぬ所は京の色町ぞかし、遠國にては銀はありても遣ふべきようなし、長者町の大臣殘る三千兩思ひ切つて止り所、此程の時もやめかね、其後太夫の薫に戀を仕替へ、家屋敷、相傳の諸道具までも賣拂ひ、何の子細もなく、着のまゝになつても仍とまりかね、男は自然の時の魂なるに、唯一腰の國光まで賣り通ひ、扇一本にて止まりける、女郎狂の紀念とて殘る物には、文反古、一座の酒振、投節の間の手、仕懸の嘘を見出すばかり、此外何も無し、身骸一つも暮しかね、種々分別をするに、さながら京にて茶筅賣もならず、人顏の見えぬ時、夜船に乗りて大坂に下り、世にある時拵へ置きし長

堀の下屋敷を預けし、炭屋善太郎といへる者頼にして下れば、是も熊野の新山に懸かり、身代崩れて分散となり、門口に負せ主より嚴しく番を附置く折節なれば、此に音信もせず、此首尾悲しく、それより天滿天神の鳥居筋に花屋の李兵衛住みぬ、此が女房は御夢想の餡燒して面々活計、今日を暮せしが、此女は京にて茶の間に使ひし其誼に、爰にやう〳〵歎をいひて頼をかけ、同じ横町に造花の店を出し、春咲く藤、山吹を秋造り、時節相違の紙子を六月に着るも可笑く、輕い世帶を柳に行つて、櫻を或時酒中花に仕懸け、是にて小錢を取る様になるも、元一つなる口より思ひつきぬ、其頃當社に萬燈のありし時、北濱の淀屋橋の法師、あまた末社を連れて通りかけに見着けられ、扨もありしに變る身の上、奢よりかく成果つる例なれば、さらりと昔の氣を變へて、折節は私宅へも御出とあれば、是忝なし、御家來同前に頼み奉ると、以前は下目に見し人に、樣の字を百も附けて、其後は此法師太皷持仲間に入りて、お次に詰めて提重盆掃除するなど、少し口惜かりしに、小坊主がいへるは、飛石の上なる猫の糞を掻けとは、最早堪忍なり難く、食はずに死だがましと、暇乞なしに坐を起たむとする時、夕御膳とて、まづ銘々杉燒、小鳥盡の田樂、初鮭に諸味をかけて出る、斯る調菜今の身にして食ふ事は思寄らずと、又時の氣になつて、町人ながら大名ぞと、豊な暮羨しき時、彼法師の仰せられしは、今宵の騒ぎは、彼者を大名の御隱居に仕立て、九軒の帥ども手とらして一興とありしに、此男

申すは、色所にて大名になる事萬につけて難し、此成賃に御秘藏の伽羅を一夕御意に懸けられましたらばと申す慾なり、此家に本初音とて百双の名の木なり、一夕餘取らせば巾着に納め、衣裳着して罷出でたるは、百目大名と笑ひける、揚屋町をさゝめきて、住吉屋の甚太が廣坐敷に居流れ、法師宿の噂に囁き、彼はさる御方御忍びの御遊山、常の客とは格別なり、物事閑雅に、何れとも定めず太夫四五人抓めと、出羽、高橋、小太夫交りに、酒も大方なる時まで、百目大名も古今の物識れば、隨分大柄を捌きかねず、頭から高橋に肩を拈らせ、出羽が膝枕して、昔の心になる時、又法師勝手に立ち、彼方の御家に名譽の伽羅あり、是を所望すべし、次手ながら少し聞きたいとあれば、内儀遠慮なく、其通申上ぐれば、よく知つたことの、何より易い事、法師燒いて聞かされよと、件の巾着投出す、時に小太夫が香爐に火加減して、彼一夕の伽羅割りもせず其儘燒けば、座中靜めて聞競べしは、又否のならぬ華車事なり、百目の大名齒をくひしめ、まばらく四邊を見廻し、大方火の透りかゝる時、法師樣こりやならぬと、彼伽羅摑むで巾着に入れ、女郎の手前も恥づる事なく、大名罷めると置頭巾をとれば、一座笑仕舞に床に入りける、此男昔は一燒に百目も惜まぬ大臣の、斯く怯る事は其時代と、誹をやめて不便がりて、お床のあがるまで淋くば之を讀まゐやれと、太夫の名寄たゝきの本を禿が貸しける、是にも悪氣廻して、もし又最前の伽羅すこし下さりませいと言懸られては、返事がむづかしい

と置所を變へて、褌の結目に包みこみ、前後を紙縷にて括置き、幾度も探りて見しは、飯炊女の隱男にもらひし細銀を〇〇色もの心當にするに似たり、人は其時に移りて、かく淺ましく成果坊主、

●佛の爲の常燈、遊女の爲の髪の油

遠國にも色さわぎのありとはいつぐ、氏神の祟を念ふて、變りたる事は成難し、人を恐れず我儘をしけるは、三ケ津の町人の德なり、大坂にある大臣、世間をつら〳〵思ふに、この四町の女郎高下合せて千三百餘人、毎日の髪油銘々買にする事も不便なれば、一人一日を一分につもりて、一年中に四十六貫八百目にて濟む事なれば、阿波座に家を一軒求めて、唐銅の油壺を据ゑて、永代髪の油寄進すべし、此は後生にもなつて、又の世に傾城の好く男にも生るべし、諸山の靈地に常燈は、大名のともし手は珍しからず、抑此思立、祖母よりの讓銀五百貫目あれば、此をたしかなる大盡に月一割にして預け、其利銀にてなる事といふ、其座に慾の孫吉といふ末社、同じ事ならば、女郎の身揚ほど悲さうなるものはなし、是に御力合あらば深き善根になるべしと勸めける、此談合未だ極まらぬうちに、好事聞捨にして京へ上れば、島原の踊に袋忠、彌七、雨人丸裸になつて惣身を金箔にだみて、其まゝ黃金の踊佛、浮世を夢のやうに想ふあ

の心が極樂と、此身も色道の宿も定めず、一遍上人に藤澤を越えて江戸に下りしに、吉原は淋しく見えて内證の繁昌、兎角金澤山の所ゆゑなり、さるによつて女郎の志自ら強くなりぬと、宮烏といふ書物に見えしに違はず、遊女は好男次第にて、其時々々の色を增すものなり、紅葉は千人の目にも太夫と見えしは、中頃の高尾にぞありける、風儀いふまでもなし、宿に歸りても衣裳着替ゆる事なく、常なり、如何にしても上方の太夫のならぬ事なり、揚屋の晝を勤めて身仕舞に歸るに、道中綽に、右左の對の禿歩みながら眠れるほど、靜に位を取つて憎い所なく、宿近くなれば六尺先へ走り、門口より高尾樣御歸といへば、行水の役人は絹漉の湯を運ぶ、料理人手ばしかく、煮方の者は火吹竹を取廻し、定紋の蓋かけたる膳立、不斷の醫者持脈を取り、此太夫御祈念の日待坊も毎日御見舞申し、御勤二十年もと心中に祈りける、譬ひ女郎となりても、これは一生の譽なれば、此人の耳の垢を此道の女守袋に入置くべし、殊に高尾は流女、古今の能書、文にして人を殺し、諸人思を懸けぬれば、いかなる名大高家へも行きて玉殿にも住むべきことのなれ、なれどもえんほど可笑きはなし、油三といへる男に請出されて今は靈岸島に侘住居ながら、是より思出何かあるべき、いづれ女郎狂の始末必ず無用なり、其銀とて殘るものにはあらず、何ぞ世にとゞまる事を、色町に殘したきものぞかし、淺草の久慶が笑はせけるは、むかひ町の大臣、十九年以來に一萬二千兩ある金を、後家の米の金を拂ふ樣

に、人知れず一度々々に揚屋へ渡しけるが、誰に逢ふとも又は女郎買とも見えずして、世上へ秘すを大事々々と思ふ內に遣果し、今は堺町にて見世物の焰魔鳥の木戸番、萬九といふ大臣これじや〳〵、

●四十七番目の分限、又一番の貧者

現銀三千七百貫目持つて大きな顏をしやるな、都の身代袖鑑を見るに、やう〳〵四十七番目に書けり、然れば京の分限は、遠國の手前善とは格別ぞかし、家に傳へし諸道具ばかりも大分なり、此金銀を讓られては、一生榮花に五十人口など坐食にしても餘るべき事なるに、悪所づかひは限の無きものにて、兄弟三人して撒捨てけるほどに、親仁相果られて未だ十五六年のうちに、家庫までも賣拂ひ、三人一所に借家住居して哀しき身とはなりぬ、世は知れぬものぞ、昔は三條通に大名貸をして、今は米屋に當坐借して、一日暮しに唯居ては埒が明かねば、秋を見懸けて美濃路より尾張の里々を廻り、京へ初りと聲立て、見物集れば、先づ御斷を申しますは、唯今仕ますは、都島原時花太夫全盛の形態、買手の大臣取上げられまして散々の仕合となり、舌食切りて死れは致しませず、面皮を晒して勸進仕りまする風俗までを、細に心を着けていたしまする、今ほどは京坂に坂田藤十

郎と申しまして、やつし藝の名人あれども、其は移らぬ處もござります、我等のいたしますは其儘生の樣して御目に懸けますと、身の上の事を狂言に、兄は大臣になれば、弟は太夫の薫になり、中息子は末社の石崎左吉になり、世にある時の座配、口舌の詰開、女郎の僞の撿めやう、無心言ひそうな色を見て手を好く外し樣、今の樣に賢ければ何か歎く事なし、親の異見を聽かず、内を逐出さるゝ身振、見る人も爰がよう似たと大笑いたしける、其後は勘當せられ、悲しき渡世の思入、見物に泪こぼさせ、扨編笠を脫ぎて、此里のお衆は各別、通りお衆樣方持合がござらば、少しの露を打たゝやりましよ、祖父の年忌に中りまして、汗水を流しますでもござりませぬ、一人に千貫目宛入りました藝でござると、人は知らぬとをいひける、此見物の中に、京万太夫が芝居より江戸へ役者見立に遣はしけるに、少し仕こなして上方でも當りさうなる者は、手附二百兩などいひけるが、是もよいには極まり難し、先づ上りての一談合と、道中を急ぎしが、自分の用にて美濃路に廻り、此辻藝に我を折つて、さてもまたり〳〵、濡をあれほどに帥の好く樣にするもの、廣き江戸にもなし、此三人は六百が立役は古金買に見せてもあり、今まで見知らぬ素人藝に斯る上手もあるものかな、是を抱えて此度の顔見世、都に花を降らせむと一筋に思入り、子細を聞けば、四條の川原に我々顔陋す事一門の恥といひ、思ひ寄らずと同心せぬを、差當つて小判ずくめにして、やう〳〵京に連上り、先づ男振は好し、太夫元

も外へは沙汰なしに珍重がると淺からず、扨潜に狂言に懸けて見しに、三人ながら傾城買の事より外は、物申しといふ事もならず、さりとては可笑、銀つかふて遊女の道ばかり飲込みけるやと大笑して、急ぎ暇を出せば、損のゆかぬ涙人して、後は三人肩揃へて伏見の色町へ京より御とはなりぬ、一切の身過、其道々々に身を助かるなれば、親より讓の家業を勵み、主の蔭なる賣買を油斷なく、其家たしかに繁昌させて、世間を息子に渡し、浮世隙になつて、六十過ぎて年月の氣晴に女郎狂するものなりと、さる法師の語り置かれし、必ず色道に仕過多し、無分別盛の時行くべき所にあらず、此より恐い所なし、

俗つれ〴〵巻之五 終

松の風靜かに、初曙の若ゑびす〳〵、諸商人買ての幸、賣ての仕合、扨帳閉店おろし、納銀の藏ひらき、春の始めの天秤、大黒の打出の小槌、何なりともほしき物、それ〳〵の智惠袋より取出す事ぞ、元日より胸算用油斷なく、一日千金の大晦日を知るべし

元祿五申歲初春

難波
西鶴

胸算用（元禄十二年板）

大晦日は一日千金

巻之一

一　問屋の寛濶女

流行小袖は千種百品染
大晦日の振手形如件

二　長刀は昔の鞘

浪人細工の鯛つり
大晦日の小質屋は泪

三　伊勢海老は春の柂

狀の書賃一通一銭

淡島氏所藏

大晦日に隠居の才覺
四　藝鼠の文使ひ
据風呂の中の長物語
大晦日に煤除の宿

胸算用

●問屋の寛濶女

世の定とて大晦日は闇なる事、天の岩戸の神代以來知れたる事なるに、人皆常に渡世を油斷して、毎年一つの胸算用違ひ、節季を仕舞ひ兼ね迷惑するは、面々覺悟悪き故なり、一日千金に替へ難し、錢銀なくては越されざる冬と春との峠、是借錢の山高うして登り兼ねたる絆、それぞれに子といふ物に身代相應の費、差當つて眼には見えねど、年中に積りて掃溜の中へ廢り行、破魔弓手鞠の糸屑、此外雛の摺鉢破れて菖蒲刀の箔の色變り、踊太皷を打破り、八朔の雀は珠數玉に繋ぎ捨てられ、中の亥猪を祝ふ餅の米、氏神の御拂圍子、弟子朔日厄拂の包錢、夢違ひの御札を買ふなど、寶舟にも車にも積餘るほどの物入、殊に近年は何方も女房家ぬし奢りて、衣類に事もかゝぬ身の、其時の浮世摸樣の正月小袖をたゝみ、羽二重半疋四十五匁の地絹より は、千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一兩づゝ出して、是さのみ人の目立たぬ事に、あたら金銀を捨てける、帶とても昔渡の本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、天窓にいたゞき、湯具も本紅

の二枚がさね、白ぬめの足袋はくなど、昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐ろしき事ぞかし、せめて金銀我物に持ちあまりて爲ればなり、降つても照つても晝夜油斷のならざる利を出す、銀借る人の身代にて、かゝる女の寛濶能々分別しては、我と我心の恥かしき義なり、明日分散にあふても、女の諸道具はのがるゝによつて、打つぶして又取附き、世帶の物種にするかと思はれける、惣じて女は鼻のさきにして身代たゝまる、宵まで二つ挑灯、月夜に無用の外聞、闇に錦の上着、湯沸かして水へ入れたる如く、何の役にも立たざる身の程、死なれたる親仁、持佛堂の隅から見て、浮世の雲を隔てければ、悔みても異見はなり難し、今の商賣の仕かけ、世の爲の問屋なり、十貫目が物を買ふて八貫目に賣て、銀まはしする才覺、つまる所は内證の弱り、來年の暮には此門の戸に、賣家、十八間口、内に藏三ヶ所、戸建具其まゝ、疊上中二百四十疊、外に江戸船一艘、五人乘の御座船、通ひ舟附けて賣り申候、來る正月十九日に、此町の會所にて札をひらくと沙汰せられ、皆人の物になれば、佛の目には見え透きて悲く、定めて佛具も人手に渡るべし、中にも唐かねの三具足、代々持傳へて惜ければ、行先の七月魂祭の送火の時、蓮の葉に包みて極樂へ取て歸るべし、迚も此家來年ばかり、汝が心根もそれ故丹波に大分田地を買置き、引込所拵へけるは中々無分別なり、我賢ければ、我に銀貸す程の人も亦利發にて、一つ〳〵吟味仕出し、皆人の物になる事なり、よ

しなき惡事を巧まんよりは、何とぞ今一たび商賣仕返せ、死でも子は可愛いさのまゝに、枕神に立て此事を知らすぞと、見し姿あり〳〵との夢は覺めて、明くれば十二月二十九日の朝、寢所よりも大笑して、さても〳〵今日と明日とのいそがしき中に、死だ親仁の慾の夢見、あの三具足お寺へあげよ、後の世までも欲が止まぬ事ぞと、何とか埒を明くる事ぞと思ひしに、近年銀なしの商人ども、手前に金銀ある時は、利なしに兩替屋へ預置き、大拂ひの時、米屋も、呉服屋も、肴屋も、味噌屋紙屋も、觀音講の出前も、揚屋の銀も乞ひにくるほどの者に、其兩替屋で請取れと、振手形一枚づゝ渡して、萬仕廻ふたと て年籠の住吉參、胸には波の立たぬ間もなし、こんな人の初穗は、うけたまふてから氣遣したまふべし、されば其振手形は、二十五貫に八十貫あまりの手形持ちかくるほどに、兩替には算用差引して、後に渡さう振手形大分ありと、さま〴〵詮議するうちに、又掛乞も其手形を先へ渡し、又先からさきへ渡し、後にはどさくさと入亂れ、埒の明かぬ振手形を、銀の替りに握りて年を取りける、一夜明くれば豐なる春とぞなりける、

●長刀ハむかしの鞘

元朝に日蝕六十九年以前にありて、又元祿五年壬申ほどに此曙めづらし、曆は持統天皇四年

に、儀鳳暦より改りて日月の蝕を暦の證據に、世の人是を疑ふ事なし、口より見盡して末一段の大晦日になりて、淨瑠璃小唄の聲も出ず、今一日の暮しせはしく、殊更小家勝なる所は、喧嘩と、洗濯と、壁下地つゝくると、何もかも一時に取まぜて、春の用意とていかな事、餅一つ、小鰯一匹もなし、世にある人と見くらべて、淺間しくあはれなり、此合貸家六七軒、何として年をとる事ぞと思ひしに、皆質種の心當あれば、少しも世を愁く風情なし、常住身の取置屋賃、其晦日切りにすます、其外に萬の世帶道具、或は米、味噌、薪、酢、醬油、鹽、油までも貸す人なければ、萬事當塵買にして朝夕を送れば、節季〳〵に帳下げて、案内なしに内へ入るもの一人もなく、誰に恐れて詫言をする方もなく、樂は貧賤にありと、古人の辭反古にならず、書出し請けて濟まさぬは、世にまぎれて住みける、晝盜人に同じ、是を思ふに、人皆年中の高ぐくりばかりして、毎月の胸算用せぬによつて、つばめの合はぬ事ぞかし、其日過ぎの身は知れたる世帶なれば、小使帳一つ附けるまでもない事なり、さる程に大晦日の暮方まで不斷の躰にて、正月の事ども何として埒明くるぞと思ひしに、それ〳〵に質を置きける覺悟有りて、身仕廻することこそ哀れなれ、一軒からは古き傘一本に、綿繰一つ、茶釜一つ、彼是三色にて銀一匁借りて事濟ましける、又其隣には曝が不斷帶觀世紙捻に仕替へて、一筋男の木綿頭巾一つ、蓋なしの小重箱一組、七半の筵一挺、五合升一合升二つ、湊燒の石皿五枚、釣御前に佛の道具添

へて、取集めて二十三色にて、一匁六分借りて年を取りける、其東隣には舞々住みけるが、元日より大黒舞に商賣替へければ、五文の面張貫の槌一つにて、正月中は口過すれば、此烏帽子直垂大口はいらぬ物とて、二匁七分の質に置きて、ゆるりと年を越しける、其隣は難しき紙子浪人、武具馬具年久しく賣喰にして、小刀細工に馬の尾にて仕懸けたる鯛釣も流行やめば、今といふと小尻つまりて、一夜を越すべき才覺なく、似せ梨地の長刀の鞘を一つ、質屋へ持たして遣しけるに、こんな物が何の役に立つべしと、手に少時も持たず投戻しければ、浪人の女房其まゝ色氣を變へ、人の大事の道具を何とて投げて損ひけるぞ、質にいやならいやで濟む事なり、其上何の役に立たぬとは爰が聞所じや、それは我等が親石田治部少輔、亂にならびなき功あそばしたる長刀なれども、男子なき故に私に讓り玉はり、世にある時の嫁入に、對の挾箱の先へ持たせたるに、役に立たぬものとは先祖の恥、女にこそ生れたれ、命は惜まぬ對手は亭主と、取附きて泣出せば、主人迷惑してさま〴〵詫びても肯かず、其中に近所の者集りて、あの連合浪人はねだり者なれば、聞附け來ぬ中に是を扱へと、何れも亭主に呟き、錢三百と玄米三升にてやう〳〵に濟しける、さても時世かな、此女も昔は千二百石取りたる息女、萬を花車にて暮せし身なれども、今の貧に連れて無理なる事に人をねだるとは、身に覺えて口惜し、是れを見るにも貧にては死なれぬものぞかし、既に扱ひ濟みて三百三升請取り、此玄米取りて歸り

て、明日の用に足らぬといへば、幸是れに碓ありとて、貸して踏まして歸しける、是ぞ世にいふさはり三百なるべし、又浪人の隣に年頃三十七八ばかりの女、親類とてもかゝるべき子もなく獨身なりしが、五六年あとに男に離れたるよしにて、髪を切り紋なしの物は着れども、身の嗜は目立たぬやうにして昔を捨てず、しかも姿もさもしからず、常住は奈良茶を慰の樣に捻りて日を暮らせしが、早極月初に万事を手廻よく仕廻て、割木も二三月までも貯へ、肴懸には二番の鰤一本、小鯛五枚、鱈二本、かんばし、塗箸、紀伊國五器、鍋蓋までさらりと新く仕替へて、家主殿へ目黒一本、娘子に絹緒の小雪踏、お内儀樣へうね足袋一足、七軒の合借家へ餅に午蒡一把づゝ添へて、禮義正しく年を取りける、人の知らぬ渡世、何をかして内證の事は知らず、其奥の相住に二人の女ありしが、一人は年も若く、耳も自鼻も世の人に變る事なくて、一生獨り過して悲く、鏡見るたび我ながら横手拍つて、是では人も合點せぬ筈と、身の程を觀じける、又一人は東海道關の地藏に近き旅籠屋の出女せし時、木賃泊の扱參に愁く當り、米など盜みし科にや、同じ世に報ひて、米の乏しき鉢ひらき坊主となりて、顔を殊勝らしく、作り心の外の空念佛、思へば心の鬼狠に衣ぞかし、精進の事は忘れても、鰯の頭も信心からとて、墨染の麻衣を着る故に、此十四五年も佛の御蔭にて、毎朝修行に出しに、一町にて二所づゝの手の中、二十所を集めて漸く一合あり、五十町かけ廻らねば米五合はなし、道心も堅固でなく

ては勤め難し、過にし夏霍亂を煩ひて詮方なく、衣を一夊八分の質に置きけるが、其後請くる事なり難く、渡世の種に盡きける、人の後世信心に替る事はなきに、衣を着たる朝は米五合も もらはれ、衣なしには二合も勸進なし、殊に極月坊主とて、此月は忙しきに取紛れ、親の命日も忘れくれねば、是非もなく錢八文にて年を越しける、誠に世の中の哀れを見る事、貧家の邊の小質屋、心弱くてはならぬ事なり、脇から見るさへ悲しき事の、數々なる年の暮にぞありける、

●伊勢海老は春の紅葉

神の松山草昔より、毎年飾附けたる蓬萊に、伊勢海老なくては、ありつけたる物一色にて春の心ならず、其年によりて格別直段の高き事あり、貧家又は儉約なる宿には、是を買はずに祝儀を濟ましぬ、此前も橙の手切して、一つを四五分づゝの賣買なれば、此替に九年母にて埒を明ける、是は大方色形も似たりよつたりの物なりしが、伊勢海老の名代に車海老、いかにしてもかり着の如く、ない袖振る人は是非もなし、世間を張つて棟の高き内には、それ程の風が當つて、北雨吹の壁に薦莚もなりがたし、澁墨の色付板包むなど、是等は奢にあらず、分際相應に人間衣食住の三つの樂の外なし、家業は何事も親の仕似せたる事を變へて、利を得たるは

稀なり、兎角老ひたる人の指圖をもるゝ事なかれ、何程利發才覺にしても、若き人には三五十八、ばらりと違ふ事數々なり、さる程に大坂の大節季、萬寶の市ぞかし、商事がない〳〵といふは、六十年此方何か賣餘りて捨てたるものなし、一つ求むれば其身一代子孫までも讓り傳へる碌臼さへも、日々年々に御影山も切盡すべし、まして蓮の葉物五月の甲、正月の祝道具は、僅か朔日二日三日坊主寺から里への禮扇、是等は明けずに乘りて世の費構はず、人の氣江戸に續ひて寬濶なる所なり、設へ千貫すればとて、伊勢海老なしに蓬萊を飾り難しと、家々調へければ、極月二十七八日より所々の魚の棚に買上げて、唐物の如く次第にむつかしく、早大晦日には髭も塵もなかりけり、浦の苫屋の紅葉を尋ね、伊勢海老ないか〳〵といふ聲ばかり、備後町の中程に永來といへる肴屋に、只一つありしを一匁五分より附出し、四匁八分とまで望めども、中々當年の切物とて賣らざれば、使ひがはからひにもなり難く、急ぎ宿に歸りて海老の高き事を申せば、親父澁面作りて、我一代の中に高い物買いたる事なし、薪は六月、綿は八月、米は新酒作らぬ前、奈良晒は毎年盆過ぎて買ひ置き、年中現金にして勝手のよき事ばかり、此以前父親の相果てられし時、棺桶一つ樽屋まかせに買ひかづきて今に心殘なり、伊勢海老がなうて、年の取られぬといふ事もあるまじ、一つ三文する年二つ買ふて算用を合すべし、ない物喰ふといふ年、德の神はござらいでも苦うない事、四匁が四分にても海老は沙汰のない事と、機

嫌悪し、されども内義息子と一つになつて、世間は兎もあれ聟が始めて禮にわせて、伊勢海老なしの蓬萊が出さるゝ物か、何程にてもそれを買へと、重ねて人を遣しければ、早今橋筋の問屋の若い者買取りて、最五匁八分に直段は定めたれども、正月の祝の物端金は心にかゝると、錢五百やりて海老取りて歸る、其後にて色々鑿穿すれども、繪にかこふもなかりき、是に附けても此津の廣き事思當りし、宿に歸りて此事を語れば、内義は後悔らしき貌附、親父は是を笑ふて、其問屋心許なし、追付分産に逢ふべきものなり、内證知らずして左樣の問屋銀を貸しかけたる人の夢見悪かるべし、蓬萊に海老がなうて叶はずば、後の棄らぬ分別ありとて、細工人に誂えて、物の見事に紅絹にて張扱にして、二匁五分にて出來けり、正月祝儀仕廻ふて後、小供弄にもなるぞかし、人の智惠はこんな事ぞ、四匁五分を二匁五分で埒を明け、しかも後の用に立つ事と、親父長談義を說かれしに何れも道理につまり、是程に身代持固めたる人の才覺は格別と、耳を濟まして聞く所へ、此親父の母親裏に隱居して、當年九十二なれども、目がよく足立ちて、母屋へ來たり、聞けば伊勢海老の高い鑿穿と、今日までそれを買はずに置く事、さりとては氣の附かぬ者どもよ、そんな事で此世帶が持たるゝ物か、何時とても年越の春ある時は、海老が高いと心得よ、其仔細は伊勢の宮々、御師の宿々、或は町中、在々、所々までも、此一國は神國なれば、日本の諸神を家々に祭るによつて、海老何百萬といふ限もなういる

事なり、毎年京大坂へ來るは、此神々に備へたる後の祭なり、此祖母はそれを考へ、此月の中頃に髭もつかすに生れながらのを、四文づゝにて二つ買ふて置いたと出されしに、皆々横手を打ち、御隱居には一つで濟みますものを、二つは奢つた事と申せば、こちに當所のない事はいたさぬ、定まつて畑牛蒡五把太ければ、三把くるゝ人がある、それ程の物を返す其所へ、此海老にて一夕が牛蒡四文がもので濟ます合點じや、今に歳暮物持てこぬが爰の仕合、さりながらいかに親子の中でも、互の算用合は屹度したがよいしや、どの道にも牛蒡に替る伊勢海老、何れ祝の物に是がなうてもよいはといふて置かれぬものじや、欲心でいふではなけれども、惣じて五節句の取遣先から來たものを、よく〳〵直打して、それ程に見えて、少しづゝ德のいく樣にして返す物じや、毎年太夫殿から御拂箱に、鰹節一連、はらや一箱、折本の暦、正眞の青苔五把、彼是こまかに直段附けて、二夕八分が物申請けて、銀三夕御初穗上ぐれば、高で二分餘りて、お伊勢樣も損の行かぬ樣に、此家三十年仕來つたに、そちに世を渡してから、銀一枚づゝ上げらるる事、いかに神の信心なればとて、いはれざる事なり、大神宮にも算用なしに物使ふ人嬉くは思召さず、その爲には散錢さへ一貫といふを、六百の鳩目を拵え置き、宮廻りにも隨分物のいらぬ樣にあそばしける、さる程に欲の世の中、百二十末社の中にも錢の多きは惠比須、大黒、多賀は命神、住吉の船玉、出雲は仲人の

神、鏡の宮は娘の顔を美うなさるゝ神、山王は二十一人下々を遣さしやる神、稻荷殿は身代の尾が見えぬ樣に守らつしやる神と、宮雀聲々に商口叩く、皆是さしあたつて耳よりなる神なれば、是等にはお初穗上げて、其外の神の前は殊勝にて、さびしき神さへ錢儲け、只はならぬ世なれば、まして人間油斷する事なかれ、伊勢より毎年諸國へ旦那廻りの祝儀狀、大分の事なれば、能筆に手間賃にて書かせけるに、一通一文づゝにて大晦日まで書暮して、同じ事に氣を盡し、年中に二百文取る日は一日もなし、神前長久民安全、御祈念の爲ロ過の爲なり、

●鼠の文使ひ

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて、月の數十二本もらひて煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ隨分細なる人ありける、過し年は十三日に急しく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を燒かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉まで段々に溜置き、湯の沸くに違ひはなしとて、細な事に氣を附けて、世の費穿鑿人に過ぎて利發顏する男あり、同じ屋敷の裏に、隱居建てし母親住まれしが、此男生れたる母なれば、其吝き事限りなし、塗下駄片足なるを、水風呂の下へ燒く時つく〳〵昔を思出し、まことに此木屐は、我十八の時此家に嫁入せし時、雜長持に入れて來て、それから雨に

も雪にも履きて、歯のちひたるばかり五十三年になりぬ、我一代は一足にて埒を明けんと思ひしに、惜や片足は野良犬にくはへられ、端になりて是非もなく、今日煙になす事よと、四五度も繰言をいひて、其後釜の中へ投捨てられし、世に月日のたつは夢ぢや、明日は其むかはりになるが、惜い事をしましたと、少時泪のみ難し、折節近所の醫者水風呂に入られしが、先以て目出度き年の暮なれば、御嘆きをやめさせ給へ、してそれは元日に何人の御死去なされたと尋ねられしに、いかに愚痴なればとて、人の生死をそれ程に愁く事ではござらぬ、私の惜むは去年の元日に、堺の妹が禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何程か嬉く恵方棚へ上げ置きしに、其夜盗まれました、そもや勝手知らぬ物の取る所ではござらぬ、其後色々の願を諸神へ懸けますれども其効もなし、又山伏に祈を頼みましたれば、此銀七日の中に出でますればとて、壇の上なる御幣が動き、御灯が次第に消ますが、大願の成就せし験といひける、案の如く祈最中に御幣動き出で、灯火微になりて消えける、是は神佛の事末世ならず難有き御事と思ひ、お初穂百二十上げて七日待てども此銀は出でず、さる人に語れば、それは盗人においといふ物なり、今時仕懸山伏とて、さま〴〵護摩の壇に繰いたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて結句をき事にはまりぬ、其御幣の動出づるは、立置きたる岩座に壺ありて、其中に鰌を生置き

ける、珠數さら〳〵と押揉むで、東方に西方にと、獨鈷錫杖にて佛壇を暴けなく打てば、鰐が是に驚き上を下へと騒ぎ、幣串に當れば暫く動きて、知らぬ目からは恐し、又灯明は臺に砂時計を仕懸け、油を扳取るぞと、此物語を聞くからいよ〳〵損の上に損をいたした、我此年まで錢一文遣さずに暮せしに、今年の大晦日は、此銀の見えぬ故、胸算用違ひて、心がゝりの正月をいたせば、萬の事面白からずと、世の外聞も搆はず大聲上げて泣かれければ、家内の者どもも興を覺まし、我々疑はるゝ事の迷惑と、心々に諸神に祈誓を懸ける、大方煤もはき仕舞て、屋根裏まで撿めける時、棟木の間より杉原紙の一包を探出し、よく〳〵見れば隱居の尋ねらるる年玉銀に紛れなし、人の盜まぬ物は出ますぞ、さる程に悪い鼠めといへば、お祖母中々合點せられず、是程遠歩きする鼠を見た事なし、頭の黒い鼠の業、是からは油斷のならぬ事と、疊たゝきて喚かれければ、藥師水風呂より上り、かゝる事には古代にも例あり、人皇三十七代孝徳天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の都を、難波長柄の豊崎に移させ給へば、和州の鼠も連れて宿替しけるに、それ〳〵の世帶道具をば運ぶこそ可笑けれ、穴をくろめし古錦、鳶に隱るゝ紙襖、猫の見附かぬ守袋、鯽の道切るとがり杭、桝落しのかいづめ、油火を消す板切れ、鰹節引くてこまくら、其外嫁入の時の熨斗、鰤の頭、熊野參の小米苞まで、二日路ある所を咀へて運ひければ、まして隱居と母屋少の所引きまじき事にあらずと、年代記を引いて申せど、中々同心いたされず、口賢くは仰らるれども、目前に見ぬ事は實にならぬと申されければ、何とも詮方なくやう〳〵案出し、長崎水右衞門が仕入れられたる、鼠使ひの藤兵衞を雇ひに遣し、只今あの鼠が人のいふ言を聞入れて様々の藝盡し、若衆に賴まれ戀の文使ひといへば、封じたる文咀へて後前を見廻し、人の袖口より文を入れける、又錢一文投げて、是で餅買ふて來いといへば、錢を置いて餅咀へて戻る、何と〳〵我を折り給へといへば、是を見れば鼠も包金を引かまじき物にあらず、さては疑晴れましたと、さりながらかゝる盜心ある鼠を宿知られたる不祥に、滿圓一年此銀をあそばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へといひ懸り、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取、眞の正月をするとて、此祖母獨寢をせられける、

胸算用卷之一　終

胸算用

卷之二

一　銀一匁の講中

長町に續く嫁入道具
大晦日の祝儀紙子一疋

二　嘘も只は聞かぬ宿

何の沙汰なき取上婆、
大晦日の投節も唄ひ所

三　最始末の異見

宵寢の久三がはたらき
大晦日の山椒の粉賣

四　門柱も皆かりの世

朱雀の鳥おとし
大晦日の喧嘩屋敷

胸算用

銀一匁の講中

人の分限になる事仕合といふは言葉、實に面々の智恵才覺を以て稼ぎ出し、其家榮ゆる事ぞかし、是福の神の戎殿のまゝにもならぬ事なり、大黒講を結び、當地手前よろしき者ども集り、諸國の大名衆への御用銀の貸入の内談を、酒宴遊興よりは增したる世の慰と思定めて、寄合座敷も色近き所を去つて、生玉下寺町の客庵を借りて、毎月身代詮議にくれて、命の入日傾く老躰ども、後世の事は忘れて、只利銀の重り富貴になる事を樂みける、世に金銀の餘計ある程、萬に附けて目出度事外になけれども、それは二十五の若盛より油斷なく、三十五の男盛に稼ぎ、五十の分別盛に家を治め、惣領に萬事を渡し、六十の前年より樂隱居して、寺道場へまゐり下向して、世間向のよき時分なるに、佛とも法とも辨へず、欲の世の中に住めり、死なば萬貫目持つても、帷子一つより皆浮世に殘るぞかし、此寄合の親仁ども二千貫目より内の分限一人もなし、又近年我々が働にて、少なる身代の者共金銀を仕出し、二百貫目三百貫目、或は五百貫目までの銀持二十八人語らひ、一匁講といふ事を結び、毎月宿も定めず、一匁の仕出し、

飯も誂へ下戸も上戸も酒なしに、遊び事にも儉約第一、氣のつまる穿鑿なり、朝から日の暮るるまで、餘の事なしに身過の沙汰、中にも貸銀の確なる借手を吟味して、一日も銀をあそばせぬ思案を廻しける、此者どもが手前よろしくなりける、始め利銀取込みての分限なれば、今の世の商賣に、銀貸屋より外によき事はなし、されども今程は見せかけのよき内證の不埒なる商人、大分借込拵えて倒れければ、思もよらぬ損をする事度々なり、されども人を氣遣して、金銀貸さずにも置かれず、隨分内證を聞合せ、此仲間は互に樣子を知らせ、向後は貸入をいたすべしと、いづれも斯くいひ合すからは、出抜に合し給ふな、さあらば各心得の爲に、當地で定まつて銀借る人一人〳〵書出し、細に詮議して見るべし、是最なり、先北濱で何屋の誰、財寶諸色かけて七百貫目の身代といひ出れば、其見立は格別八百五十貫目の借銀といふ、此有無の相違に一座の衆中肝をつぶし、爰が大事の穿鑿、兩方御思召入とくと承り、人々の心得の爲とぞ聞きける、先分限と見たる所は、去々年の霜月に娘を堺へ緣組せしに、諸道具今宮から長町の藤の丸の賣藥屋の門まで續きし、後から十貫目入五つ、青竹にて揃への大男にさし荷はせ、其まゝ御祓の渡る如し、外にも數多の男子あれば、餘計なくて娘に五十貫目は附けまいと思ひまして、嫌といふ物を無理に、此三月過に二十貫目預けましたといはるゝ、扨々御笑止や其二十貫目が一貫六百目ばかりで戻るでござろといへば、此親仁顏色變つて、箸持ちながら集

汁咽喉を通らず、今日の寄合に日借き事を聞きけると、樣子を聞かぬ中から泪を溢されける、とてもの事に其内證が聞きたし、されば其聟殿方もよく〳〵せはしければこそ、芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり、此利をかきて芝居の外何商賣して胸算用が合ふと思召すぞ、十貫目箱一つは金物まで打つて三匁五分づゝ、十七匁五分で箱五つ、中には世間に澤山なる石瓦、人の心程恐ろしきものはござらぬ、兩方の外聞見懸ばかりに内談と存ずる、我等は其箱を明けて丁銀にしてからまことにはいたさぬ、あの身代の敷銀は、二百枚も過物こしらえなしに五貫目、何と各我等が沙汰する所が違ふたか、先あれには一兩年、二貫目ばかり預けて見て、それに別の事なくば、又四貫目程五六年も貸して、確なる事を見届けての二十貫目といへば、一座是最と同音に申段々利につまりて、此親仁歸りには足腰起たずして嘆き、我此年まで人の身代見違へし事なきに、此度は不覺なる事をいたしましたと、男泣きにして、何卒御分別はないか〳〵とあれば、時に最前の世智賢き人のいふは、千日千夜御思案なされても、此銀子無事取返す工夫は只一つより外になし、此傳授上々の紬一疋ならば、確に取返して進上申すといへば、それは〳〵中綿まで添へまして御禮申さう、何とぞ賴むといふ、然らば只今までより懇に仕懸け、天滿の舟祭が見ゆるこそ幸なれ、濱へ懸けたる棧敷へ女房どもをおこして見せたし、廿五日に御内義をやりて、先の噂と染々内證を語らせ、一日遊ぶ中に息子どもが馳走に

出るは知れた事じや、時に二番目の息子が生質を譽出し、賢さうなる目ざし、此方の御子息にしてはお心に懸けさしやるな、鳶が孔雀を生むだとは此子の事、玉の様なる美人、近頃押附たる所望なれども、私もちひまして聟にいたしますが子ながらこれ娘も十人並に、其上親仁一人子なれば、五十貫目附けてやるとは常々の覺悟、又我等が私銀三百五十兩、長堀の角屋敷捨賣にしても、二十五貫目が物してから、袖も通さぬ衣裳六十五、一人の娘より外にやるものがござらぬ、是がこちの聟殿と、思ひ入りたる顔附して、是を言葉の始にして、其後折節少しづゝ物をやればかへしを受け、是以て損のゆかぬ事それよりよい程を見合せやとひに遣し、銀懸くる傍に置きて、數をよませ極印を打たせ、内藏へ運ばせなどして、一日使ふて歸し、其後先の身になる人を見立て、竊に呼びに遣し、其人の二番目の子を、女房どもが何と思入りましたやら、是非にと望みまわらす、急がぬ事ながら序もあらば、此方の娘を貰ふてもくださるか、尋ねて下され、此方へ取つくらふて申す事もござらぬ、銀千枚は何方へやりますとも其心得といひ渡し先へ通じたと思ふ時分に、内方の預銀入用と申遣せば、欲から才覺して濟す事手にとつて別れける、其年の大晦日に、彼親仁門口より笑ひ込み、御蔭〳〵御蔭にて、右の銀子元利ともに二三日前に請取りました、此方の樣なる智惠袋は銀貸仲間の重寶〳〵と頭を叩き、扨其時

は紬一疋とは申せしが、是にて御勘忍あれと、白石の紙子二反差出して、中綿は春の事といひ棄て歸りける、

●嘘も只は聞かぬ

萬人とも月代剃つて、髪結ふて、衣裳着更えて出た所は、皆正月の景色ぞかし、人こそ知らね年の取りやうこそさま〴〵なれ、内證の迚も埒の明かざる人は買がゝり、萬事一軒へも拂はぬ胸算用を極め、大晦日の朝飯過ぐると否や、羽織脇差さして機嫌の悪い内儀に、物には堪忍といふ事がある、少し手前取直したらば、乘物に乘せる時節もまたあるものぞ、夕べの鴨の殘物を酒煎にして喰やれ、懸どもを集めて來たらば、先其方の寶引錢一貫退けて置いて、ある次第に拂ふて、無い所は儘にして、懸乞の貌を見ぬやうに、此方向きて寐て居やれと、いひ捨てゝ出行く商人、何として身代續くべし、一日〳〵物の足らぬ拵え、己も合點ながら俄に分限もなり難し、こんな物の女房になる事世の因果にて、子を持たぬ中に年を寄らしける、一錢も大事の日、鼻紙入に一歩二つ三つ、豆板三十ばかりも入れて、係りのない茶屋に行きて、爰にはまだ得仕舞はぬかして、取亂したる書出し、千束の如し、是皆一つにしてから高が二貫目か三貫目、人の家にはそれ〴〵の物入、我等が所は呉服屋へばかり六貫五百目、好奇過ぎたる奥樣に

迷惑いたす、さらりと閑明けて此入目を女郎狂にいたすでござる、さりながら去られぬ事は、三月からお腹にありて、日もあるに、今朝から氣が附きて、今日生るとて生れぬ前の襁褓定め、乳母を連れて來るやら、三人四人の取揚婆旦那山伏が來て、變生男子の行、千代の腹帶子安貝、左の手に握るといふ海馬を才覺するやら、不斷醫者は次の間に鍋を仕懸け、早め藥の用意何にと入る事じややら、松茸の石づきまで取寄せて、姑が來て世話をやく、さても〳〵やかましい事かな、されども此方は內にござらぬものといふを幸に、ふら〳〵と爰へ御見込み申した、我等がはもしは借錢乞はれて出違ふかと思ふもあれば氣味が悪い、此島中に一錢も差引なしの男、毎に現銀にて子の出來るまでの宿をかし給ふか、爰の肴懸の鰯が小くて我等氣に入らぬ、早々買ひ給へと一角投出せば、是は嬉や亭主に隱しまして、欲き帶よ〳〵と笑ひ、此年の暮には心よきお客の出來、年中の仕合は知れた事、さて臺所は餘り酒落過ぎました、ちと奥へと申す馳走も常に替りてすき、合點かといふ樽の酒の爛するも可笑、其後噂は疊占置きて三度までいたして、同じ事御男子樣に極りましたと、噂が推量と客の跡方もなき嘘と一つになしける、遊所の氣散じは大晦日の色三紋、誰憚らぬ投節、嘆きながらも月日を送り、今日一日に永い事心に物思ふ故なり、常は暮るゝを惜みしに格別の事ぞかし、女は勤とて心を春の如くにして、可笑うないを笑面して、一つ〳〵行く年の悲や、此前は正月の來るを羽根突く事に嬉かりしに、

早十九になりける、追付脇塞きて嘆といはるべし、振袖の名殘も今年許りといふ、此客悪い事には覺強く、汝此前花屋に居りし時は丸袖にて勤め、京で十九といふた事大方二十年にあまる、穿鑿すれば三十九の振袖、浮世に何か名殘あるべし、小作りに生附きたる德、頭抑えて昔を語れば、此女ゆるし給へと手を合せ、氣の詰る年穿鑿やめて、打解けて夢結ぶ中に、此女の母親らしき者の來て密に呼出し、一つ二つ物いひしが、何の事はない是が貌の見納め、十四夕の事に身を投げるといふ、此女泪含みて今まで上に着たる郡內縞の小袖を風呂敷包に手廻し、早くして親に渡すありさま、如何にしても見兼ねて、又一角取らせて戻し、心面白う聲高に物いふを聞附け、若衆の草履取めきたる者二人附込みて、旦那是に御座りまする、御宿へ今朝から四五度もまゐれどお留守は是非なし、御目に懸るこそ幸と、何やら爪開きして後銀有り次第、羽織脇差着物一つ預かり、跡は正月五日までにといひ捨てゝ歸る、此お客首尾悪く人にいひ懸けられて合力せねばならず、兎角節季に出歩くが悪いと、是にも分別面して夜の明方に爰を歸る、痴人といふは少し脉のある人の事と嗤ふて果たしける、

●尤始末の異見

所務分のたいほうは、設へば千貫目の身代なれば、總領に四百貫目、居宅に附けて渡し、二男

に三百貫目、外に家屋敷を調へ譲り、三男は百貫目附け、他家へ養子に使はし、もし又娘あれば三十貫目の敷銀に、二十貫目の諸道具拵へて、我相應より輕き縁組よし、昔は四十貫目が仕入して十貫目の敷銀せしが、當代は銀を呼ぶ人心なれば、塗長持に丁銀、雜長持に錢を入れて送るべし、少し娘子は蠟燭の火にては見せ憎い貌にても、三十貫目が花に咲きて花嫁樣と持囃し、何が手前者の子にて、少い時から旨い物ばかりで育てられ、頬先の握出したる圓面も見よし、又額のひよつと出たも、被衣の着振がよいものなり、鼻の穴の廣さは息使ひ忙しき事なし、髪の少きは夏涼しく、腰の太きは褌禰小袖を不斷召せば是もよし、爪外れのたくましきは、取分け母が首筋へ取附く爲によしと、十難を一つ〳〵よしなにいひなし、爰が大事の胸算用、三十貫目の銀を確に六にして預けて、毎月百八十目づゝ納まれば、是で四人の口過はゆるり、内義に腰元、仲居、女物師を添えて、我物喰ひながら人の機嫌を取り、嫁子微塵も心に如在も欲もなきお留守人、美きが見たくば、其色里にそれにばかり拵へて、夜でも夜中でも御座りませい、それは〳〵面白うて起別るゝと、七十一匁のかねの聲是々面白からず、つら〳〵惟るに、揚屋の酒小さかづきに一盃四分づゝにつもり、若衆宿の奈良茶一盃八分づゝにあたるといへり、是を氣を付て見れば格別高ひものながら、是土鍋の一盃とて何のやうなし、義理もかきて戀もやめて、喰にげ大じんにあふ事多し、さながらそれとて乞がたく、其客死分にしてさらりと帳

を消し置て、おのれ後の世に餓鬼となり、料理ごのみして喰ふた裏鳥も杉燒も、くはつ〳〵と燃あがりて目におそろしく、飯代すまさぬ事思ひしるべしと、亭主は火箸にて火鉢たゝきてうらみけるありさま、飛驒縞の羽織貰ふた時の顔つきに引かえておそろし、惣じて遊興もよいほどにやむべし、仕舞の見事なるは稀なり、是を思へば面白からずとも堪忍をして我内の心安く夜食は冷飯に湯豆腐干魚有合に、借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄をさせ、斷りなしに高枕して腰元に足の指をひかせ、茶は寐ながら内義に持せ置て、手も出さずに飲みけれども西々の寵將軍此内に續く强者なければ、誰れか外より尤むる人なく、樂しみはこれで濟む事なり、旦那内に居らるゝとて、表の若ひ者どもも八坂へ出かくる無分別をやめ、又御池邊の奉公人宿へ、忍びの約束も自から止まりて、只は居られず江戸狀どもをさらへ、失念したる事どもを見出し、主人の德のゆく事あり、捨る反古紙捻に捻る丁雅は、又内方へ聞ゆる程手本讀みて手習ひするは、其身の德なり、宵寐の久七も、鮪包みたる弦を解きて錢指をなへば、たけは朝手廻し惡しきとて蕪菜揃へける、お物師は日野絹のふしを一日仕事程取りける、猫さへ目三寸俎板を見扱き、肴懸ごとり音しても聲を出して守りける、旦那一人宿にあらるゝ德、一夜にさへ何程か增して、年中に積りては大分の事ぞかし、少しお内義氣にいらぬ所あらうとも、其所を丁間したまひて、分里は皆嘘とさへ思へば止むもの、爰見附ける若世の納る所と、京都者に慣れ

たる媒人口にて、節季の果に長物語、耳の役に聞きても悪からぬ事なり、さる程に今時の女、見るを見眞似に好き色姿に風俗をうつしける、都の呉服店の奥様といはるゝ程の人、皆遊女に取違える仕出しなり、又手代上りの内義は、おしなべて風呂屋者に生寫し、それより横町の仕立物屋縫箔屋の女房は、其儘茶屋者の風義にて、それ〳〵に身代程の色を作りて可笑し、鑿議して見るに、傾城と地女に別に變つた事もなけれども、第一氣が鈍で、物がくどふて、いやしい所があつて、多の書樣が違ふて、酒の飲みぶりが下手で、唄唱ふ事がならひで、衣裝附が取擴げて、起居が危なうて、道中が腰がふら〳〵として、床で味噌鹽の事をいひ出して、儉約で鼻紙一枚づゝ使ふて、伽羅は飲藥と覺えて、萬に氣の詰るばかり、髪頭は大方似た物といへば、同じ事にいふも愚なり、女郎ぐるひする程の者に、疎きは一人もなし、其賢き奴が、此儲け憎い金銀を乞ひ、つめらるゝ、借銀目安附けられしを請合ひ、萬事の入用を早や極月十三日に事始めとて遣しける、よく〳〵面白ければこそなれ、爰は分別の外ぞかし、烏丸通り歷々の兄弟に、有銀五百貫目づゝ譲り渡されけるに、弟は次第に仕出し、程なく二千貫目と一門の中からさす程なるに、兄は譲受けて四年目の大晦日に、天道は人を殺し玉はず、今宵月夜ならば昔を思ひ出して、是が賣りに歩るかるゝものか、闇で手管がなる事と、紙子頭巾深々と被り、山椒の粉胡椒の粉を賣廻りて悲しき年を取り、心浮々と

丹波口まで行く中に、夜は明方になりぬ、世にある時の朝ごみ思ひ出してぞ歸りし、

門柱も皆かりの世

惣じて物馴れては物怖をせぬ物ぞかし、都の遊所島原の入口を、小唄に唱ふ朱雀の細道といふ野邊なり、秋の田の熟る折節、諸鳥を怖す爲に案山子を拵え、古き編笠を着せ、竹杖を突がせ置きしに、鳶烏も不斷燒印の大編笠を見附けて、是も供なしの大盡と思ひ、少しも驚かず、後は笠の上にも止り、案山子を粹ごかしに合はせける、されば世の中に借錢乞に逢ふ程、怖しきものは又となきに、數年負ひ附けたるものは大晦日にも手違はず、昔が今に借錢にて切首られたるためしもなし、有る物やらで置くではなし、やりたけれども無いものはなし、思ふまゝならず今の間に銀の成る木が欲しや、扨も蒔かぬ種は生えぬものかなと、庭木の片隅の日の照る所に、古筵を敷き、庖丁まなばしの切刃を研附けて、せつ〳〵錆落してから、小鰯一疋切る事にはあらねども、人の氣は知れぬもの、今にも俄に腹のたつ事が出來て、自害する用にもたつ事もあるべし、我年積つて五十六、命の惜しき事はなきに、中京の分限者の腹はれどもが、因果と若死しけるに、我等が買懸りさらりと濟してくれるならば、氏神稻荷大明神も照覽あれ、僞なしに腹掻斫つて身替りにたつと、其儘狐附きの眼して庖丁取廻す所へ唐丸鳴して、來る、

己れ死出の首途にと細首打落せば、是を見て懸乞ども肝をつぶし、無分別者に言葉質取られてはむづかしと、一人〳〵歸り樣に茶釜の先に立ちながら、あんな氣の短い男に添はしやるお内義が、緣とは申しながらいとしい事じやと、各〳〵いひ捨て〳〵歸りける、是ある手ながら手の惡い節季仕舞なり、何の詫言もせずにさらりと埒を明けゝる、其懸乞の中に堀川の材木屋の小者、未だ十八九の角前髮、しかも弱々として女の樣なる性質にて、心の強き所ある若者なりしが、亭主が贔屓懸の中はかまはず、竹緣に腰懸けて袂より珠數取出して、一粒づゝ繰て口の中にて稱名稱へて居しが、人もなく事靜まりて後、扨狂言は果てたさうにござる、私方の請取つて歸りましよと申せば、男盛りの者どもさへ了簡して歸るに、己れ一人跡に殘り、物を仔細らしく人のする事を狂言とは、此忙しき中に無用の死でんごうと存じた、其詮議いらぬ事兎角取らねば歸らぬ、何を、銀子を、何物が取る、何物取るが我等が得物、傍輩數多の中に人の手に餘つて取憎い懸ばかりを、二十七軒私請取りなされた材木は此方の物、さらば取つて歸らんと、門口では歸らぬ所、此銀濟まぬ中は內普請なさの柱から大槌にて打外せば、亭主走出で堪忍ならぬといふ、是々其方の虎落今時は古し、當流が合點參らぬさうな、此柱外して取るが當世の懸の乞ひ樣と、少しも驚く景色なければ、亭主何ともならず詫言して、殘らず代銀濟ましぬ、銀子請取つて申分はなけれども、如何にしても此

285291

方の横に出樣が古い、隨分物に懸りじやがそれでは御座らぬ、お內義によく〳〵いひ含めて、大晦日の晝時分から夫婦いさかい爲出し、ざらぬ、出て行くからは人死が二三人あるが合點か、大事じやぞ、其所な人、是非いねかいなずにいんで見しよといはるゝ時、何卒借錢もなして、跡々にて人にもいひ出さるやうに、人は一代名は末代、是非もない事、今月今日百年目、さて〳〵口惜い事かなと、何でもいらぬ反古を大事の物の樣な顏附して、一枚〳〵引裂いて捨つるを見ては、如何なる懸乞も少時は居ぬものでござるといへば、今まで此手は出しませなんだ、お蔭によつて來年の大晦日は、女房どもは是で濟ます事じや、さても〳〵此方は若いが、思案は一越こした年の暮、互の身祝なればとて最前の鷄の毛を引きて是を吸物にして、酒盛りて返して後、來年の事までもなし、毎年夜更けてからむつかしい懸乞ども來るぞとて、俄にいさかいを拵えおき、萬の事をすましける、誰いふともなく後には、大宮通りの喧嘩屋とぞいへり、

胸算用卷之三終

胸算用

卷之三

一　都の顔見世芝居

それ〳〵の仕出羽織
大晦日の編笠は被物

二　餅花は年内の詠

懸取上手の五郎右衞門
大晦日に無用の仕形舞

三　小判は寐姿の夢

無間の鐘つく〳〵と物案
大つごもりの人置の嘘

四　神さへお目ちがひ

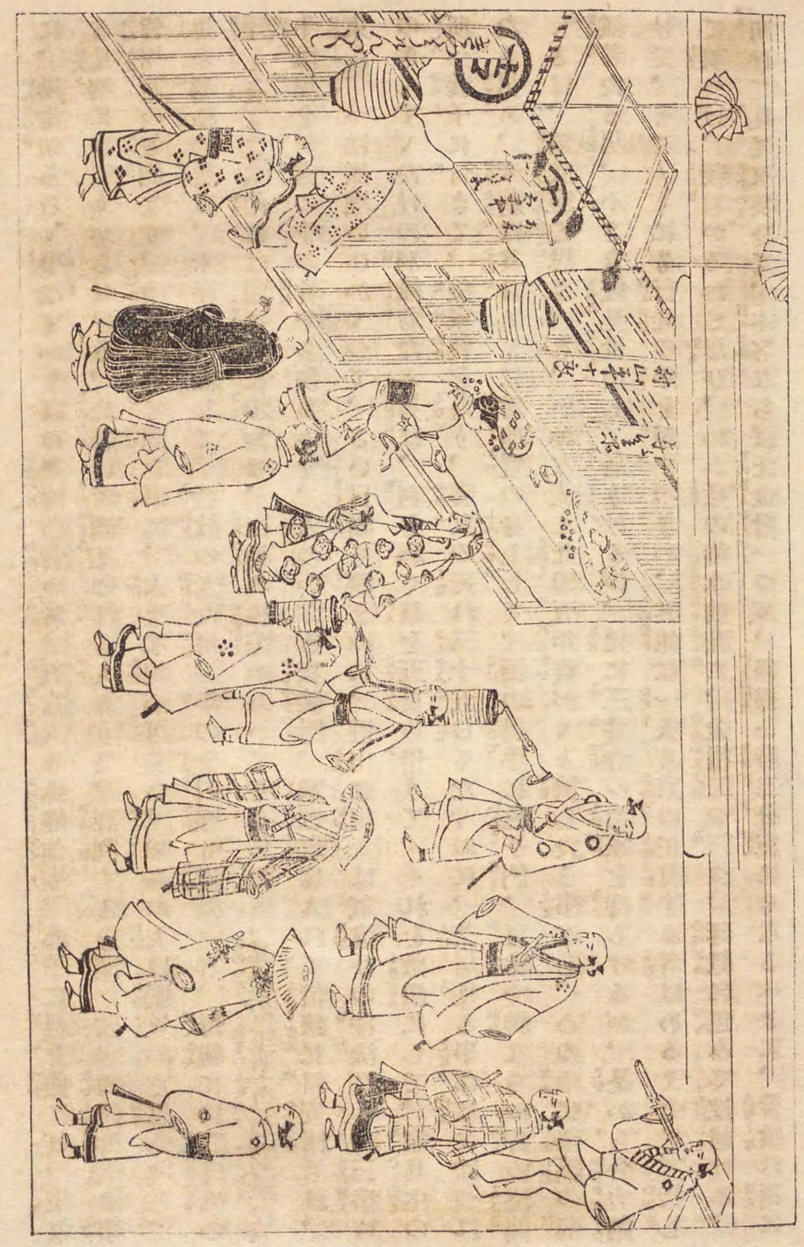
堺は内證のよいところ
大晦日の因果物がたり

胸算用

●都の顔見世芝居

今日の三番叟所繁昌と舞納め、天下の町人なれば、京の人心何ぞといへば、太氣なる事是まことなり、これ常に胸算用して、隨分始末のよき故ぞかし、過し秋京都に於て、加賀の金春勸進能を仕りけるに、四日の棧敷一間を、銀十枚づゝと定めしに、皆借切て明所なく、しかも能より前に銀子渡しける、此度大事ある關寺小町するといへば、是一番の見物と、諸人勇みて鼻笛を吹きけるに、皷に障る事ありて、關寺の能組變りぬ、それさへ木戸口は夜のうちに見る人山の如し、中にも江戸の者我一人見るために、銀十枚の棧敷を二間取りて、猩々皮の敷物、道具置の棚を釣らせ、腰屏風、枕箱、其後に料理の間、さま〴〵の魚鳥、髭籠に折節の水菓子、次の棧敷に風爐釜を仕懸け、割蓋の杉手桶に、宇治橋音羽川と書附して並べ、醫者、呉服屋、儒者、唐物屋、連歌師など入交り、其後の方には島原の揚屋、四條の子供宿、都に知れたる末社、按摩取、兵法使の涙人まで控えたり、棧敷の下は供駕籠、假湯殿、假雪隱、何にても不自由なる事一つも無きやうに拵へ、榮華なる見物、此心は何となく豊なり、此人大名の子にもあらず、

只金銀にてかく成るなれば、何に附けても銀儲して心まかせの慰みすべし、かゝる人は跡の滅らぬ分別しての樂深し、身代さもなき人霜さきの金銀仇に使ふ事なかれ、九月の節句過より、大暮までは遠ひ事の樣に思ひ、萬人渡世に油斷をする事ぞかし、十月始めより日和定め難く、時雨風の烈しく、人の氣も是に連れて自ら騷々しくにくれければ、花車 商 諸職人の細工も思案變りて止めける、次第に朝霜夕風、人皆冬籠の火燵に宵寐して、それ〴〵の家業外になりゆき、差詰りて迷惑する事なり、其後法華寺の御影供、淨土宗の十夜談義、東福寺の開山忌參り、一向宗の御取越し、又は玄猪の祝義に夜の遊び、稻荷の御火燒の比、河原の役者入替りて、貌見世芝居の時分は、同じ人又珍しく、見る人も又浮立ち、今日は其座本、明日は此太夫本、其次は誰が座に、大坂の若衆方か出るなど沙汰して、水茶屋より豫て棧敷取らせ、内證より近附の藝者に花を取らせ、旦那御入來といはるゝまでの外聞に、無用の氣を張りける、提重酒が取上して、我宿へは直に歸らず、石垣町の二階座敷に切狂言の踊をうつし、王城の辰巳あがりなる聲して、敵山へも響き渡る程の騷ぎ、京に人も見知る程の者にしてあれば、誰樣の御服所、何人樣の懸屋などいふさへ、悪所の騷ぎは奢らしく見えける、ましてや端銀の商賣人、設ひ氣延しに芝居見るとも、隣に烟草飲まぬ所を見濟し、圓座借りて見て、役者若衆の名覺えぬ者か、與次兵衞が顏見世の初日に、左方の二軒目の棧敷



に、勘當切らるゝ事などかまはぬ貌附の若い者、五六人も風俗作り、藝子に目を使はせ、下なる見物にけなりがらせける、此若い者衆見知れる人ありて、評判するを聞けば、內證知らぬ事皆川西の奴衆なり、中京の衆と同じ事に、大きな貌が可笑い、知らぬ人は歷々かと思ふべし、黒い羽織の男は、米屋へ入緣して、欲故の老女房、年の十四五も違ふべし、母親には二斗入の碓を踏ませ、弟には蠶豆賣に歩かせ、白柄の脇差がおいてもらいたい、其次の玉虫色の羽織は、牛涎屋を何處の牛の骨やら知らいで、人のかぶる衣裝附、家は質に入れて借銀に目安附られ、東隣へは無理いひかゝつて、さい目論も濟まぬに、遊山に出るは氣違ひの沙汰なり、三番めのぎんすゝたけの羽織着たる男は、利をかく銀を五貫め借りて、それを敷銀にして、家具主の所へ養子に行きて、後家親を蔑り、養父の死れ三十五日もたゝぬに、芝居見る事作法にはづれたる男め、米薪は其日〳〵に當座買の身上して、酒の對手に色子們、可愛や神ならぬ身の淺間しさは、銀成客と思ふべし、いかな〳〵此四五年買がゝり濟したる事なし、あの中に染縞の羽織着たる男、小さき錢見世出して居りけるが、兄に三井寺の出家を持ちけるが、是から合力請けて、そこ〳〵にも行先の年を越すべきか、其他に一人も京の正月する者はあるまじと、指して笑へば、羨しがるかと思ひ、かい敷の椿水仙花に、金柑二つ三つ、延紙に包みて投越ける、明けて見て又笑ひて、本客ならば此金柑一つが、銀拂ひ時二分宛にもなるべきに、皆喰れ損に

なるは知れた事といひ捨て、芝居は果てゝ、立歸りけるも變らぬ羽織に、色茶屋氣を附けて、銀の事申せどするに効なく、程なう大晦日になりて、一人は夜扱け古しとて、晝扱けにして行方知れず、又一人は狂人分にして座敷牢、又一人は自害仕損ひて請に立ちけるとて、町へ嚴しき斷、茶屋へ取附く島も無く、夢見の悪い寶舟、尻に帆懸けて逃歸り、豫ての算用には十五兩の心當て、預置かれし編笠三蓋殘りて、大晦日の被物どぞなりける、

●餅花は年內のながめ

善は急げと、大晦日の懸乞手敏く廻らせける、今日の一日鈬の草鞋を破り、世界を韋駄天の駈廻る如く、商人は勢一つのものぞかし、數年功者のいへり、惣じて懸は取よい所より集めて、塲明かず屋と知れたる家へ終にねだり込み、言葉質取られて迷惑せぬ樣に、先より腹の立つ樣に持つて來る時、尙物靜に義理詰に外の咄をせず、居間揚口にゆるりと腰懸けて、袋持に挑灯消させて、何の因果に懸商人には生れ來ました、月代剃つて正月した事無く、女房們は銀親の人質になして、手代に機嫌を取らせ、身過は外にも有るべき事と、科も無き氏神を怨む、御內

證は存ぜねども、是の御内義樣は佛々、天井裏に差したる餅花に春の心して、地鳥の鴨いりこ串貝、何れ人の内は眞先颪が目に着く物じや、御小袖もなされましたで御座りましよ、今は世間に皆紋所を、葉附の牡丹と四つ銀杏の丸、女中方の流行物、其時々にならばして、着たい女房に衣裳おまつ、御仕着は定めて柳すゝたけに、亂れ桐の中形でござろ、同じ奉公でも此樣な御家に居合すが其身の仕合、片脇には今に天人からくさ目にしむなどゝ、内義に物をいはす樣に仕懸けて隙を入れければ、外の借錢乞の無い無い間を見合せ、此暮には何方へも拂ひいたさねども、此方は段々斷りに至極いたした、來春女房殘りは又三月前には帳を消さして、笑ひ貌を見ますぞと、百目の中へ六十目は渡す物なり、昔は賣懸百目あれば八十目濟し、此二十年ばかり以前は、半分確に濟しけるに、十年此方は四分拂ひになり、近年は百目に三十目渡すにも、是非惡銀二粒は交ぜて渡しける、人の心次第にさもしく、物借りながら迷惑はいたせど、商やめる外なく、又節季忘れて懸帳に附置きける、萬時世に變るも可笑し、前々はならぬ斷りを聞屆けて、大晦日の夜半限りに仕舞ひ、中頃は又夜明方まで廻りて、懸乞といへば喧嘩を爲ざる家一軒もなし、此一兩年は更行くまで歩きはすれど、互に聲を立てず、密に仕舞ふ事に氣を附けて、見るに無いといふこと無いに極り、内證の事が兩隣へ聞えるも構はず、借錢は大名も負はせらるゝ浮世、千貫目に首斬られたる例なし、

有つて遣らずに措かるゝものか、此大釜に一歩一杯欲しや、根こそぎに濟す事じや、金銀程片行のする物は無い、何としてか銀に憎まれました、一度は榮えと謠ひて、木枕皷にして横に寐る男には、何とも取つて附所なし、義理外聞を思はぬからは、埒の明かぬ事見定め、古懸は捨て當分の差引、それを互に了簡して、腹立てずに仕舞ふ事、人皆賢き世とぞなりける、倩世間を思ふに、隨分身になる手代よりは愚なる我子が增なり、仔細は自然と信現れ、銀集れば皆我物と思ふから、そこ〳〵と催促せず、身の働に私なし、扨又召使の若い者、よく〳〵親方大事に思ひ、身の上を覺悟して、天理を知るは格別、大方は主の爲になる者は稀なり、一日千金の色所に遊び、十分請取る銀あれば、其内に不足拵え、或は小判のしかけ、又は銀子請取り懸を内へは錢使ふて歸るなど、親方の確に知らぬ賣懸は死帳に附捨てさま〴〵に私する事、如何に氣の着く主にても、それ程にはならぬものぞかし、又小商人の小者までも、急しき中に懸粗畧にして、布袋屋の骨牌一面買つて、道歩き〳〵八九ぞうに心覺えするもの、親方に德は着かぬなり、懸乞にも色々の志好き者少し、人は盜人火は燒木の始末と、朝夕氣を着けるが胸算用の肝門なり、爰に請取普請の日用頭に、ふるいはれて、月待日待に物眞似して人の氣に入りける、此大晦日仕舞ひ兼ね、さる方へ銀五百目申上れば、易い事と請合ひ玉へば、夜に入り御見舞申し、あゝら樂しや、今宵琴の音を聞けば、

年のよらぬ仙家の心地、當地廣しと申せども、此御内方ならでは外になし、金銀滿々として四方に寶藏、隱簑に隱笠、打出の小槌は針口の音、福々旦那とひろ敷に畏る、用ありさうなる忠六、此事かと五百目包投出せば、恭しと祝ふて三度押戴き、御蔭で年を鷄が鳴く、お暇申してさらばとて、門口まで出でけるが、ちよこ〳〵と立歸り、奥樣へ難有がりましたと、宜しく賴たてまつる、腰元衆といふ時、仲居のきちが、何と忠六殿喜びの折なればといふ、一舞まひましよ目出たい盡しを長々といふ中に、北國より重手代歸りて、只今二百貫目御倉屋敷へ渡ぞ、米は追附上ると仕合銀よ〳〵、今日奥にも琴の小謠所か、さあ銀の穿鑿せよといふ時、忠六揚口に置きたる五百目包を取上げて、是は澤山なる銀子何の爲に捨置く事ぞ、高は二百貫目入るぞ、それ程手前に有るか無いか、なくば手分けして才覺せよ、銀よ〳〵と氣を焦ちければ、忠六不首尾詫方もなく、長居は恐有りといふて、手ぶりて歸りける、

●小判は寢姿の夢

夢にも身過の事を忘るなと、是長者が言葉なり、思ふ事を必ず夢に見るに、嬉しき事あり、悲き時あり、さま〴〵の中に、銀拾ふ夢は卑しき所あり、今の世に遺する人はなし、それ〴〵に命と思ふて、大事に懸る事ぞかし、如何な〳〵万日廻向の果てたる塲にも、天滿祭の明る日も

錢が一文遺てなし、兎角我働ならでは出る事なし、さる貧者世の稼ぎは外になし、一足飛びに分限になる事を思ひ、此前江戸にありし時、駿河町店に、裸銀山の如くなるを見し事今に忘れず、あはれ今年の暮には其銀の塊欲しや、敷革の上に新小判が、我等が寐姿程有りしと、一心に餘の事なしに紙衾の上に臥しける、比は十二月晦日の曙に、女房は獨り目覺めて、今日の日如何に過難しと、身代の取置を案じ、窓より東の明の映す方見れば、何かは知らず小判一塊、是はしたり〳〵天の與へと嬉しく、此方の人〳〵と呼起しければ、何ぞといふ聲の下より、小判は消えて無かりき、扨も惜やと悔み、男に此事を語れば、我江戸で見し金子欲しや〳〵と思込みし一念、少時小判現れしぞ今の悲さ、ならば假令後世は取外し、奈落へ沈むとも、佐夜の中山にありし、無間の鐘を撞きてなりとも、先此世を助かりたし、目前に福人は極樂、貧者は地獄、釜の下へ燒くものさへあらず、扨も悲しき年の暮やと、我と惡心起れば、魂入替り少し微睡む内に、黒白の鬼車を轟かし、彼世此世の境を見せける、女房此有樣を猶嘆き、我男に敎訓して、世に誰か百まで生る人なし、然れば由無き願する事愚なり、互の心變らずば、行末に目出たく年も取るべし、我手前を思召して、嘸日惜かるべし、されども此儘有りては、三人共に渦命に及べば、一人ある悴が後々の爲にもよし、奉公の口あるこそ幸なれ、何とぞあれを手に懸けて育て給はゝ末の娛み、捨つるは酷い事なれば、偏に賴みますと泪を溢せば、男の身に

しては悲く、左右の言葉も無く目を塞ぎ、女房顔を見ぬ所へ、墨染邊に居る人置の嘆が、六十餘の婆女樣を連立ち來て、昨日も申す通り、此方は乳袋もよいかよつて、がうりに八十五匁、四度の御仕着まで添い事と思はつしやれ、二匁、何事も乳の蔭じやと思はつしやれ、又此方が嫌なれば、京町の上にも見立て置ました、今日の事なれば、又といふ事はならぬといふ、内義機嫌よく、何をいたしますも身を助かる爲でござります、大事の若子樣を預りましても何とござりましよ、私は成程御奉公の望とこいへば、男には物をいはず、少しも早くあなたへと、隣の硯借りて來て、一年の手形を極め、殘らず銀渡して、彼嘆手敏く後といふも同じ事、是は世界が此通りの御定めと、八十五匁數三十七書附のある内、八匁五分りんと取つて、さあ御乳母殿身拵へまでない事と連行く時、男も泪女は赤面して、おまんさらばよ、母は旦那樣へ行て、正月に來て遊ぶぞよといひ捨て、何やら兩隣へ頼みて又泣きける、人置は心強く、親はなけれど子は育つ、打殺しても死なぬものは死ませぬぞ、御亭樣さらばとばかりに出て行く、此神樣世を觀じ、我孫の不憫なも人の子の乳放れしは可愛やと、見返り給へば、それは銀が仇、あの娘は死次第と、其母親が聞くも搆はず連行きける、程なう大晦日の暮方に此男無常起り、我大分の讓物を取りながら、胸算用の悪き故江戸を立退き、伏見の里に住みけるも、女房共が情故ぞかし、大福ばかり祝ふてなりとも、新玉の

春に二人遇ふぞ樂みなれ、志の憐れや、かんばし二膳買置きしが、棚の端に見えけるを取て、一膳はいらぬ正月よと、へし折つて鍋の下へぞ焚きける、夜闇けて此子泣止まねば、隣の嘆達訪寄りて、摺粉に地黄煎入れて焚返し、竹の管にて飲ます事を教え、早や一日の間に思ひなしか顏が痩せたといふ、此男扨も是非なしと心腹立ちて、手に持ちたる火箸を庭へ投げくる、御亭樣はいとしや、御内儀樣は果報、先の旦那殿が奇麗なる女房を使ふ事が好きじや、殊に此内御果てなされた奥樣に似た所がある、本に後附の優しき所が其儘といへば、此男聞もあへず、最前の銀は其儘、それを聞いてからは假令命が果て次第と、駈出し行きて女房取返して、泪で手を執りける、

●神さへ御目違ひ

諸國の神々、毎年十月出雲の大社に集り給ひて、民安全の相談遊ばし、國々への年德の神極め、春の事共を取急ぎ給ふに京江戸大坂三ケの津への年神は、中にも德の備りしを撰み出し、奈良堺へも老功の神達、又長崎大津伏見、それ〳〵に神役分けて、さて一國一城の所、或は船着山市繁昌の里々を見立て、其外都に遙に島住みひさしの一つ家までも、餅搗きて松立つる門に春の到らんといふ事なし、然し年德も上方へは面々に望み、田舎の正月は嫌ひ給ふぞかし、何れ

二つ取には萬に附けて都の事は格別なり、世の月日の暮るゝ事流るゝ水の如し、程なく年波打寄せて極月の末にはなりける、されば泉州の堺は朝夕身の上大事に懸け、胸算用に油斷なく、萬事の商賣内端に構え、表向は格子作りにしまふた屋と見せて、内證は奥深う年中入帳の銀高積りて世帶賄ふ事なり、假令ば娘の子持つては、疱瘡して後形を見極め、十人並に人がましう當世女房に生れ附と思へば、早や三歳五歳より毎年に嫁入衣裳を拵える、又形思はしからぬ娘は、男只は請取らぬ事を分別して、敷銀を心當に利貸商事外にいたし置き、緣附の時分さのみ大義になきやうに、覺悟よろしき仕方なり、是によつて棟に棟次第に建續きて、菩羅葺の屋根も損ねぬ中に差朽したり、柱も朽ぬ時より石で根繼ぎをして、軒の銅樋數年心懸けて、德を見濟していたせし手紬の不斷着、起居忙しからねば此切るゝ事なく、風俗優やかに見えて身の勝手よし、諸道具代々持傳へければ、手忘れの茶の湯振舞ひ、世間へは花奢に聞えて、さのみ物入りにもあらず、年々世渡りを賢うしつけたる所なり、暮しの人さへ斯くあれば、まして身代輕き家々は、算盤枕に寐た間も、伸縮の大節季を忘るゝ事もなく、臺碓の赤米を紅葉の秋と眺め、眼前の櫻鯛は、見たがる京の者に見せよと、毎夜魚荷に上し、客無しには江鮒も土嗅いとて買はぬ所ぞかし、山ばかりの京には眞鰹も喰い、海近き爰には磯物にて埒を明けゝる、惣じての事燈臺元暗し、大晦日夜の景色、大方に店附のよき商人の宿へ、年德の神の役なれば、

案内なしに正月しに這入つて見れば、恵方棚は釣ながら燒火も上げず、何とやら物淋しく、氣味の悪しき内なれども、爰と見立て入りければ、又外の家に行きて相宿も嬉しからず、何と祝ひけるぞと、少時く樣子を見にし、門の戸の鳴る度に、女房びく〳〵して、まだ歸られませぬ、再々足をひかせまして、悲うござるなどと、何れにも同じ斷りいひて歸しける、程なく夜半も過ぎ曙になれば、懸乞們爰に集り、亭主はまだか〳〵と、悔き聲を立つる所へ、丁稚大息吐き聞捨てにして逃げて歸りましたといふ、内義駭き己れ主の殺さるゝに、男と生れて淺間しやと泣出せば、懸乞一人〳〵出て行く、夜は白りと明けける、此女房人歸りし跡にてさのみ歎く景色なし、時に丁稚懐より袋投出し、在鄉も詰りましたといふ、實に手謀する家に使はれければ、内の者までも術同然になりける、亭主は納戸の隅に隠れ居て、因果物語の書物、繰返し〳〵讀續けて、美濃の國不破の宿にて、貧なる浪人の年を取兼ね、妻子刺殺したる所、殊に哀れに悲しく、何れ死もしさうなるものと、我身につまされ、人も知れず泣きけるが、懸乞は皆了簡して去ましたといふ聲に、少し心定まりて、顏ひ〳〵立出で、さて〳〵今日一日に年をよらせしと、悔みて返らぬ事を歎き、餘所には雜煮を祝ふ時分に、米買ひ薪調へ、元日も常の飯焚きて、やう〳〵二日の朝、雜煮して佛へも神へも進

じ、此家の嘉例にて、最早十年ばかりも元日を二日に祝ひます、神の折敷が古くとも堪忍をなされとて、夕餉無しに濟しける、神の眼にも是程の貧家とは知らず、三ケ日のたつ事を待兼、四日に此家を立出て、今宮の恵比須殿へ尋入り、さても〳〵見懸に寄らぬ悲しき宿の正月をいたしたと、憂物語遊ばしければ、此方も年越をしてこしめす程にもない事かな、人の内の見立めしあはせの戸の白からず、内義が下女の機嫌取りて、疊の楾の切れたる家にては、年をとらぬ物でござる、廣い堺中でかゝる貧者は、四五人の所へ、不仕合の神棚、我們は世界の商人が志の酒と掛鯛にて、口を直して出雲へ返らせ給へと、馳走して留めさせられしを、十日ゑびすの朝速く參詣したる人、内陣の御物語を聞いて返りける、神にさへ此の如く貧福の堺あれば、況や人間の身の上、定め難き浮世なれば、定まりし家職に油斷なく、一年に一度の年神に、不自由を見せぬ樣に稼ぐべし、

胸算用卷之三 終

胸算用

卷之四

一　闇の夜の悪口

世にある人の衣くばり
地車に引く隱居銀

二　奈良の庭爐

萬事正月拂ぞよし
山路を越ゆる數の子

三　亭主の入替り

下り舟の乘合噺
分別して、ひとり機嫌

四　長崎の柱餅

禮扇は明る事なし

小店ものは知れた孔雀

胸算用

●闇の夜の惡口

所のならはしとて、關東に定置く大晦日に祭りある、津の國西の宮の居籠、豐前國早鞆の和布刈、又丹波の奥山に緣附をする里あり、昔は年の暮に祭して、急しき片手に香花を調へ、神の折敷と、麻殻の箸と、取交ぜての忙しさに、其頃の賢き人、極樂へ斷りなしに、七月十四日に更えける、今の智惠ならば、春秋の彼岸の中に祭るべし、末々の世まで、何程德の行く事も知難し、大坂生玉の祭、九月九日に定め置かれ、幸ひ家々に膾燒物もする日なり、我人の祝儀なれば、客人とてもあらず、年々に此德積りて、大分の事ぞかし、氏子の耗るを考へ、神も胸算用にて斯くは遊ばし置かれし、又都の祇園殿に、大年の夜、けづりかけの神事とて、諸人詣でける、神前の燈火暗うして、互に人面の見えぬ時、參詣の老若男女左右に立分れ、惡口の樣々いふ中に、それ〳〵腹抱える事なり、おのれ禮するわいやい、おのれは又人賣の請でな、同罪で粟田口へ馬に乘りて行くわいやい、おのれが女房はな、元日に氣が違ふて子を井戸へ嵌め居るぞ、おのれはな、火の車で連れに來てな、

鬼のかうのものになりをるわい、おのれが父は、町の番太をした奴じや、おのれが嘆は、寺の大黒が果てじや、おのれが弟はな、衒云の挟箱持ちじや、おのれが伯母は、墮胎屋をしをるわい、おのれが姉は、襠せずに味噌買ひに行くとて、道で轉びをるわいやい、何れ口宣しう、何や斯や取交ぜていふ事盡きず、中に二十七八なる若い男、人に勝れて口拍子よく、何人出ても いひすくめられ、後には對手になるものなし、時に左の方の松の木の蔭より、其處な男よ、正月布子した者と同じ樣に口を利くな、見れば此寒きに綿入着ずに何を申すぞと、推量にいひけるに、自然と此男が肝にこたへ、返す言葉もなくて、大勢の中へ隱れて、一度にどつと笑はれける、是を思ふに、人の身上に實程恥しきものはなし、兎角大晦日の闇を、足元の明るい中から合點して、稼ぐに追附く貧乏なし、扨も花の都ながら、此金銀は何處へ行きたる事ぞ、年年節分の鬼が取つて返へるものでござろ、殊に我等は近年銀と間違ひして、箱に入りたる顏を見ませぬと、世のすぼりたる物語して、三條通を歸れば、山形に三つ星の紋挑燈六つ點して、車二輛に銀箱を積み、手代らしきもの二人跡につきて、咄して行を聞けば、世界にない〳〵といへど、有る物は金銀じや、此銀子は隱居の祖母への寺參り銀とて、親旦那が分置かれ、明曆元年の四月に藏入れして又取出すは、今晩此銀箱か世間を久しぶりにて見て、氣のつきを晴すべし、思へば此銀は、美しき娘を生れ〳〵出家にしたやうなものじやは、一生人手に渡りて

よい事にも合はず、後は寺の物になる程にと大笑ひして、今日此銀を出す序に、向ひ屋敷の内藏を見れば、寛永年中の書附の箱ばかりも山の如し、一代にあの如く溜る物かよ、物じて世上の分限第一吝き名を取つて、何ぞ一物なうては、富貴にはなり難きに、我等が旦那は萬事大名風にして、一代榮花に暮し、其上此仕合備りし福人、されば今までは、惣領殿に隱居し給へども、二男の家を持たれければ、又氣を變へて、其處への陰居の望み、何事も御心任せにて、霜月始め頃より、萬の道具を運び、今日此銀が打留なり、母家よりわかりて、隱居着の女十一人、猫も七匹乘物に乘りて、人並に越されし、此廿一日に例年の衣配りとて、一門中下人共彼是集めて、男小袖四十八、女小袖五十一、中斷の小袖二十七、合せて百二十六笹屋にて調へ、それ〳〵に給はりける、此小袖代を持てば、商の資本があるぞ、又若旦那よりは、昨日も初芝居がならぬといふて、さる太夫が機嫌を見合せ歎きしに、金子五百兩貸下さるゝ、京の廣い事を知らぬ故、懸乞か百錢を數みける、我々が見て、此方旦那兄弟、金銀手に持たれたる事なし、まして我分限の高を知られず、九人の手代任せなりと語り、續けて、大きなる家作りに入りて、御隱居樣の御銀が參りましたと、內藏に納めける、此家の年男神々へ燈火揚げて後、御銀藏へも燈明と申せば、旦那指して笑ひ、さても初心な年男殿、藏に燈明などゝいふは、僅千貫目の事なり、二十五六も燈明點すかと申されし、扨も大分ある銀と此家を羨しく見る

中に、方々より大分の銀箱廣庭に積重ね、兩替の手代らしき者們手をつかへ、此家の重手代に様々機嫌を取り、何卒此銀子ども御藏へ御納め申たきといへば、例年申渡し御存じの如く、大晦日の七時さがりに候へば、銀子何方から參りても、請取り申さぬと、豫々申渡し置きしに、夜に入りて此端銀、事喧しといひて請取らぬを、色々詫事追從いふて、三口合して六百七十貫め渡して請取り、手形押戴きて立返る、最早御藏はしめけるとて、大釜の後に重ね置きける、此銀は庭にて年をとりける、實に石瓦の如し、

●奈良の庭爐

昔から今に、同じ顔を見るこそ可笑き世の中、此二十四五年事、奈良通ひする肴屋ありけるが、行くたびに只一色に極めて、鮒より外に賣る事なし、後には人も鮒賣の八助とて、見知らぬ人もなく、それ〳〵に商の道附けて、悠りと三人口を過ぎける、されども大晦日に錢五百以つて、終に年をとつたる事なし、口喰ふて一人ある母親の頼まれて、火桶買ふて來るにも、早や間錢取りて只は通さず、まして他人の事には、產婆呼で來てやる烈しき時も、茶漬飯を喰はずには行かぬものなり、如何に欲の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を取るなどは、寔に死かな目くじろの男なり、是程にしても彼

様なれば、天の尤めの道理ぞかし、そも〳〵奈良に通ふ時より、今に鮒の足は、日本國が八本に極まりたるものを、一本づゝ切つて、是七本にして賣れども、誰か是に氣の着かぬ事にて賣りける、其足ばかりを松原の煮賣屋に、定まつて買ふ者あり、さりとは恐しの人心ぞかし、物には七十五度とて、必ず現はるゝ時節あり、過つる年の暮に、足二本づゝ切つて、六本にして忙し紛れに賣りけるに、是も穿鑿する人なく、賣つて通りけるに、手貝の町の中程に、表に菱垣したる内より呼込み、鮒二盃賣つて出る時、法躰したる親仁ちくりと見て、碁を打さして立出で、何とやら裾の枯れたる鮒と、足の足らぬを吟味し出し、是は何處の海より揚る鮒ぞ、足六本づゝは、神代此方何の書にも見えず、不憫や今まで奈良中の者が、一盃欺ふたであろふ、魚屋貌見知つたといへば、此方の様なる大晦日に、碁を打つてゐる所では賣らぬと、謂分して ぞ歸りける、其後誰か沙汰するともなく、世間に知れて、さる程に狹い所は隅から隅まで、足切り八助と謂ふらして、一生の身過の留る事、是おのれが心からなり、されば大年の夜の有様も、京大坂よりは格別靜かにして、萬の買懸りもある程は隨分濟まし、此節季にはならぬと斷りいへば、懸取聞届けて、二度來る事なく、差引四時切に奈良中が仕舞ふて、早や正月の心、家々に庭いろりとて、釜懸けて燒火して、庭に敷物して、其家内旦那も下人も、一つに樂居して、不斷の居間は明置きて、所慣はしとて、輪に入れたる丸餅を、庭火にて燒き喰ふも、賤し

からずふくさなり、扨又都の外の宿の者といふ男們、大乘院御門跡の家來因幡といへる人の許にて、例に任せて祝初め、富々富々といひて、町中を駈廻れば、家毎に餅に錢添へて與らせける、是を思ふに大坂抔にて、厄拂に同じ、漸く夜も明方の元日に、俵迎と賣りけるは、扱に押したる大黒殿なり、二日の曙に惠比須迎とて賣りける、三日の明方に毘沙門迎と賣りける、毎朝三日の間、福の神を賣るぞかし、扱元日の禮儀世間の事は差措きて、先春日大明神へ參詣いたすに、一家一門末々の親類までも、引連れてさゞめきける、何國にても富貴人こそ羨しけれ、商賣の晒布は、年中京都の呉服屋に懸賣りて、代銀は毎年大暮に取集めて、京を大晦日の夜半から我先に仕舞ひ、次第に松明點し連れて南都に入込む、晒布の銀何千貫目といふ限りもなし、已に奈良へ返れば、皆々夜明になれば、金銀藏に打込み置き、正月五日より、互に取遣の差引する事例年なり、此銀荷を心懸けて、大和の片里に忍びて住みける素浪人們、年とり兼ぬる事の悲しさに、命を捨て四人内談して、追剝に出しに、皆三十貫目又は五十貫目の大分にて、望み程の端銀なければ、それかこれかと見合せすれども、終に酒手といひ兼ねて、此道變へてくらがり峠に出で、大坂よりの歸りを待伏せし所に、小男のかたげたる菰包を、心憎し重き物を輕う見せたるは、隱銀に極る所とて、抑へて取つて逃げざれば、此男聲を立てゝ、明日の御用にはとても立つまい〳〵と申す時に、四人して

明けて見れば數の子なり、是は〳〵、

亭主の入替り

年の波伏見の里に打寄せて、水の音さへ忙しき、十二月二十九日の夜の下り舟、旅人常より急ぐ心に乘合せて、やれ出せ〳〵と聲々に喚けば、船頭も春知り貌にて、我も人も今日と明日との日なれば、何がさて如才はござらぬと、艫解きて綱解きて京橋を下げたる、不斷の下り舟には世間の色ばなし、小謠淨瑠璃はや物語、謠に舞に役者の眞似、一人も口叩かぬはなかりしに、今宵に限りて物靜かに、折々思出し念佛、又は長うもない浮世、正月〳〵と待つてから、死ぬるを待つばかりと、世を怨みたる謂分、其外々の人々は寐入りもせず、皆腹立ちさうなる顏色なるに、人の手代らしき男が、おやま茶屋で唄習ひし投節を、息の根の繼く程張揚げて、相の手を口三味線の無拍子に、頭を振廻して面憎し、程なう濱の小橋になれば、大間の行燈目的に、船を艫より逆下りにせし時、分別らしき人目を覺して、あれ〳〵あれを見たが好い、人皆彼水車の如く、晝夜年中油斷なく稼ぎければ、大節季の胸算用違ふ事無きに、不斷は手を遊ばして足元から鳥のたつやうに、ばたくさと働きてから何の効なしと、身獨り智惠有面に謂ひける、船中の人々耳を濟して、是尤と聞きける中に、兵庫の旅籠屋町の者乘合せけるが、只今のお言

葉にて、我等が身の上の事に思ひ當りました、浦住居の徳には、生肴の抓取りの商賣して、世渡り樂々としてから、毎年の御仕舞には少々づゝ足らず、此十四五年も迷惑して、大津に母方の姨ありけるが、僅七十目か八十目か、百目より内の御無心申せしに、年々の事にて姨も退屈いたされて、當暮の合力はならぬといひきられ、置いた物を取つて來るやうなる心當違へば、里に返りてから年のとり樣なしと語る、又一人の男は、さしわたして弟を連れて、此度四條の役者に近附ありて、是を賴にして藝子に出して、前銀借りて、此節季を仕舞ふ心懸けにて上りけるに、思ひの外なる事は、我弟ながら形も人に勝れて、太夫子にもなるべきものと思ひしに、耳少し小いさくて、本子には仕立て難しと請取らねば、是非無く連れて歸る、さて〳〵世間に人もあるものかな、十一二三の若衆下地の小供の、隨分〳〵色品よきを、毎日二十人三十人連來りて、人置が叩くを聞けば、浪人の子もあり、醫者の子もあり、さのみ筋目も賤しからぬ人なれども、今年の暮を仕舞ひかね奉公に出せしに、十年切つて錢一貫から三十目までにて、好なる小供取りける、色の白き事賢き事、上方者にはとても及び難し、使銀を損して歸ると語りける、又一人の男は、親の代より持傳へし、日蓮上人自筆の曼陀羅を、豫々宇治に望みの人ありて、金銀何程なりともと申されしに、其時は賣惜しく、當暮に差詰り、はる〳〵賣拂ひに參りしに、此人如何なる故にや、分別變りて淨土宗になられければ、此名號手にも取られず、思

入違ひまして迷惑いたすなり、外に當所もなければ、宿へ返りてから借錢乞に迫られ、其對手になる事も難しければ、大坂より直ぐに高野參詣の志を、見通しの弘法大師さぞ可笑しかるべし、又一人の男は、春のべの米を京の織物屋仲間へ、毎年の暮に借入れの肝煎して、此間銀を取定まつて、緩々と節季を仕舞ひけるが、一石につき四十五匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め、年々借りけるに、諸職人内談して、一石に十三匁の利銀三ケ月に出す事は、如何にしても酷き仕懸け、年は何樣にもとられ次第、此米借りると謂合せ、折角鳥羽まで積上したる米を、其儘に預けて返るといふ、船中の身の上物語、何れを聞いても思いの無きは一人もなし、此舟の人々我家ありながら、大晦日に内に居らるゝはあるまじ、常とは變り我人忙しき中なれば、人の所へも尋ね難し、晝の中は寺社の繪馬も見て暮らしけるが、夜に入りて行所なし、是に寄つて大分の借錢負ふたる人は、五節季の隱家に、心易き妾を抱へ置きけるといふ、それは手前もふりまはしもなる人の事、貧者のならぬ事ぞかし、宵からに唄機嫌の人、定めて内證ゆるりと仕舞置かれしや、羨しやと尋ねければ、此男大笑して、皆々は大晦日に我人の爲になり、内にある仕出しを未だ御存じなさゝうなにて塒を明けゝる、互に戀なる亭主入替りて留守をいたし、借錢乞の來る時を見合せ、御内儀私の銀は外の買懸りとは違ひました、亭主の腸をくり出して塒を明くるといへば、外の

懸乞們は中々濟まぬ事に思ひ皆返りける、是を大晦日の入替り男とて、近年の仕出しなり、未だ端々には知らぬ事にて、一盃くはせける、

●長崎の柱餅

霜月晦日切に、唐人船殘らず湊を出て行けば、長崎も次第に物淋しくなりぬ、志かし此所の家業は、萬唐物商の時分銀儲けして、年中の貯へ一度に仕舞ひ置き、貧福の人相應に緩々と暮し、萬事細に胸算用をせぬ所なり、大方の買物は當座拂ひにして、物まへの取遣りもやかましき事なし、正月の近づく頃も、酒常住の樂み、此津は身過の易き所なり、師走になりても、人の足音忙しからず、上方の如く節季候も來ねば、只伊勢暦を見て春の近附くを辨へ、古代の掟を守り、極月十三日に極つて煤を拂き、其竹を棟木にからげ、又の年の煤拂きまで置く事、そも〳〵餅は其宗其宗の嘉例に任せて搗きける、殊に可笑しきは柱餅とて、仕舞ひ一臼を大黒柱に打着け置き、正月十五日の左義長の時、是れを炙りて祝ひける、萬に附けて所慣はしの可笑しく、庭に幸木とて横わたしにして、鰤、海鼠、串貝、鴈、鳥、雉子、或は鹽鯛、赤鰯、昆布、太口魚、鰹、牛蒡、大根、三ケ日に使ふ程の料理の物、此木に釣下げて竈を賑はすを、既に大晦日の夜に入らば、物貰ども貌赤くして、土で作りし惠比須大黒荒鹽臺に上せ、當年の

惠方の海より潮が參つたと、家々を祝廻りけるは、船着第一の所故ぞかし、物じて年玉は何國にても輕い事に極りて、男は一匁に五十本づゝの數扇、女は煎茶を少々づゝ紙に包みて輕薄らしき事、此處の總並なれば可笑しからず、兎角住馴れし所都の心ぞかし、されば諸國の商人手廻し早くして、我故郷の正月に逢ふ事を世の樂みとせしに、京の細資本なる糸商賣の人、此二十年も長崎下りして、萬事人に勝れて賢く、京都を出たちくうて旅用意、歩行路船路にて、中々錢一文も外なる事に使はず、長崎に逗留の中、終に丸山の遊女町覗かず、金山が居姿のりこんなやら、花鳥が首筋の白いやら夢にも見ずして、枕に算盤手日記を放たず、何卒して唐人の愚なるを誑し、好き商事もがなと、明暮心に懸れども、今程の唐人は日本の言葉を使覺えければ、格別なる事は唐さへなし、まして日本の智惠袋は世俗に賢く、好い事ばかりはせぬなり、利發にて分限にならば、此男なれども時の運來らず、仕合が手傳はねば是非なし、同じ頃より長崎に下り、同じ商賣する京の人、大分の手前者となり、今は手代を下して、其身は都に安樂にして、しかも物見花見女郎狂ひも相應にして、分限なる人數しらず、是れは如何なる事にて、斯くはなりけるぞと尋ねしに、それは皆商人心といふものなり、仔細は世間を見合せ、來年は必ず騰るべき物を考へ、踏込んで買置きの、思入れ合ふ事より、拍子好く金銀重む事ぞ

かし、爰の二つ物がけせずしては一生變る事なし、此男は長崎の買物京賣の算用して、少しも間違ひなく、後前踏まへて確なる事ばかりに懸れば、算用の外の利を得たる事一年もなくて、皆銀の利にかきあげ、人奉公して氣を凝らしける、毎年大晦日を、橋本旅籠屋に定宿拵へ置き、爰にて年をとるが我等が家の嘉例といふは、大拂ひの借錢濟し棄る故なり、同じくは吉例止めて、京の我宿にて年とる樣にいたしたきものぞかし、此男つら〳〵世を見合せ、尤小前に怪我はなげれども、皆人沙汰せらるゝ通り利を得る事なし、當年は何によらず、我商の外なる事に一思案して、銀儲けせずばあるべからずと、心中極めて長崎に下り、樣々分別せしに、銀で銀儲くる事ばかりにて、只取る樣なるは一つもなし、兎角來春の小芝居、何ぞ變つた見世物もがな、京大坂の細工人も、手を盡して色々仕出し、何か珍らしからねば、唐物にもしもあるべしと、色々穿鑿して、大方の物にては錢は取難しと、吟味するに定まつて、好い物は今まで見せぬ、螭竜の子又火喰鳥など、未だ見せぬ事なし、是は長崎にも稀なれば、自由に手に入難し、密に唐人をかたらひ、何と異國に變りたるものはないかといへば、鳳凰も雷公も聞いたばかりにて見た事なし、兎角伽羅も人參も日本に稀なる物は、唐にも勝れし事に銀大切と思へばこそ、百千万里の風波を凌ぎ、命を銀と替へる商に上りけるにて、世に銀程人の欲しき物はない、合點いたされよと語りける、是尤と思ひ、身の稼ぎに油斷なく、色々の渡鳥調へて都に上

りしに、皆見せて仕舞ひし跡なれば、一つも錢になり難く、人の見馴たる孔雀は又も廢らず、漸く本銀取返しぬ、是を思ふに知れた事がよしとぞ、

胸算用卷之四 終

胸算用

卷之五

一　つまりての夜市

文反古は恥の中々
古に變る人の風俗

二　才覺の軸すだれ

親の眼にはかしこし
江戸廻しの油樽

三　平太郎殿

喧しのお祖母を返せ
一夜にさま〴〵の世の噂

四　長久の江戸棚

きれめの時があきない
春の色めく家並の松

胸算用

●つまりての夜市

萬事の商なりて、世間が詰つたといふは、毎年の事なり、設へば十匁に相場極りて、賣買いたせし物を、九匁八分に賣れば、時の間に千貫目が物も買人あり、又十匁に買へば、即座に二千貫目が物も賣人あり、是を思ふに大場に住める、商人の心だま格別に廣し、賣るも買ふも皆人人胸算用ぞかし、世になき物は銀といふは、好き所を見ぬ故なり、其仔細は諸國ともに三十年此方世界の繁昌、眼に見えて知れたり、藁葺の所は板庇となり、月泄るといへば、不破の關屋も、今は瓦葺に白土の軒も見え、内藏、庭藏、大座敷の襖にも、砂粉は光を嫌ひ、泥引にして墨繪の物好、都に變る所なし、又灘の鹽燒は、黄楊の小櫛もさぞと詠みしに、かゝる浦人も今は小袖好みして、上方に流行るといふ程の事を、聞合せ見覺え、千本松の裾形も古し、當年の仕出しは、夕日笹の模樣とぞ、未だ京大坂にも端々は知らずして、中形の忍小桐の衣裳着る中に、早や田舎に京染は洒落たり、昔模樣の肩先から、染込みの郭公の二字、又は葡萄棚の所々に、蔓葉を茜の染入れ可笑し、見し時は格別ぞかし、何國に居てや、

金銀さへ持ちければ、自由のならぬといふ事なし、無いといふてから、錢が一文置かぬ棚をまぶりてから出所なし、是を思へば年中儉約をすべし、日に一文づゝ煙草にて伸ばしければ、一年に三百六十文、十年に三貫六百なり、此心から算用すれば、茶、薪、味噌、鹽、萬事に何程の貧家にても、一年に三十六匁の違ひあり、十年に三百六十匁、是に利をもりかけて見る時は、三十年に積れば、八貫目あまりの銀高なり、惣じて少しの事とて、不斷道理の事には氣を着けて見るべし、殊に昔より食酒を呑むものは、貧乏の花盛といふ事あり、爰に火吹く力もなき、其日過ぎの釘鍛冶、御火燒に稻荷殿へ進ぜたる、御神酒德利の小いさきに、八文づゝが端酒、日に三度づゝ買はぬといふ事なく、四十五年此方呑暮しける、此酒の高毎日小半合づゝにして、四十石五斗なり、毎日二十四文の錢積り〳〵十二匁、錢にして、銀に直し四貫八百六十目なり、此男下戶ならば、是程に貧はせまじきものと笑ふ人あれば、此鍛冶我家治めたる面貌して、世中に下戶の建てたる藏もなしと、謠ひて又酒をぞ呑みける、既に其年の大晦日に、あらましに正月の用までをして、蓬萊は飾りながら、酒小半合求むる錢なくて、事の足らざる宿淋しく、四十五年此方一日も酒呑まぬ事の無きに、日もこそあれ、元日に酒無くては、年を越したる効はなしなど、夫婦さま〴〵内談するに、酒代の借り所なく、質種もなく、やう〳〵思案廻らして、過つる暑さを凌ぎし編笠、未だ青々とし

て損ねもやらずありけるを、是れ來年の夏までは久しき事なり、寶は身の差合せ、是を賣りて當座の用に立つるより外なしと、既に立去りたる古道具の夜市に紛れて、世間の樣子を見に、大方行處なき借錢負の顏色ぞかし、宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかゝつてふり出しける、今宵になつて賣る程の物、よく〳〵差詰つて皆哀れなり、十二三なる娘の子の、正月布子と見えて、萠黃色に染鹿子の洲崎、裏は薄紅にして、中綿も惜まず入れて、未だ袖口も紐ずして、是を望みはないか〳〵と糶りければ、六匁三分五リンづゝに落ちける、よもや裏ばかりも出來まじ、其次に丹後の細口の鰤を、片身賣りに出しける、是も餘らず二匁二分五リンに賣ける、其跡から二疊釣の蚊帳出して、八匁より二十三匁五分まで糶上しけるに、賣らずして置ける、是は商ならぬ筈なり、蚊帳大晦日まで質に置かひける、其後十枚繼ぎの蠟地の紙に、御免筆の名印まで記したるを賣りけるに、一分からやう五分まで、直段附けゝれば、それは何れも餘りなる事、紙ばかりが三匁が物がござるといへば、如何にも〳〵何も書かずにあれば三匁が紙なり、無用の手本書いて、五分にも高し、設へ如何なる人の筆にもせよ、是を褌といふ手じやといふ、それは如何なる事ぞといへば、今の世に男と生れ、是程かゝぬものはないに因つて、是を襠手とぞ笑ひける、扨又是は割物〳〵と、大事に懸けて出しけるは、南京の刺身皿四十枚、其隔てに入れたる、京大坂の名ある女郎の文

売なり、是はと忙しきに讀みて見るに、皆十二月の文どもは、いとし可愛の思を去つて、近頃申兼候へどもと、無心の文ばかりなり、戀も無常も、銀なくては成難し、此皿の主も、定めて大盡といはれて、此文一つか銀一枚づゝにも當るべし、然れば皿よりは、此反古に大分の價値ありとて、各大笑ひしける、其跡に不動一躰、獨鈷花、さられい錫杖、胡摩檀の仕舞物、さて此不動も、我身上の富貴は、祈られぬ物よと沙汰しける、時に件の編笠出せば、其座に賣主の居るも構はず、哀れや〳〵此笠、幾夏か着る爲とて、古きこかみにて紙袋して入れて、さても儉約な奴が賣物ぞと、三文から振出して十四文に賣つて、何々の誓文庚辛參りに只一度被き、其まゝといひけるも、其身の恥の可笑し、十六文に買つて、其夜の仕舞に、暮歳の禮扇の箱二十五、煙草の入れし箱一つで、二匁七分に買つて歸りしに、煙草箱の下に、小判三兩入置きしは、思ひもよらぬ仕合なり、

●才覺のぢくすだれ

宵の年のせつなき事を忘れ難く、來年からは三ケ日過ぎたらば、四日より商賣に油斷せず、万事を當座拂ひにして、錢のない時は肴も買はぬがよし、諸事を五節句切と、胸算用を極め、借錢乞の怖い心を、直に正月になりける、年今は今までの嘉例を祝ふ替へるとて、十日の帳閉ぢ

を二日に取越し、五日にせし店下しを三日にして、俄に身の取廻し賢く、兎角宿を出るからに、思寄らぬ銀をも使ひ、物見物參りに誘はれ、大事の日空しう暮らす事、無分別と思定めて、商賣の事より外には人と物をも謂はず、毎日心算用して、諸事に附けて、利を得る事の少き世なれば、内證に物のいらざる思案第一と心得て、三月の出替りより飯焚を置かず、女房に前垂させて、我も晝は旦那といはれて店に居て、夜は門の戸をしめ置きて、丁稚が踏み碓を助けてらせ、足も大方は汲たての水で洗ふ程に、氣をつけけれども、これかやあをち貧乏といふなるべし、又それ程に商事なくて、いよ〳〵日向に氷の如し、何としても一升入柄杓へは、一升より這入らずと、昔の人の申傳へし、されは熊野比丘尼が、身の一大事の地獄極樂の繪圖を拜ませ、又は息の根の繼く程、流り唄を唱ひ、勸進をすれども、腰にさしたる一升柄杓に、一盃は貰ひ兼ねける、さる程に同じ後世にも、諸人の志大きに違ひある事かな、冬年南都大佛建立の爲とて、龍松院立出で玉ひ、勤を脩業に廻らせられ、信心なき人は進め給はず、無言にて廻り給ひ、我志あるばかりを、請給ふも、一升柄杓なるに、一歩に一貫、十歩に十貫、或は金銀を投入れ、釋迦も錢程光らせ給ふ、今佛法の晝ぞかし、是は格別の寄進とて、八宗共に奉加の志、殊勝さ限りなかりき、既に町放れの小家勝ちなる所までも、長者の万貫貧者の一文、是も積れば一本十二貫目の丸柱ともなる事ぞかし、是思ふに世はそれ〳〵に氣を附けて、少しの

事にても貯へをすべし、分限になりける者は其生質格別なり、或人の息子、九歳より十二の年の暮まで、手習に遣はしけるに、其間の筆の軸を集め、其外人の捨てたるをも取集めて、程なく十三の春、我手細工にして軸簾を拵え、一つを一匁五分づゝの、三つまで賣拂ひ、始めて銀四匁五分儲けし事、我ながら只者にあらずと、親の身にしては嬉れしさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事を好とは譽め給はずたして見及びしに、其方の一子の如く、氣の働き過ぎたる小供の、末に分限に世を暮したる例なし、又乞食する程の身代にもならぬもの、中分より下の渡世をするものなり、かゝる事には様々の仔細ある事なり、其方の子ばかりを賢き様に思召すな、それよりは手廻しの賢き小供あり、我當番の日はいふに及ばず、人の番の日も請取々座敷掃きて、數多の小供が毎日使ひ捨てたる、反古の圓ろめたるを、一枚々々皺伸ばして、日毎に屏風屋へ賣りて歸るもあり、是は筆の軸を籠の思附よりは、當分の用に立つ事ながら、是もよろしからず、又或子は紙の餘計持參りて、紙使過して不自由なる小供に、一日一倍増の利にて是を貸し、年中に積りての德何程といふ限りもなし、是等は皆それ〳〵の親の、世智賢き氣を見習ひ、自然と出る己れ〳〵が智惠にあらず、其中にも一人の子は、父母の朝夕仰られしは、外の事なく手習を精に入れよ、成人しての其身の爲になる事との言葉、反古にはなし難しと、旦暮讀書に油斷なく、後には兄弟子

ども勝れて能書になりぬ、此心からは行末分限になり、惣じて親より仕繼きたる家職の外に、商賣變へて仕繼きたるは稀なり、手習小供も己れが役目の、手書く事は外になし、若年の時よりするどく無用の欲心なり、それ故第一の手は書かざる事淺間し、其子なれども、左樣の心入好き事とはいひ難し、兎角少年の時は、花をむしり紙鳶を上し、智惠附く時に身を持固めたるこそ道の常なれ、七十になるものゝ申せし事、行末を見給へといひ置かれし、師の坊の言葉に違はず、此者們我世を渡る時節になつて、樣々に稼ぐ程成下りて、軸簾せしものは、冬日和の道の爲に、草履の裏に木を附けて、履く事仕出しけれども、是も繼きて世に流らず、又紙屑集めし者は、ちやん塗の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり、又手習ばかりに精を入れたるものは、物毎踈く見えけるが、自然と大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中に氷らぬ事を分別仕出し、樽に胡椒一粒づゝ入れる事にて、大分利を得て年をとりけるに、同じ思ひ附きにて油土器と油樽と、人の智惠程違ふたるものはなし、

●平太郎殿

古人も世帶佛法と申されし事、今以て其通りなり、毎年節分の夜は、門徒寺に定まつて、平太郎

殿の事讃談せらるゝなり、聞くたびに變らぬ事ながら、殊勝なる義なれば、老若男女ともに參詣多し、一年大晦日に節分ありて、懸乞尼拂ひ、天秤の響き、大豆うつ音、まことに暗がりに鬼繋ぐとは、今宵なるべし怖ろし、さて道場には太皷おとづれて、佛前に御燈光上げて、參詣の同行を見合せけるに、初夜の鐘を撞くまでに、やう〳〵參詣三人ならではなかりし、亭坊勤行過ぎて、少時く世間の事どもを考へ、されば今晩一年中の定めなる故、それ〴〵に暇なく、參詣の衆もないと見えました、然れども子孫に世を渡し、隙の明きたるお祖母達は、今日とても何の用あるまじ、佛の御迎ひ船が來たらば、それに乘るまいといふ事は謂はれまじ、愚なる人心不憫やな淺間しやな、さりながら只三人に聞かせまして、さんだんするも益なし、如何に佛の事にても、爰が胸算用で御座る、中々燈明の油錢もござらねば、切角口を叩いても世の耗なり、面々に賽錢取返して、下向して給はれ、皆世渡りの事どもにからまされ、參詣もなき所に、各奇特千萬爰を以て心信、如來も忙しき中に足を運び給ふを、損にはせさせ給はぬなり、金の大帳に附け置かせられて、未來にて屹度算用し給ふなれば、必ず〳〵捨てたると思召な、佛は慈悲第一、少しも僞はござらぬ、賴もしう思召せ、時に一人の老婆泪を溢し、只今の難有い事を承りまして、さても〳〵我心底の恥かしうござります、今夜の事信心にて參りました、ではござらぬ、一人ある悴めが、常々身過に油斷いたしまして、借錢に乞たてられまして、節

季々々に様々作り事申して遁れましたが、此節季の身ぬけ何とも分別能はず、私には道場へ參れ、其跡にて見えぬと歎き出し、近所の衆を賴み、太皷鉦を叩き尋ね、是にて夜を明かして濟ますべし、古い事ながら、大晦日の夜の御祖母を返せは、我等が仕出しと思案して、世の不祥なればとて、邊の衆に思はぬ厄介かくる事、是大なる罪とぞ歎きける、又一人は生國は伊勢の者なるが、人の緣程知れぬものはなし、爰許に親類とてもなきに、大坂旦那廻りの太夫殿に雇はれ、荷持をいたせし時、此所の繁昌見まして何をしたればとて、二人三人の口を喰ふ事心易き所と見立て、幸大和通ひして小間物商ふ人の死跡に、二つになる男の子あつて、連ましければ、共過ぎにして世を渡り、行末は其子めにかゝる事を賴母しく思ひ、入聟して未だ半年もたゝぬに、道を知らぬ通ひ商に、少しの錢も皆無になし、極月始め頃より、何がなと渡世し按ずる中に、女は子を愛して、我も耳がある程に、人のいふ事をよく聞け、小男でも元の父樣は利發にあつたと思へ、女の手業の飯まで焚きて、女房は宵から寐させ置いて、我は夜明方まで草鞋を作り、我は着ずに、女房小供には正月布子を拵え、此黄柄茶の着物も其時の名殘じやぞ、何に附けても馴染程好き者はなし、元の父樣戀しやと、なけ〳〵といふ時は、さりとては入聟口惜しく、勘忍ならぬ所なれども、是非なく日を重ね、我故郷に少し貸置きたる銀子もあれば、是を取集めて此節季仕舞ひと、遙々下りける効もなく、其者們は皆所を去れば、

徒手にてやう〳〵今日の夕餉前に宿へ返りしに、何とか才覺いたしける、餅も搗き薪も買ひ、神の御敷に山草の色めきければ、世は歎くまじ、又引上ぐる神もありて、留守の中に手廻しよく、内證仕舞ひ置きけると嬉れしく、無事で歸りたるといへば、女房も何時よりは機嫌好くして、先足の湯を取りもあへず、鰯鱠を片皿に、赤鰯の燒物にて膳据えける程に、箸取つて喰懸る時、伊勢の銀どもは取つてござつたかといふ、不仕合いふを聞きもあへず、其方は徒手でよううも〳〵戻られた事じや、此米は一斗を二月の晦日切に約束して、我等が身を手形に書入て、九十五匁の算用にして借りましたよ、世間は四十目の米喰う時、九十五匁の米を喰ふ事、そなたの鈍なる故にかゝる仕合、持つてござつたものは揮一筋、何も損の參らぬ事、夜に入らば暗うなります、足元の明い中に出てござれと、喰懸つた膳を取つて追出す時、近所の者們集て、是は御亭樣の迷惑ながら、入聟の不勝に出ていなしやるが男の本意じや、又よい所もござろと、口々に追出しければ、餘り悲しくて泣れもせず、明日は國元に歸る分別いたしましたが、今夜一夜の明かし所なく、我等は法華宗なれども是へ參りましたと、身の纖悔する事哀れにも又可笑、又一人の男は大笑ひして、我身の事はとかう申難し、宿にゐますれば、方々より生けて置かぬ身なり、何人へ申して錢十文借り所はなし、酒は呑みたし身は寒むし、色々無分別年を越すべき才覺なし、近頃の淺間しき思ひ附ながら、今宵は道塲に平太郎殿の讃談參詣群衆すべし、其

草履雪踏を盜取つて、酒の代にせんと心懸しに、爰に限らず何方の道塲にも人切なく、佛の目を抜く事もなり難しと、身の上を語りて泪を溢しける、亭坊も横手を打つて、さても〳〵身の貧からは、樣々惡心も起るものぞかし、各も皆佛躰なれども、是非もなき浮世ぞと、つら〳〵人界を觀じ給ふ中に、女けはしく走來て、姪御樣只今安々と、御平產遊ばしました、御知らせ申しますといふ、程なく其跡より、箱屋の九藏、今の先に懸乞と謂分いたされまして、首締めて死れましてござる、夜半過に葬禮いたしまする、御苦勞ながら野墓へ御出で賴みますといふて來る、取交ぜて喧しき中に、仕立物屋より縫ひに下されました、白小袖をちよりと盜まれました、穿鑿いたしまして出ませずば、銀子立てまして、御損は懸けますまいと斷り申しに來る、東隣から御無心なれども、今晩俄に井戸が潰れました、正月五ヶ日水が曜ひましたいと申來る、其跡から一旦那の一人子、金銀を使ひ過し、首尾散々にて立退く所を、母親の才覺にて御坊樣へ、正月四日まで預けに遣はしける、是も嫌とはいはれず、浮世に住むから、師走坊主も暇のない事ぞかし、

●長久の江戸店

天下泰平、國土萬人、江戸商を心懸け、其道々の店出して、諸國より荷物、船路陸着の馬方、

毎日數万駄の問屋繼き、爰を見れば世界は金銀澤山なるものなるに、是を儲くる才覺のならぬは、諸商人に生れて口惜しき事ぞかし、さる程に十二月十五日より、通町の繁昌、世に寶の市とは爰の事なるべし、常の賣物店は捨置いて、正月の景色、京羽子板、玉ぶり〳〵、細工に金銀を鏤め、破魔弓一挺を、小判二兩などにも買ふ人ありけるは、諸大名の子息に限らず、町人までも萬に大氣なる故ぞかし、町筋に中店を出して、商に暇なく錢は水の如く流れ、白銀は雪の如し、富士の山影豊かに、日本橋の人足、百千万の車の轟くに聞きなしたり、船町の魚市、毎朝の賣帳、四方の海ながら、浦々に鱗の種もある事よと沙汰し侍る、神田須田町の八百屋物、毎日の大根、里馬に附け繼きて數万駄見えけるは、兎角島の歩くが如し、盤切に移並べたる蕃椒は、秋深き龍田山を、武藏野に見るに似たり、瀬戸物町、麹町の雁鬼、さながら雲の黒きを地に生へたるが如し、本町の呉服物、五色の京染、屋敷模様の散し形、四季一度に眺め姿の花の色香ぞかし、傳馬町の積綿、三吉野の雪の曙の山々、夕には挑燈連り、道明かに、大晦日の夜に入りて、一夜千金家々の大商ひ、殊に足袋、雪踏は、諸職人万事買物の納めにして、夜の明方に調えに來たり、一年江戸中の店に、雪踏が一足、足袋が片足ない事あり、幾万人履けばとて、かゝる事は日本第一、人の集り所なればなり、宵の程は一足七八分の雪踏、夜半過には一夕二三分となり、夜明方には一足二夕五分になれども、買人ばかりにして賣る者なし、一年

懸小鯛二枚十八夕づゝせし事もあり、橙一つ金子二歩せしに、高うて買はぬといふ事なし、京大坂にては、相場違ひの物は、設へ祝儀の物にしてから、中々調ふべき人心にはあらず、爰を以て大名氣とはいへり、京大坂に住み馴れて、心の小いさきものも、其氣になつて錢を算むといふ事なし、小判を厘秤にて懸る事なし、輕きを取れば又其まゝに先へ渡し、世は廻り持の寶なれば、一人として吟味する事にはあらず、十七八日までに、上方へ銀飛脚の宿を見しに、大分の金銀色も變らず、上りては下り、一年に道中を幾度か、金銀程世に辛勞いたす物は外になし、是程世界に多き物なれども、小判一兩持たずに江戸にも年をとる者あり、されば歳暮御使者として、大刀目錄、御小袖、樽、肴、箱入の蠟燭、何を見ても萬代の春めきて、町並の門松、是ぞ千歳山の山口、尚常磐橋の朝日影、豊かに靜かに万民の身に照添ひ、曇らぬ春にあへり、

胸算用巻之五 終

本朝櫻陰比事（元祿二年板）

巻之一

一　春のはじめの松葉山
二　曇は晴るゝ影法師
三　御耳に立つは同一言葉
四　太皷の中は知らぬが因果
五　人の名を呼ぶ妙薬

神鳴落ちて地かたまり
昔の緣者知るゝ事
年齡はよれども夜の淋しさ
念佛ばかりも申されぬ事
血で血を洗ふ所川
牛より劣りの系圖の事
懸ながら無き賴母子の宿
夫婦中荷ひ棒の事
身にあまつて金持あり
それゆゑ命を捨つる事

淡島氏所藏

六　孖は他人のはじまり　願ひにあまるものたね
七　命は九分目の酒　法花信心深き事
八　紀念の造り小袖　腹中はからくり人形屋
　　浮世の糸切果つる事
　　東山の花談義聞くほど
　　後家は殊勝なる心底の事

本朝櫻陰比事

●春のはじめの松葉山

それ大唐の花は甘棠の蔭に召伯遊んで詩をうたへり、和朝の花は櫻の樹蔭豊に歌を吟じ、此時なるかな御代の山も動かず、四ッの海原不断の小波静に、王城の水清く流の末の久しき一人の翁あつて、百餘歳になるまで家に杖つく事も無く、善悪二ッの耳賢く聞傳へたる物語、今の世の慰草ともなりて、心の風に亂れたる棘も薄も、眞直に分れる道の道筋の廣き事、筆の林にもなか〳〵書盡きずして殘しぬ、昔都の町に高家の御吉例を勤むる年男あつて、毎年十二月二十一日に定めて丹波堺なる里の山入して、御飾の松を伐りける、此山の東の麓に里あり、西の麓にも里あり、此兩所の入組の山にして年々庄屋出合ひ山境の爭ひ傳へ、此山は我が支配の所といふ、又一方の庄屋も巻物を出しけるに、双方一字一點違ひ無くなほ此事濟み難し、扨又高根の景地に大同年中の建立といひ傳へて、楠木作に一間四面の觀音堂あつて、内陣の扉は昔日より釘付にして、本尊拝みたる例無し、つひに燈明の影もせず參詣の人も無く、柴男の休所となつて御佛前は木の葉に埋も

れおはしける、此堂の事第一あらそひ訴狀差上げ山公事に取結びぬ、時に兩里の庄屋を京都に召され、同一記錄を持傳へし事仔細あるべし、此卷物に觀音堂事は何とも記し置かざり、記錄は大同より後の年號なり、秘佛と謂へば誰か拜せし人もあるまじ、然れども我々どもは樣子を知るべし、何觀音の尊像なるぞ兩方より申出づへし、いひあてし方の堂に申付くべきとの御意なれば、こゝぞ思案大事の所なり、一方よりは清水寺の御同躰千手觀音と申上ぐる、又一人は暫時頬支えして分別極め如意輪觀音と申上ぐる、兩方極めさせての後、丹波に御役人を遣はされ、彼の堂の扉を引開けしに、格別なる事にて各々横手を拍ちける、凄じき雷の形を八方へ鐵の鎖を懸けて縛め、目をとめて見るも身のふるべき事なり、京都に皈りてこのありさまを言上申すに、さのみ不思議にも思召されず、洛中の佛師を殘らず召寄せられ、もし此雷の像を刻みたる事を聞傳へたる細工人は無きかと御尋の時、其頃五條の大佛師法橋民部といふもの、六代の先祖これを作りたる家業の卷物差上げしに、後小松院應永元年霜月十八日の夜大雪降つて、雷鳴出し其數知れず落懸つて、諸木を碎き里の屋を破り人の命を取る事男女に二十四人、萬民の歎きなる時、北國方より眞言の旅僧來つて、これを封籠められし後此山里に虫出しの雷さへ音なく、之を歎び其像を造つて此所久しかれと祝ひ籠め、兩里よりこれを崇め雨乞の願をせしに叶はざるといふ事なし、其事里人末になつてとめうし候と存じたてまつり候、私先祖

これを造りし證據には則ち岩座の中に、書付殘し候と此卷物に見え候段言上申せば、臺座を撿めさせ御覽ありしに一ッの折紙あつて、佛師が申せしとほり少しも差はず、願主は兩里の庄屋なり、其頃は聟舅のなかなる事知れ來れり、扨は記錄一方より書寫して遣はしけると見えたり、昔日緣者なれば今以て外の義にあらず、自今以後は申合はせて此堂を限つて東西の山を守るべし、松は先例にまかせ、一方の山にて十二本宛伐つて、十二門の松をたてまつるべしと仰付けさせられ、永代變らぬ松葉山、千代に八千代と祝ひ納めけるなり、

●曇は晴るゝ影法師

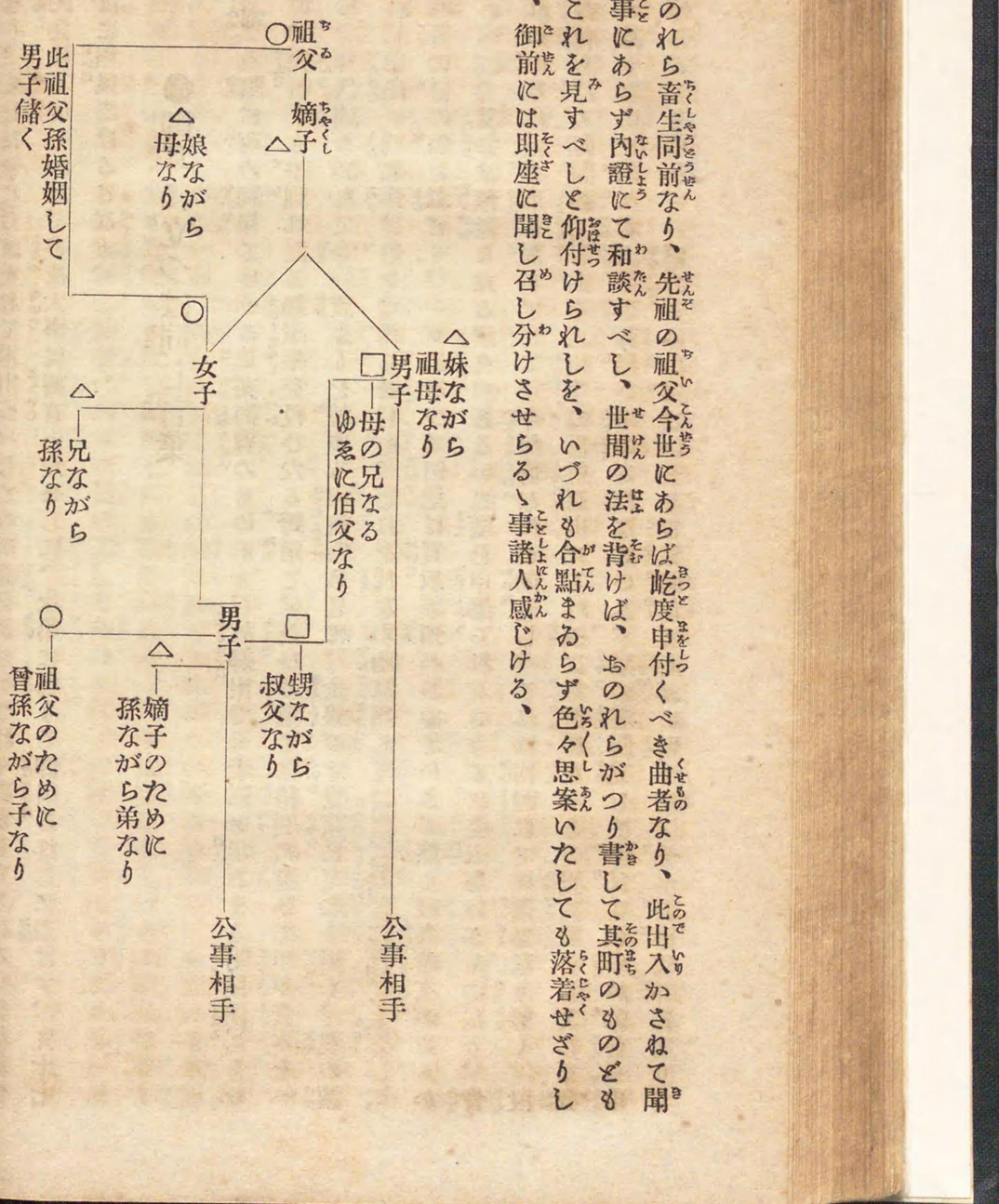
昔都の町に夏を棟として、軒に木曾山を引請けし材木の問屋あり、嫩より家業に賢く松は千年藏とて、鳥の孫曾孫まで坐喰にしても、此貯蓄盡くる世あらじ、亭主は八十歳餘まで一子に財寶も渡さず、大暮の勘定を喜こび、頭は霜をけづり、額に不斷の涙立ち腰は反橋の如く、渡りかねざる世界をさりとは無用の勤、今にも死なれたらば火車の摑物と、人の取沙汰やう〳〵耳に入りてお八ッの太皷に驚き、俄の御堂參詣の暮れて後世を急がるゝと人皆また笑ひけるが、悪き事にあらねばいつとなく佛心發りて、其後は常精進になつて、以前に變る事天地なり、乾坤の箱入にして千貫目、萬事息子に渡して樂隱居を岡崎に見立て、作事は手のものゝ嵯峨丸

太輕い取置の窓蓋、明れば諸山を見渡し、老後の思出こゝに極め、疾く捨てぬ世を今は殘念なり、然も連合は二十ケ年前に離れ、一人法師になつても心懸は無かりき、息子は有德なれば自由に孝を盡し、毎日世の初物を運ばせ、殊更お茶のかよひの爲にやさかたなる女四五人附置きしに、寢室のあげおろしも人の手には懸け給はず、墨衣を着ぬばかりの出家氣質になり給へば、召使の者どもおのづから信心の發し年經るうちに、下女の中にも其容見苦しき庭働の女腹形をかしげになれるを、人々咎めて笑ひけるに旦那のお名を立てけるは、大方ならぬいたづらものとこれを憎みて、此事親父樣に申せば、夢にも覺えの無き事とて、下女は此内を追出され小宿にて產を致せしに然も男の子なり、隨分大事にかけて守育て、母子の忌明けて此息子を親方の許へ渡しけるに、これを取合へる人も無く、是非に及ばず悲哀さのあまり、子を抱きながら御前に走込み右の段申上ぐれば、親仁を召出だされ種々御詮議遊ばしけるに、少しも身の上に覺えなきよし申上ぐる、然らば明十四日の朝兩方ともに出づべきとの御意、いづれも早天より相詰めける、時に仰出だされしは唐土にも斯る例あり、八十餘歳になりける人の兒は日影に映して其影無し、面影映らば親仁が兒に紛れなしと仰せられ、白洲立たせて旭日に映しけるに、此兒が影法師見えざり、今は親仁陳じ難く、私世間を耻入り包み申候へども、なるほど拙者の悴覺えござ候と申上ぐる、時に母親末々願ひ申上ぐれば、其子必ず百日は活きざるものなり、もし長命ならば重ねて申出づべしとの御意を請けいづれも御前を立ちける、其後親仁も此兒に不便をかけ、晝夜大事に養育いたせしに、次第に弱りて仰出されしに差はず、九十七日目に相果てけるとなり、

●御耳に立つは同じ言葉

昔都の町に西の岡屋といへる葉茶商賣のものあり、故郷出でゝ十三ケ年あまり町屋住居をせしが、先祖より手馴れたる鋤鍬牛を役ひたる野道と、商ひの道とは格別に違ひて年々資本をへらし、身代續きかねて今一度ふりを替ゆる相談極めしに、金銀の才覺京にてなり難く、親の讓られし田畠一門に預け置きて作らせしが、これを代なす胸算用して、里の親類に仔細を語れば、慾の事に目の無い者ども、一ツになつて田地は買取り預からぬといふ、然らば其證文があるかといへば、其方は預置きたる證文があるかと横を申懸られ、さりとは盜人といふものなり、皆遁れぬ中なれば手形も取らずして、今後悔なれど効無し、これは內證にては堪忍なり難く、段書付を以て御訴訟申上ぐ、相手の百姓召出だされ既に裁許に及べり、里人聲かしましく我儘いふうちに、伯父者人手形も無い事申され上げらるゝものかと、兩方より伯父といへる言葉御前の御耳に留りて、先づ公事は外になりて

おのれら畜生同前なり、先祖の祖父今世にあらば屹度申付くべき曲者なり、此出入かさねて聞く事にあらず内證にて和談すべし、世間の法を背けば、おのれらがつり書して其町のものどもにこれを見すべしと仰付けられしを、いづれも合點まゐらず色々思案いたしても落着せざりしを、御前には即座に聞し召し分けさせらるゝ事諸人感じける、



●太鼓の中は知らぬが因果

昔都の町西陣に織絹屋門を並べ、これを渡世として今日を暮せる中に、家職人に勝れながら内證差詰り、年久しく住馴れし所を立退くに夫婦相談を極め、諸道具忍び〳〵に賣拂ふを聞付け、豫て念頃せし職人仲間十人申合せ、此亭主は身過に油斷なく萬事律義に搆へ、然も佛神を信心深く、一つとして悪事無く、人の爲にもなれる男にていづれもこれを惜み、是非に今一度身代取持つべしと内證聞けば、僅少四貫目に足らざる借錢、これにて數年の老舗を廢むる事あるべきか、人の身の上には斯る事のある習ひなり、我々万事請合ふ上は春の事どもも調へ、嬉しがる子どもに餅花を見せ、下々の仕着は紋無しの淺黄にして今からもなる事なり、お内儀こんな時が大事なり、髪頭も取上げ落目を人に見せぬが女房のたしなみ、鯰は三本まで手前にあればこれを一本越すべし、我人いそがはしき十二月二十六日の夜に入り、申刻はせし十人一人に金子拾兩づゝ持參して、頼母子と名付け合力に致し一升桝に一人々々投入れ、合せて百兩の小判近年のうちに千兩になるべしと、中にも分別らしき男これを恵比須棚に上置き、隣の大黒殿も來年からは小槌の續くほどは打出し給へ、さもなくば紙屋川へ流しますと大笑ひして、其後は酒になしていづれも機嫌なれば亭主も喜び、これは珍らしき年忘れと一つ呑む人皆目の下戸

までも、我を覺えぬほどの酔の紛れに順の舞の盡し何をいふにも前後知らず千秋樂に草履穿替へ、羽織を殘し扇を遺失し禮儀なしに立歸る時は、七つの鐘撞き鷄も鳴きて亭主は宵よりの氣あつかひ、皿箱枕にして臥しければ、女房戸鎖を閉めて、常よりも用心して下々を寐させて心嬉しさのあまり男を起し、大方に拂ひ算用をして見給へと、大帳十露盤をあてがへば主人目覺して、此節季には借錢乞等めを秤で面撲はすべし、殊に米屋の八右衞門は緣者の端なるに外よりせはしく乞立てし、さらりと濟ましてて棚より桝を下ろせば中に小判は無かりきもしは神隱しかと惠比須棚を幾度か見るに、いよ〳〵無いに極りなか〳〵はじめ今の悲しさ增り、とかくは我等が因果なるべし、盜みし人も恨むまじと思ひ斷れども口惜く、なまなか合力請けて結句身の難儀となれり、世間の取沙汰もいかゞなればながらへて何の詮無し、いざ子どもを刺殺し果てむといへば、女房も取亂ださずいかにも生きたる効はなし、死姿は人の見るぞとたしなみ一つある白小袖に身をなし、扨鏡に向ひ不斷よりは髮頭美はしく、男の鬢撫付けて誠に十九年の馴染此曙の夢かと涙に眼も眩み、持佛堂に灯あげて、二人の子どもを靜に引起せば今日は餅花をする日かといへば、又弟は破魔弓の事現にも忘れもやらず、さりとは不便に思はれし時、久しく召使の女此首尾を聞付けて起合せ、仔細も聞かず泣出だして御夫婦はと

もあれ、未だ辨別も無き子達の命を取らせ給ふは、いかなる事ぞと歎きて、何とぞ御分別のあるべき所、此お二人は私の手に懸けて育てますと、大聲上ぐるにぞ皆々起騷ぎて、とかういふ間に夜も明けて自然自害も留りぬ、此事最前二三人聞付け、衆中へ知らせて又十人寄合ひ僉議するに、何とも合點のゆかぬ事是なり、合力するほどのいづれもなればこれを奪るべき事にあらず、といふてから此盜人は外に無し、面々の身晴に神文鐵火といふ人あり、中にも一分別ある人其分にては濟難し、とかくは御前へ言上申し御沙汰次第と相談極め、右の段々書付を以て御訴訟聞召し分けさせられ、年内餘日も無く皆々渡世の障なるべし、正月二十五日に穿鑿すべし、其内一人も他國仕るなと仰渡され罷歸りぬ、春になりて右十人の者ども妻召連れて御前に出つべし、もし女の無き者は姉妹に限らず、或ひは姪姨にても女を一人同道申して出づべきとの上意、迷惑ながら御白洲に罷出づれば、一二の鬮取合つて番付を書付け、大きなる唐太皷に棒を通し、夫婦づゝに差荷はせ御館を離れ、遙西に當つて宮の松原を廻らせ、これを諸見物近く寄る事堅く御法度なり、賴母子の金子見えざる科代とて、一日に一組宛十日が間に此事畢りぬ、洛中の萬人見聞して、これは格別なる御科代と、いづれも不思議を立てける、されば此太皷の中に發明なる小坊主を入置かれし事誰か存じたる者なし、毎日事御尋ねありしに、いづれも女は歎く中に八日めにかたげまはりし女房勝れて我男を恨み、金子合力しながら諸人に

面を曝させ、斯る迷惑之は何の因果ぞといふ時、男低語きてこれは少しの内の難儀、生金百兩唯奪る事がと申せし事申上ぐる、其者召出だされ強き御僉議に顯れ、右の小判を取返され、彼者に下され、難有き仕合なり、其後仰出だされしは盜人ながら一旦合力の衆中なれば、命は助けて都の内を乃ちこれより拂へとの御意にて夫婦を東西に追失ひけるとなり、

人の名を呼ぶ妙藥

昔都の町に佐渡の島國より渡りて、住居を五條鹽竈町に定め、物淋しきを態と好みて、然も借宅して、故郷より召連れたる男一人、これに臺所を預け、年中徒居して銀八百目にて萬事をまかはるゝ身代、これほど輕い浮世の樂人我なり、今年五十に餘れば長生してから今二十年、心に懸る親も無く行末おもふ一子も無く、木から落ちたる猿ほどに賴少し、佐渡より金子二千五百兩持參せしが、今の算用なれば二百年の貯蓄あり、餘に榮花仕やうも知らねば、明暮札錢出して芝居見るより外は無く、未だ遊山の同道も無く半年餘も暮して、京とてもさのみおもしろからぬやうに想ひぬ、其相借屋にこれも獨居して日を送れる男あり、何商賣とも定め無く、洛中の分限なる人の息子達の機嫌を取り、世を夢の如く渡りて、夜を晝になし世界の圖外れなる者、都なればこそ人もこれを見許しける、我竈は稀にも燒きたる事無く、火の用心ばかりは

憂慮無し、其外は何とも見えぬ男なり、いつの頃か隣に金子のある事を見出だし、さま〴〵にして取入り心を許させ懇になる時、六條の遊女町に誘ひ行きて歷々衆に引合はせ、太夫衒りの遊興の後此田舍人大分金持と語り聞かせける、利銀は月七割にても先づ借り度がる若い者五人內談して無心を申懸れば、此男即座に合點して手前に在合はすこそ幸ひなれ、利銀に及ばず御一人に五百兩宛五人に二千五百兩、ありきり出だし預け手形を請取り其上に申渡しけるは、此金子は我一代の渡世の爲なれば、一歲の入用ほど五人の方よりまはり番にして返したまへ、其內に相果てたらば誰に讓る方も無ければ、跡の義吊ひたまはれと少しも殘らぬ心底、天から降つたやうなる金の貸手、各々當坐の喜び末に濟ますまじき覺悟の一人も無かりき、田舍人も宿に置きての憂慮絕えて、其後はいづれもと參會して先に一夜を明かせし事もあり、折ふしは霜月中頃殊更冴え渡りぬる夜遊興に、彼の相借屋の機嫌取る男其一座にありしが、豫て惡心をたくみ此田舍者さへ殺せば、預金はいつれもの德になれば、五人の手前より大分取るべしと無用の慾心發りて、其人に毒酒を拵へ醉のまぎれに一杯のませける、其座は何の事も無く私宅に歸りて惱みぬ、惣身動かずして口籠り眼ばかりうろ〳〵と見廻はしければ、下人驚き未だ呼吸の通ふうちに罷出で段々言上申し、五人の手形を御前へ差上げ夜前の一座も此衆中と申上ぐる、其五人他の同座せしものまでも殘らず召出だされ御詮議さま〴〵なれども、本人夢中なればい

づれを指して御吟味なり難し、少時御思案遊ばされ、御手前醫者仰付けられ、斯る時申傳へし妙藥を世のためしに呑ませ見よとの御意にて俄に拵へける、故き皷の破革を黒燒にして彼の病人に與へ給へば腹中に入ると、毒を飲ませし相手の名を自然に呼ぶといふ事、唐土の醫書にあるゆゑ、今此不思議を見るなり、大事の聞きものぞと仰出だされし時、これはと驚ものあり、また何をかと疑ふものもあり、名々心々に耳を澄ましけるに、まばらくあつて病人唇に動ありて、咽内にてそれが名を指して太皷の茂六々々といふ事あり〳〵と聞こえ、いづれも奇異の思ひをなしける、此者を搦めて御穿鑿に悪事顯れ御仕置に逢ひけるとなり、

●孖は他人のはじまり

昔都の町に一子相傳の妙藥、神教萬病圓と看板出して賣藥あり、これ洛中の外近在まで廣まりて、此家四條通に隱無し、此人五十餘歳まで家繼の無き事を悔みしに、本妻の懐胎を喜こびしに、此亭主相果てられ、三十五日の歎のうちに平産いたせしに、これ常に變りて孖、然も二人ともに男子なり、父の無ければひとしほ不便に想はれ、面々に乳母取りて此子どもを育てさせ、名も梅松竹松と呼びて十三になりける、夏の頃又此母親頓死いたされ、定めなき世と殊に悲しきは、跡を見立つる一門も無く、唯二人の乳母どもも名々に抱守いたせし子に、此あとしき

を望み、惣領末子の論をする事止み難く、町中の意見をも肯入れずして、兩方より同一願訴訟をあげ〳〵る、時に此家久しき手代外に書附を言上申すは、此家二ッになされ候へば一子相傳の名方の分る事、家財よりは歎かはしく存じたてまつり候と御願を申上ぐるは、いづれにても一人に家を繼せ一人は相應の敷銀を付け他家へ遣はし申度き所存、道理に聞こし召し分けられ、京都に名高きちゝみかしといふ取揚婆を召され、孖の事前後出生の中にいづれか惣領に立ちけるぞと御尋ねなされしに、古例にて後より誕生仕るを惣領に立て申候、此仔細は胎内にて母、に取付き緣の深きゆゑなり、先に生れ候は其子が後に乳房も其あまりを吹ふがゆゑに、五躰も少しは大小ござ候と審に申上ぐる、此婆が申通り後産の竹松を惣領と仰出だされしに、梅松が乳母合點いたしかね親母心ありて名をば梅松とは呼び申候、これ花の兄には極り申候、とかくは此身代ふたつに甲乙無く仰分けられ下し給はゞ、有難く存じたてまつるの願言上申す、御前には手代が申分至極に思召せども、これの愚痴と御容赦遊ばし、然らば諸事眞二ッに分取らすべし、先づ宗門を御尋ね遊ばされしに、此家代々日蓮宗にて召使はれの下々までも同一宗旨の由申上ぐる、然らば持佛堂を開き高祖の御影取つて參れとの御意に隨せ、佛を御前に差上げし時、諸道具を兩に分くるはじめに、兩人の乳母どもが手に懸けて此佛をまふたつに割りて重ねて罷出づべしと公事を殘して御飯し遊ばされしに、いかにしても後生を頼みし佛を碎く事は

と兩人ともに身震ひし、町の人のいへる事を一圓肯入れざりし女どもおのづからじゆんじゆくして、無用の爭訟も悔みいづれもを賴みて千代が願の竹松に家を繼せ、梅松は弟に定め歷々に仕分くる內談を極め、此段御訴訟上申ぐれば御心入とほりなれば其通りに仰付けさせられ無事相濟みけるとなり、

●命は九分目の酒

昔都の寺町通に十分盃を和朝にしはじめて工夫の細工人あり、唐土の偃師が繰にも劣るまじきものといへり、朝暮此器物をつもる毎に大酒に溺れ、これより長病になりて相果し後に、男子二人十八十五になりぬ、百ケ日の精進あがりて後町中立合ひ見るに書置とても無し、金銀諸道具あるものを撿め大方世間の法に沙汰して、兄に六分弟に四分といひわたし母親の義兩人として孝を盡し給へといへば、弟いづれもの差圖承引致さず、家屋敷に限らず萬事を半分取るべしといふ、それでは兄の効なしとてさまざまいづれも、段々御聞屆け遊ばされ、町の者が差圖道理に存ずるなり、其方等分に取るべき仔細あらば申せと仰せられし時、私事末子ながら總領なるべき義はお恥かしながらこれなる母親は、蕾父の召使のものなりしが懷胎して兄をよろこびしより、諸親類取持ち本妻に直されて後、私を

平產いたされ候事紛れなく候、然れば末子ながら筋目格別存じたてまつり候、跡をも繼ぎ申すべき事ぞざ候、かやうの義御武家にも先例の多き御事と申上ぐる、あの者申す所も一通は聞えしなり、其屋敷は此母下女の時より持傳へたるか、又近年に求めけるかと御尋ねなされし、なるほど下女の時分よりの家屋敷と町中口を揃へ申上ぐる、然らば弟が願の諸色二ツにして渡し、家の義は物領に名跡を襲せ、母は此家にて痩ひ申せと仰せける、

●紀念の作り小袖

昔都の町に和漢の繊絹の商賣して、其身利發にて一代の分限二千貫目を貯へ、家の榮へる世盛に此亭主四十二にして相果てける、今年二歲の娘に財寶殘らずこれを讓りぬ、此母親三十三にて後家を立て髮を切り捨て浮世を恐るゝ形となり、一人子の成人を願ひ後夫を求むる望絕えて佛道に立入り、其後家職を廢めて諸事親類の差圖に任せ、金銀は兩替に預置き世帶は人寡少にして男女七八人召使ひ何の不足も無かりきり、ある時東山の花談義に一家殘らず參詣すれば、門の戸外より閉めて留主無しに出行き、其暮方に歸りしに奧座敷に人影見えければ、皆々驚き晝盜人よと聲々に取廻し片偶に追込み捕へ見しに、南隣の一子未だ十七になる角前髮の若者なり、出合ひし町衆も手首尾惡く何卒沙汰なしにと談合すれば、此息子格別に進みて我爰に忍ぶ事後

家合點と謂へば、さてはと各々疑懸りて此義何とも言葉無し、後家泪を溢してさりとは〳〵毛頭覺えも無き難儀を申懸けられて口惜し自分が子というても恥かしからず、我不義いたさば世間に知らせず相手あり、此事に於ては身を八裂に逢ひても詮議遂けずには惜くまじ、女も女によるべしと一筋に胸を定め、人の意見も更に肯入れずして御前へ駈込み、右の段々御訴訟申せば其男を召されて、後家と密通ならば文通の證據を出すべし、女の筆跡無きに於ては盜人の沙汰免るゝ所なしと仰せられければ、互に忍ぶ事にござ候へば、其毎々に火中いたし候よし申上ぐる、其分にては科を免れじ、其他何のまるしも無きかと重ねて御尋ねありし時、男暫時思案して肌着の淺黄小袖に三ツ蝶の紋所附きしを、恐れながら脫懸けて御目に懸け、これはあの後家の襯衣にてござ候が、風の吹く夜の剋に着せて歸し候、これより他には挿櫛香包など呉れられ候、かやうの事なるに盜人の沙汰は是非も無き仕合と泪眼になつて申上ぐる、其風俗見させられしに衣裳の樣子定紋まで變る所無し、あの小袖は後家が取らしたかと仰せられし時、此女房少しの内ものを申さゝりしが、世の外聞想はれ隨分包み候へども、斯く露はるゝは大方なら ぬ因果と存じ候、いかにもあの若年ものと密通仕候と申上ぐる、然れば何の仔細も無し、家無用の言譯にあまたに難儀を懸くる曲者なれどもこれ女なり、罷立てと御意ありし時、此男首下げ今少し言上申度御事、後家密通と申上げらるゝにつき、密通にてござなく候、みな私が悪

事を工み申候、此義は若氣にて由無き事に親の金銀大分に遣捨て候を、此ほど吟味いたし勘當仕られ候を、やう〳〵一門中詫言にて相濟み、それより内證嚴しく致され、次第に不自由に罷成り、隣の有德なるを豫て存じふと出來心にて盜に入り候、此小袖も手前にて拵置き自然穿鑿の時、身を免るゝ言譯のためばかりに、これほどまで工み私悪人に相極り候と心底ありのまゝに申上ぐる、此段御前に聞し召し分けられ、先づ後家が志我身を捨て世の聞を憚はず、密通にして人の命を助くる事、都廣けれども又あるまじき女と此慈悲心を深く感じさせ給ひ、これらは女の鑑ならば少しも曇らぬ心入、自今はいよ〳〵諸親類後見を仕るべし、又男の段は悪事かさなり此度仕置者なれども、後家が志を恥ぢて助かる命を捨てゝ即座に相手の難を申譯いたせし事、若年者には神妙に思召され、これによつて極命の所御赦免なし下され京都を御拂ひ遊ばされけるとなり、

本朝櫻陰比事卷之一　終

本朝櫻陰比事

卷之二

一　十夜の半弓　黒谷の麓掘出してこれ
二　兼平の謡過　再び死人の顔見る事
三　佛の夢は五十日　利に暗き者どもは一つ松の月にも迷ふ事
四　恨み千萬近所の緣附　家主の寐所は極樂鍬に金色の光さす事
五　俄大工は都の費　暇遣つて悔きは小袖箱女の情は世にある時の事
　　鋸引戻されて無分別賣家はりの價になる事

六　鯛鮹鱸釣目安

七　聾も爰は聞所

八　死人は目前の劔の山

九　京に隠れなき女去

今時の世間寺畫の衣
夜は長羽織に替る事
親の知れぬひとり子
ものいはぬ石佛が知らす事
扨もはや桶を取出だし
刃物は振袖に包む事
我を知らぬ浮世の中
女の利發用に立たぬ事

本朝櫻陰比事

●十夜の半弓

昔都の町に時花念佛、嵯峨の安樂坊とて聲細長う節を附けて、常とは格別世界の人心後生の益となりぬ、折ふし十夜なれば僧俗ともに扣鉦明方まで響渡り、眼にも見えぬ極樂を願ひ無用の念佛講を結び、其曉の雲東山に晴れて松原通の門並に店戸を開くれば、年の頃四十二三の男左の手に淨土珠數を懸けながら、胴骨矢の根を通され死顏みしる人あつて、これは大佛の前なる煙管屋といふにぞ、急ぎ其許へ人遣はしけるに、女房驚き駈來つて歎く事淺からず、夜前に宵に宿を立出で因幡藥師の邊へ念佛講に參られしが、これはいかなる因果ぞと彼の同行衆へ行きて此事を語りけるに、講中の各々皆老人といひ、殊更後世の緣を結ばれし人なれば、此男の夭死を惜み其人に我々が後の義を賴みしにと、俄に御明をあげて香花を取給へば、此人々を疑ふ事無く、奉行所に罷出で御訴訟を申下げしに、さま〴〵御僉議遊ばされ日頃心懸なるものは無きかと御尋ねありし時、女房思付き以前別して懇なる方二人ござ候が、此四五年不間に罷成候人の名を指しける、其二人御前に召出だされ、此參會仕らぬ仔細を聞かせられしに、一

人は鞠の友にて互に藝を勵み、相も劣らぬほとに仕つるうちに、私はお家に立入り紫腰を御免下されしを、彼男これを猜み其後鞠を蹴留り自然出合も絶え候と申上ぐる、又一人は六條の遊女町にて花月と申す女郎を二人して之を買論仕り候が、當座の事にて少しも意恨に存ぜず年月罷過ぎ候、今に其女勤いたし罷在候、これを召寄せられ御聞き遊ばされ下さるべしと申上ぐる、此兩人命を取るべきほどの事にもあらずと聞召し分けさせられ、彼男と語り合ひしなかなれば、斯る身の果を我々も外のやうにも想ふまじ、豫ての好誼に吊料として銀一貫目宛、女房に合力仕れと仰出だされける時、一人はお請申し又一人はなり難きよし申上ぐる、其仔細を御尋ねなされしに、私は内證かつ〳〵にて手前の暮しさへ迷惑仕るのよし言上申す、今一人は早速合力仕るべきと申所を御疑ひあつて、此義御穿鑿ありしに私は身代宜しく、銀貨を渡世に仕る事町内洛中にも隱れござなく候、銀一貫目など香奠に仕りても苦しからぬ御事、御意なれば御請申せしと申上ぐる、兩方の言分段々道理至極に聞召し分させられ、別條なく相濟み是等は宿に皈りぬ、其後女房に仰渡されしは此上に何とも僉議なり難し、とかくは時節の最後と斷念め、死骸は鳥部野に送り夫の敵は其矢なれば、死人と一つの壺に入れて埋むべし、後家は子も無きものならば百ケ日過ぎて勝手次第に後夫を求むべくと仰付けられ、いづれも御前を罷立ち其通りに其年も過ぎぬ、明る春になつて世間も闇き夜半過に、彼男射殺されし松原通の

其町に女の聲忙く人の門々を叩起し、やれ盜賊よ出合へ〳〵といふに驚き、手毎に棒乳切木を閃かして立出づる中に、半弓取持ちいかつがましく駈出づる者ありしを軒蔭より隱密役人取巻き此男に繩を懸け、仔細は奉行所へ參れと引立られ、町中殘らず相詰めける、時に仰出だされしは夜前の女は去年汝等が町にて殺されし男の妻なるが、存ずる思案あつて態と是より夜中には遣はしける、然る所におのれ町人に似合はざる飛道具持出づる事理無し、此言譯ありやと仰出だされしに、此男少しも動顛いたさず此半弓は親代より家にあるにまかせ、枕許近く懸置き候處に盜人よといふ聲寐耳に入り、何の心もござなく持出で候と申上ぐる、申せば然もあるべし然らば最前の矢に此矢を比べ見るべしとの御意に隨せ、土葬の壺を掘出だし見合けるに、右の矢に違ふ所無し、いかなる意恨あつて斯くは殺しけるぞと御尋ねありし時、此男兇るべき所無く私近年弓の稽古を仕り、的中こまかに罷成り狐猫などを射留め候事度々にてござ候、これに依つて人間を射て見申度き出來心にて、何の事も無く夜更けて通行候者を幸ひに射懸け候と段々はじめを申上ぐる、町人無用の武道具を持扱ひ然も人の一命を斷つ事、廣き都にまたあるまじき曲者と御沙汰極まりて、其弓矢を高札に懸けて御仕置にあひけるとなり、

●兼平の謠過

昔都の町に沙汰しけるは、勝公事になるべきを無用の言葉質を取られて、即座に負になりける、江州志賀の浦一つ松の蔭に小さき宮の立たせ給ふこれ山王の末社とて、古代より叡山のさばきなりしが、近年は祭の他に參詣ありて、散錢箱の重きより人皆慾に迷ふ世の中、滋賀の里人内談して所にありける神社を比叡法師の自由に致させるゆゑなし、自今は此里のものになすべしと俄に虎落を頼み、此事京都の奉行所の御評定となりぬ、何とて先年より叡山持の宮所を、今度更めての申分其仔細はと仰られし時、里人に口賢きもの罷出で、世々の本歌にも志賀唐崎の一ッ松といふ事傳へも聞かず候、此松陰に祝ひはじめし社なれば志賀唐崎の宮居に極り申候と言上、これをも一通り聞こえて諸法師の方には古例の正きをもつて、此返答を申すうちに里人の何某なほ〳〵進みて其外兼平の謡にも小浪や志賀唐崎の一ッ松と謡ひ候と申上ぐる時、當話のよき法師罷出で、あの者は隠れも無き音曲の藝者にござ候、唯今の謡の末を是非に御所望遊ばされ下され候へと申上ぐる、御奉行早くも御合點遊ばされ小皷を召され、爰はそれがしが一挺皷にてならずして御白洲に畏り小浪や志賀唐崎の一をうちすてさせられ、然らば山王の影向の松なりと同一謡にて叡山の勝になり、山法師聲を揃へて今の謡の拍子いや〳〵と御前を譽めて立ちける、

●佛の夢は五十日

昔都の町に不思議の夢を見し人あり、世渡りは時計の細工人、此鐘の音に浮世の睡を覺まし明暮後の世を一大事と願へば、異名を釋迦右衞門といへり、自然と縮頭にて其形殊勝なり、年久しく烏丸の下に借宅して住みぬ、其家主は一向宗にて隠れも無き精進嫌ひ、霜月二十八日も搆はず杉焼のまはり振舞して町衆四五人參會の折ふし、借屋の釋迦右衞門腰を屈め、私めいよの夢を夜前まで五十日續けて見えさせ給ふ、御託宣あり〳〵とさながら夢とは思はれず候、御長九寸ばかりの金佛こなたの御寢間の下なる土中に埋もれましまします、これ弘法大師の御作なるが、我等が枕許に金色の光をさし給ひ、汝佛緣の深きものなれば後世のために掘出すべし、然らば衆生救ひ諸々の難病を助けむの御事、これ萬人の慈悲なり、番匠人足の入用は此方より仕るべし、今日掘らせて賜はれと申せば、此家主佛とも法ともわきまへなく手を拍つて笑ひ、世の中の夢といふものがあへる事ならば、其夢を判金千枚ばかりにして掘りたきものといふ、此座に分別顔なる人ありて、これを聞きながらせらるゝならば掘らせて見たまへといふ、時に亭主も同心して俄に諸道具を取直し、板敷を打はづし鋤鍬を鳴らし其日の暮方までに五尺たらずほりぬれども、佛らしきものは見えずして口

欠の茶壺または消炭螺殻より他は何も無かりき、興覚めて舊の如くに埋めける、はじめから斯くあるべき事なりと亭主は腹立、借屋の者は何とも言葉無くて歸りぬ、又翌の日家主へいひけるは、夜前またまさしく幻に拜まれさせ給ひ、今二三寸下の辰巳の偶にありけるを今少しの事に出現せざるは念なし、是非に掘出せとの御願ひなれば、とてもの事に御掘せ賜はれと望み、今一度穿りて見しに御託宣に違はず佛像顯はれ給へば、各々難有く拜し先づ水に灌ぎて見しに、底光の躰いかさまにも古佛と見えさせ給へば、家主欲心發りて此本尊我等がものといふ、借屋の者は此事合點せず、萬事入用を此方から拂ひぬる上は私の佛といふ、いかにも掘りたき大願なれば其段は此方も同心なり、然れども佛を其方のものする約束は致さずと言分募つて、既に御前の沙汰になりはじめは聞かせられ、其佛に兩人の封印を致させ三日預り給ひ、洛中の佛具師を召寄せられ、此金佛年數何程か埋もれしものぞと御尋ね遊ばされしに、いづれも吟味の上に申上ぐるは、凡そ五七年も土中にありしものと申上ぐる、其の後彼者どもを召されて其の町のものに仰せられしは、此の家普請は何ほどになるやと御尋ねありしに、四十年餘に罷り成り候よしを申しあぐる、時に釋迦右衞門を召され、おのれ世間へは後世願ひと見せ懸け心中は淺ましき曲者なり、此のこと豫ねて工み前日ほる時本尊を埋め置き、翌の日それを顯はし京都の風聞致させ、いづれの賣僧とか馴合ひて散錢取込むべき仕懸疑無し、ありのまゝに白狀申すべし、此時偽るに於てはさま〴〵穿鑿の仕やうありと仰出だされし時、釋迦右衞門驚き貧より惡事を企み申すよし心底殘さず申上ぐる、おのれ世の費男殊に佛の眼を抜く事かれこれ以て惡人なり、屹度仕置に申付くべきものなれども、未だ他の者を誑らかさゞれば命は助け置なり、此過怠に其佛を鍬の柄に附けてかたげさせ、右の次第を札に記し洛中三日が間廻らせて後生盜人の顔を諸人に見知らせ、其後京都を追拂ふべし、また家主の義は無用の爭訟仕る事これ惡人近し、これに依つて袴肩衣を着し高札を持つて釋迦右衞門同事に廻るべきを仰付けられけるとなり、

●恨千萬近所へ緣附

昔都の町に鹿子屋女の名取、大宮の小林とてさながら六條の太夫めきて扮裝姿にこがれなきをさせけるが、此女情心は離れて慾に目の見えぬ浪人を男に持ちける、仔細は此人其以前歷々にて一生の暮しほどは貯蓄あつて、娛樂を京住居と思定めて東寺の片蔭に借座敷、心まかせに月日を重ねしうちに、或人の物語に彼の女の美麗しき事を傳へ聞きて金銀にてなる事ならばと賴みしに、小林合點して夫婦の契をなしぬ、五三年は萬あるにまかせて美食衣裳を飾りしが、此女日夜の驕奢ゆゑ幾なく內證薄くなつて、目の淺ましき男につらく當りて暇取るべき仕懸の

折ふし、近所に若盛の浪人の友ありけるが、然も手前よろしく暮しける、女此男に心を移し忍び〳〵縁の約束して、其後は作病發して、暇の狀を催促して代筆に書かせて、其身を自由にして未だ十日も經たぬうちに、彼男の方へ伸人無しに行きて世間を憚る事も無し、他の身でさへ此女を憎めば、況てやはじめの男の身にしては堪忍のならぬ所打果すほどにも思立ちしが、暇遣りての事なれば死後にも世の沙汰になり行く事を口惜くそれなりけりに濟ましぬ、これさへ無念の折から一夜門の戸に張紙して、此浪人此町に置かるゝに於ては、いつによらず町中を斬立て一人も命の種あるべからずと書記せり、時に此浪人申せしは我事は身に懸る事難儀も苦しからず、いかなる意恨とも覺えはござなく候へども、各々に配慮懸るも迷惑なれば、とかくはこゝを立退けば濟む事といふ、いづれも此浪人を憐み此義は沙汰なしに談合して、今までの通りに其まゝ所に居らるゝやうに申渡せば、御心入の段は身に餘つて忝なし、然れども侍の心に懸る事此まゝには置かれじ、何卒町中に別條無きやうにと存じ、右の段々御前へ申上げしに、其方何にても思當るものは無きかと御尋ねのありし時、他には心懸もござなく候、私此ほどまでの妻女豫ては存じもあらざる病氣と申出し俄に暇を乞懸り候、これまでの縁と存じ願の通りに取らせ候處に、それより九日目に近所へ縁に付き候、此男右より別して語り候が其後は參りかね候、これより他は何にてもござなく候段申上ぐる、樣子聞召され其夫婦召寄せられ、此

義は密通に極まる女は大悪人なり、又男も日頃語合ひし中此度の縁組、譬へ仔細無くとも世の義理想はゝ取結ぶまじき道なり、男の手に罷在る時より馴逢ひたるには紛無し、ありのまゝ申さぬに於ては拷問と女に仰出だされし時、これなる人に狀文付けられ斯く罷成り候と申上る、おのれ世の仕置者なれども一旦暇の狀を取りての上なれば、命は赦して女は鼻を殺ぎ男は髻を拂ひ京都に置くまじと仰付けさせられ、其後此浪人を近う召され此度の張紙は穿議の種に其方が建てしと見えたり、斯うなうてはならぬ處と御褒美難有く、御見通しの御眼力を感じけるとなり、

●俄大工は都の費

昔都の町を清水の西門より見れば民家建續きて果も無く、諸木茂りて三階藏の白壁夕陽映ろい、皆内證はともあれ藏は長者の花といへり、次第に下京までも繁昌して野末も今は人家となりぬ、其頃七條通に米商賣して萬事に手廣く近年に分限其町のひとりなり、母屋は以前のまゝにして裏に屋敷を何程か建出し、後には空地も無く隣町の境目に火の用心のために三間に五間の二階藏を普請して、窓には銅の火蓋はりがねの網を張り、軒に金樋までも懸けて物の見事に仕舞ひしに、隣町の家主よりきつと使者を立てけるは、此方の地の上へ藏二尺四五寸も出過ぎ

候やうに相見え候、自由御普請を附届けに驚き町並を見合せば、三尺ばかり建出すに紛なし、いづれも寄合ひ沙汰するに今の亭主が横道にはあらず、これ親仁の慾心と死れし人を誹譏ぬ、其頃までは此邊の裏は野畠にして堺目の吟味も無く、生垣を人の地まで仕出されしなり、此度檢めずして藏を立つる事町中までも落度なりと、隣町各々を賴み詫言いたしけるは、あの藏修理の時分に罷成り候はゞ更め込引ますべし、其内地入用の義出來候はゞ何時によらず相渡させ申すべし、こなたにも當分は畠にいたし置かるゝ事なれば、一年に銀五十目宛地賃出させ申すべし、とさま〴〵あつかひけれどもなか〳〵堪忍致さず、永々の地盜人此度世の見せしめになすべしと、有德なる身代を見懸け大分金銀取るべき覺悟にてむつかしく懸れば、いよ〳〵難儀に思ひ銀二貫目にいろ〳〵詫びても肯かざれば、是非なく打捨て置きしに言懸りて止め難く、右の段々繪圖に造りて御前へ申上ぐれば兩方召出だされ、作事仕る方を曲者と仰され、仕置にも申付くべきものなれども、親が仕業用ゐ何心も無く普請仕るよし先町人の不念もあり、譽へ地尻田畠にても其屋敷ばかり町並外れて出づべき仔細無し、今日の中に高繩引きて其藏を切入べし、相手の申所道理なり、ほこりの義は是非無しあの者がつくりもの些少も損ねざるやうに仕れと仰付けられ、俄に大工日用を數百人雇ひ二時ばかりに打毀ち、軒端を世間より内端に切入るさりとは物哀に亭主が惜むべき心底思遣られ、これを見る人泪を溢し堪忍せざる相手を深

く憎みぬ、其後藏引込ましたる段々御前へ申上ぐれば、此度萬事入用の勘定を仕立て參れとの仰せ、帳面造つて銀高八百七十四匁二分と申上ぐる、時に此いりめ唯今請取り藏切りたるものに相渡すべし御意、さしあたつて迷惑仕る段申上ぐれば、おのれ都の費といふ惡人なり、仔細は此普請地築石垣の時も見え渡る事を、から木だて時も謂はずして屋根を葺上げ塗までも志ましき曲者なり、手前に銀子用意無くば家屋敷賣拂へはせ、間も無くこれを毀たす事またあるまじき曲者なり、手前に銀子用意無くば家屋敷賣拂へと仰出だされ、其日入札にして一貫二百目に賣立て、此内八百七十四匁二分相渡し、殘る三百餘も町内の借銀に引取られ、やう〳〵殘る銀七匁三分數四ッ女房が珠數袋に入れて、久しく住馴れし町内を立退きけるとなり、

●鯛鮹鱸釣目安

昔都の町を春は櫻鯛、秋は紅葉鮹とて魚賣の利發者にしきの棚に住みけるが、近年の賣懸累なり身代續かざる事を迷惑して、釣目安を調へて銀高ばかり書付け、相手の名も無く三十八所として御番所の御門に張付け置きしに、役人衆これを取つて御前へ此段申上ぐれば、表書の通り相違無きに於ては相濟まし申さるべしと御裏判出だされ、又門柱に張付置かれしに則ち其夜に取りて歸り、それより十日ばかり過ぎてから御威光を以て、賣懸殘らず請取り難有く存じた

てまつり候と添書して御判を返進申上げゝる、諸役人これを不思議に存じられ、御機嫌の時分御尋ね申上ぐれば、此目安は寺々への賣懸なり、今時の世間寺皆醒き坊主と御笑ひ遊ばされけるとなり、

●聾も爰は聞所

昔都の町はづれ北野の片蔭に、質酒兩店の商賣して俄分限のものあり、家榮ゆるに從ひ召役もあまたある中に、物縫に置きし女風俗花車に育ちしが、いつの頃よりか青梅を好み次第に懷胎疑無し、內儀聆味仕出して男はいかなるぞとさま〴〵に問給へども、色深く秘して申さぬ事を憎み、とかく家の不作法者とて其まゝ暇出して親の許へ返されける、それより半年餘も過ぎて此亭主暈眩心になつて打臥しけるを、皆々聲立てゝ呼べど早呼吸絕えて詮無し、未だ一子も無くて跡に殘れる內儀別して歎き深し、然も此人は生國出羽の人にて京には親類も無かりき、やう〳〵女房衆の一門集りて野邊にいたる用意する時、彼の物縫の女乳呑兒を抱きて走り來り、此あとよりは此男なり、旦那の御手懸けられて平產せし事紛れ無し、此首尾手代頭の何某も能く存じられしと、無常の中ともいはず喚く時、手代罷出で此方は夢にも知らぬ事と申せば、此程も旦那殿より此兒の養育銀を持つて參らぬかといふ、我等は其方が親許さへ知らすといへば、

此女手代にむがみ付き、いかに東西辨別無き兒なれどもおのれが親方筋なるに、內證知りながら今また知らぬとは天の咎もあるべし、顏色變へて泣懸れば、白衣は脫げて烏帽子は落ちて葬禮扮裝の男をつかみさがし、死人押へての難儀愁傷の中の訴訟事、右の段々御前へ申上しに、手代を召されあの悴は主人が子にてあるか僞なく申せと御僉議の時、旦那の義ながら內證の事は存ぜず候、彼の女の親許藤の森へ親方申付けられ、每月三十日に銀子五十めほどづゝ持ちて參り候より外の子細は存じ奉らず候と申上ぐる、何の義も無く每月銀子遣はす理なし、本妻穿鑿の時主人の義なれば名を秘して、我ばかりの科になりて里に返るといふも一通り聞えたり、これは死人が兒にして其名跡を襲せ、それが母は乳母分になり我子ながら主侍遇してこれを守育つべし、後家は其子が母になつて勝手次第に末々樂隱居仕るべし、金銀財寶は一門町中として每年勘定聞取らせ、手代に商賣の義相撫かせ、十五歲に罷成る時之を相渡すべし、萬事は後家が心隨せに仕るべし、其日あの悴に付き疑はしき親など相知るゝに於ては、何時にても後家申出づべし急ぎ死人を取置けと仰付けさせられ、其子跡取の禮義にして野部の送をまひける、つれあひの別れ悲しき中にも後家は下女が子の事疑ひけるは、年月二人が中に子の無き事を歎き、夫婦合點づくにて幾人か色好き妾を置かれしに、是等にもつひに願の愒はざりし、幸ひ斯くある事も秘したまふゆゑなしと、これよりいよ〳〵心解けずしていつとなく作り聾になつ

て浮世を隙になして佛棚の勤ばかりに月日をかさね、隨分人の氣の附かざるやうに仕懸けて、幾なく其年も暮れて明れば春の彼岸に當たり、亡き人の祥月とて、一家殘らず壇那寺へ參詣、香花を手向き石塔に立寄り皆々拜し奉る時、後家は一しほ昔を思出でゝ、袖行く水は暫時干難く、彼子が手を取りて我阿爺樣は此石にならせ給ふなり、よく〳〵水參らせよとありし時、子が母、親心をかしく眞の阿爺樣は鼻の前に堅縞の羽織着て未だ此世に達者でござるに、かな聾に何をいふぞと謂へど手代と顏を見合せける、御家これを聞濟まして宿に歸り明の日早く御前へ罷出で、私財寶さら〳〵望ござなく候へども、血統なき者を家繼に仕る事草葉の蔭なる連合の所存彼是口惜く存じたてまつる段々申上ぐれば、悴が母手代を召して既に裁許になつて、それなる女何とて手代を其親とは申しけるぞ、今日石塔の前にて確に聞屆けての申分と御尋ねなされし時、手代も女も口を揃へこれは何をか聞かれてあとかたも無き僞を申上げられ候、これは一門中の內談にて私に難儀申懸け、親類よりあとつぎを立て金銀自由いたすべき願と存じられ候、其仔細は後家事去年四五月の頃よりふつうに耳聞こえず、幾藥か與へ因幡と鮹藥師へ土器の千枚も懸けたてまつる効も無く、諸事筆談申す事家內町中にも其隱れござなく候、耳が俄に聞こえ候か御僉議と申上ぐる、時に後家打笑ひいかにしても兩人が心底合點參らず、由無き罪を造り聾仕つると去年よりの事ども一つ〳〵申上ぐれば、手代も女も赤面してとかうの返答もな

かり、いよ〳〵手代が悴に紛れなき御僉儀とげられ、二人ともに御仕置に仰出だされし時、後家夫の供養に命の義は願ひたてまつる、手代が義は御兒ならず、女は御助け下され、五條の橋にて頭に摺鉢を被がせ兩の手に火吹竹杓子を持たせ、下女に紛れなき態をいたさせ、主人條無き事を申懸けし科人三日曝されし、其悴は女の親に下され末々出家になすべしと仰渡されけるとなり、

●死人は目前の劍の山

昔都の町に其身一代後世の事を忘れ、金銀の溜るを喜び家榮へる時、此人慾心より銀子貸したる人に無理を申懸けしに、相手も短き者にて一つ二つ言分の上に切伏せ我も即座に相果てける、日頃の心入を知りて天命の盡とて、沐浴して三つ鐘を聞けば心細く煙になして歸りぬ、其子は親と格別佛の道を願ひ、殊更此度の別れ浮世と思定め、末々は出家にもなりぬべき志、此母親は當座に髮おろし每日香花を取つて歎に沈み四十九日に當る時、三十ばかりの旅僧來つて其家名を尋ね、潛に內に入り越中の立山よりものを事托てられしと、死人の事をあり〳〵と語り、此脇差をしるべに我を吊ふべし、年月貯蓄へし金銀後の世の障となれば殘らずこれを施すべし、今の悲しさ以前の慾心後悔なり、何卒佛緣

の願なりとさま〴〵哀れなる物語に、いづれも魂消ゆるばかりの想をなし、とかく御出家樣をこゝに引留め都の庵を取立て亡人の爲に萬日を申すべし、死人願ひの如く金銀此度殘さじと、親子の人思定め旅僧いろ〳〵賴めば、爰に止まる事大方に合點して、今日は先づ黒谷へ參詣と出行きし後にて、此事町衆聞付け其脇差は亭主最期の時、御前へ御目に懸けて棺に入れて送りしもの再び返るは不思議なり、これを此まゝは置かれじと此段御前へ申上ぐれば、御聞屆け遊ばされ、亭主相果てし後下人下女によらず暇取らせしものは無きかと御尋ね遊ばしける、三十五日過ぎて幸ひ世間の出代り時に罷成り、勝手も人寡少に仕るべき覺悟、六尺一人腰元役の女一人暇を出し候、六尺は奉公をとまりすなはち同町借宅仕り罷在候、又下女は親里澁谷の者にてこれへ歸し候と申上ぐれば、町の者に仰付けられ其坊主大方此女の許にあるべし、これより直に立越し吟味致せと仰せければ、案内知る人を前に立て其宿に行けば、件の法師衣脫捨て近江鮒の燒頭せし所を女とともに捕えて御前に出しける、時に此女を召されおのれ此脇差は早桶に入れしを人の氣の着かざる時盜隱して其後あの坊主と馴合ひ、妻子が歎くを能く識りて斯くは企みて金銀大分取るべき心根、主人に惡名を與へる曲者と御穿議遊ばすに少しも違ず、二人ともに御仕置に逢ひけるとなり、

●京に隱れも無き女房去

昔都の町小川通りに車うちとて名取の糸屋あり、此店は女をひとつは飾なれば姿の花車を好む中に、此主別して色深く一代に女房去る事二十八九人までは世間の人も數へて笑ひ、これほど惡き事も後は言止みてなほ又十日も尻をためず追出せど、京の廣きゆゑ此男を知らず嫁入して來る女は盡せざりき、されども淫酒の二つほやめず、一夜のうちに去荷出せば送荷運び、後には仲人なしに祝儀を濟ましぬ、これも盡くる時節ありて次第に木伊乃の如くなり、つひに睡れるやうに命終りぬ、此時の女房は宵に緣組して明の日後家なりぬ、此死人に一子も無く弟に賢からぬもの同一家にありけるが、町中これに不便を懸け後家と一ッにして跡を襲する内談せしに、後家が虎落者にてなか〳〵人の差圖を合點せず、財寶少し分けて追出す思案して、萬事は後家に讓るなり我最期の時に斯くなるこそ緣深きといふものなれと、くれ〴〵の言置と死人を證據にして我儘を申せば、既に御前沙汰になりぬ、弟に家を襲せ後家には相應の心付して送るべし、何か後家の家を繼ぐべき仔細なしと仰せければ、此女口賢く後家とは後の家と書き候へばしるまじきものにもござ候と申上ぐる、文字穿鑿まで女には利發者なり、未だ若盛によもや後家立てかね申すべきと、其方が身の爲に

また縁付の心得を申事ぞ、大方の身持にて女の後は立て難し、よく〳〵分別極め重ねて出づべしと仰渡され、又裁許に出でし時後家は墨染の法衣を着て殊勝顔に見えける、これは殘り多い事何の爲に斯くはなりけるぞ、後夫求める覺悟にござなく、連合の菩提弔ひ申したく姿を變へたる段々申上ぐる、出家とは家を出づると書けば其家を追出せと仰せけるとなり、

本朝櫻陰比事卷之二　終

本朝櫻陰比事

卷之三

一　惡事見えすく揃帷子

二　手形は消ても正直が立つ

三　井戸は即ち末期の水

四　落し手あり拾ひ手あり

五　念佛賣つて金子の聲

女中十六人同じ枕の夢

身に覺えあれば眼の合はぬと

町中寄つても濟まぬ顔色

白いも黑いも埒の明く事

よしなき罪をつくり鬼

此世彼世の境め見る事

賴まれて無分別もの山

家の道者顔をする事

嫌はるゝ中の一人住居

思入後生大事といふ事